

983
103

レスコーフ
書院の人々
社
| 東京 丸の内

104
思東選書

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5

始



清 國 の 人 々

著 者 氏 名

著 者 氏 名

レスコーフ

僧院の人々

2

神西清譯

104

思索選書

僧院の人々

—年代記—

983
103



26526

目次

第三編	九
第四編	二五
第五編	一七五
解説	二八七



僧院の人々 下卷

東京 東京 東京
三 四 五
目 録 目 録

大

第
三
編

附
録
の
人
が
手
紙



テルモシヨースフとその一黨が町長宅の大夜會に到着するより前に、トゥベローゾフはもう一時間あまりも、貴族團長のトゥガーノフを相手に、他に人をまじへぬ雑談の時をすごしてゐた。老法主はこの貴賛に向つて、われわれのお馴染みの例の日記のなかでこぼしてゐたのと同じ愚痴をこぼして、相も變らぬ古くさい冗談口の應酬を受けてゐた。

「かう何もかもがぐらついて當てにらんやうでは、世の行末が思ひ遣られますわい」と、眉根を寄せながら法主が歎くと、貴族團長はにやにやしなから、かう答へるのだつた。――

「まあさう先のことをよくよしなさんなよ。」

「理想もなければ、信仰もない、大いなる先祖の功績を敬ふ氣持もない。……これぢやあ……これぢやあ、ロシヤは滅びませうて。」

「なあに、滅びるのがさだめなら、どつちみち滅びるのさ」と、トゥガーノフは平然として答へて

席をたつと、かう附け足した。「それよりはまあ、お客さんがたの集つて席へ行つてみませうや。いくらかうして話し合つてみたところで、あんたとわしとちや結局結着はつきさうもないて。あんたは凝り性ぢやよ。」

法主は立ちどまると、むつとした聲でかうたづねた。――

「何でこのわしが凝り性なのかな？」

「だつてほれ、何ごとにも喙を入れたがる、何ごとにもうるさく付き纏ひたがる――やれ『理想』ぢや、やれ『信仰』ぢや、と言うてな。仕方がないではないか、さうしたものの時代は、もう過ぎてしまつたのぢやよ。」

トゥベローゾフはにっこり笑つて、ほつと短く溜息をつくと、さうぢやない、信仰や理想の時代が過ぎたのではない、單なる口舌の時代が過ぎたのだ、と答へた。

「ぢやあ、實行をやつたらよいではないか。」

「その實行の種が、今どきはとんと見當らんでなあ。」

「一たい何が欲しいのぢやな？」

「功績よ。」

「ぢやあその功績を立てたらよいわ。だが但し、どのやうな意氣合ひの功績ぢやな？」

「がつしりした意氣合ひのぢやよ、颯風のやうな意氣ぐみのぢやよ。……火消し役までが燃え上つてしまふやうな奴ぢやよ！」

「なある、なある、なある！ さては喧嘩がしたいと御しやるのぢやな！ それはいかん、仲よくやつて行くに限る。」

「いやバルメン・ニコラーエヴィチ、近ごろはそのやうな仲裁めいた言葉を、耳にたこが出来るほど聞きますわい。ぢやが、相手が義理も作法もわきまへん手合であつたら、仲よくやつて行くもなにも出来ん相談ではありませんかな。そんな平和は何の役にも立ちません。昔の諺にもあるではないか、『手打ちの酒は叩いたあとから』とな。」

「ぢやあどうあつても『叩く』氣ぢやな！」

「それをせんでどうしよう？ どうあつても叩くのぢや！」

「いやはや貴僧といふ人は、ねつから神學校の生徒ぢやなあ！」

「べつにわしは、名門の出ぢやなどと名乗つた覺えはござらんよ。」

「だがな、それではつまり、自分から苦を求めるやうなものではないかな？ つまらんことでわざわざ苦を求めるのは、それは愚といふものぢやよ。まあいづれ佳い折の廻つて来るまで自重したらよいではないか。」

「なにもわしがせんまでも、君子自重の輩ならいくらでも居るわ、わしはどうあつても自分の義務を果さんでは氣が濟まんのだ。」

「そりや勿論、貴僧が心ゆくまで自分の義務を果したいといふのを、わしとて何もとめだてをするつもりはないさ。大いにやりなされ、恥なき奴ばらをやつつけなされ――眞先駈けて、腹の蟲のをさ

まるまでやりなされ。だが、この邊でもう、とにかく主人夫婦のところへ行かうではないか。わしはあまり長座は出来ないのでなあ。」

法主はトゥガーノフのあとについて、傲然とした歩みぶりではあるが、その實ひどくがっかりした氣持で、進んで行つた。今の會談がこんな結末にならうとは、彼の夢にも豫期しないところだつたのである。さりとて、では何を期待してゐたかといふことになる、自分でもまづ見當はつかなくつたらう。

二

テルモシヨールソフが、ヴァルナーヴァと自由主義夫人とを従へて宴會の席に到着したのは、トゥガーノフとトゥベローゾフが廣間を通り抜けて、小さな客間に陣どつたあとのことだつた。ほかの客たちは廣間に思ひ思ひの場所を占めて、雑談をしたり、ピアノを鳴らしたり、歌をうたはうとしたりしてゐた。ちやうどその時、テルモシヨールソフ、ビジューキナ、ヴァルナーヴァの三人が、その廣間へずつと通つたのである。

主婦は彼等を出迎へて、ビジューキナには珍客をお連れ下さつて有難うと禮をいひ、テルモシヨールソフには、角張らずに無造作においでが頂けて忝いと禮を述べた。

「わたくしどもごく無造作な人間だものですから、無造作な方々が大好きで」と、彼女は客に向つて言つた。

「いや、僕もやつぱり至つて無造作な人間でしてね」とテルモシヨールソフは答へ、さう言ひながら頗る腰のひくいお辭儀をすると、大いに愛想のいい微笑を浮べ、靴の踵をトンといはせさへしたものである。

この有様を目にしたビジューキナは、本心を打ち割つたところ、まるで棒を呑んだみたいにしやちこ張つて直立不動の姿勢をとつてゐるプレポテンスキイの態度の方が、はるかに立派だと思つた。ふとした偶然であつたか、それとも新來のお客様がたは一段と眞面目な連中で、お嬢さん達相手にげら笑つたり、ばかげた世間ばなしや下手くそな歌を拜聴したりするのは似合はしくないと氣を利かしたものであつたか、とにかく主婦はそこから眞直ぐテルモシヨールソフとプレポテンスキイとを小さな客間へ案内した。そこにはトゥガーノフ、プロドマーソフ、ダリヤーノフ、サヴェーリイ、ザハリヤ、ならびにアヒラの面々が、ずらりと陣どつてゐたのである。

ビジューキナは、どの邊が自分にとつて居心地がいいかぐらゐの見當はついてゐたのだが、さすがに自分の騎士たちのあとについて客間へはいつて行くほどの勇氣もなく、さりとて奥さん連中とお交際もぞつとしないので、扉のそばに腰をおろした。

プレポテンスキイとテルモシヨールソフがはいつて行つた客間は、手狭な一間であつた。その正面の奥には、小卓を控へたソファが据ゑてあり、それにトゥガーノフとトゥベローゾフが陣どり、そのく

るりを圍んだ椅子には、おとなしいベネファクトフ、ダリヤーノフ、郡貴族團長のプロドマーソフの三人が坐つてゐる。アヒュラは腰をおろさず、空いてゐる肘掛椅子のうしろにつつ立つて、片手を靠れの彫りに掛けてゐた。ビジューキナが見てゐると、テルモショーフは客間へはいりながら恐ろしく恭しいお辭儀をして、おまけに……これは多分誰一人として夢想だもしなかつたところだらうが、いきなりつかつかとトゥベローゾフのところへ歩み寄つたかと思ふと、彼に祝福を乞うたものである。これに誰よりも一番びつくりしたのは、言ふまでもなく當のサヴェーリイ師で、突嗟にはどうしてよいやらちよつと戸惑つた形をさへ見せ、とどテルモショーフの求めた祝福を與へはしたものの、混亂の色は蔽ふべくもなかつたのである。かてて加へて、テルモショーフが彼の手に接吻しようとしたので、法主はすつかり度を失つてしまつて、大急ぎで自分の手をテルモショーフの片手もろともぐいと下へさげて、ぎゅつと握りしめざま、この裏切者の手をまるで無二の親友の手でもあるかのやうに、勢ひよく打ち振つたのであつた。

テルモショーフはザハリーヤにも祝福を乞うたが、日頃おとなしいベネファクトフは俄然この際トゥベローゾフよりも當意即妙の才を發揮して、——祝福を與へたばかりでなく、更に何等うたがひ危む氣色もなく、このべてん師の唇へと自分の黄ばんだ小さな手を差し出したものである。

すつかり脱線したテルモショーフは、お次はアヒュラにまで祝福を求めようとしたが、こつちは勇壯に片足をぐいと後へ引いて會釋をすると、客に向つてかう言つた。——
「わしは補祭でありますで。」

それから二人は互ひに握手をかはし、アヒュラは自分がその後突つ立つてゐる例の肘掛椅子をテルモショーフに「どうぞお掛けなすつて」と勧めたが、テルモショーフは鄭重にその光榮を辭退して、ザハリーヤ師の傍にあつた手近の椅子に席を占めた。その一方プレボテンスキイは、慣例のやかましい自分の學校のしきたりに忠實なところを見せて、思ひつきり下座へさがると、廣間へ通ずる開け放しの扉の向ひに座を占めた。

こんな工合に席を選ぶことによつて、彼はまづ第一に、世間つき合ひは眞平御免といふところを示すとともに、第二には其處からならビジューキナの姿が見られるし、彼女の方にしても彼の述べる言葉がみんな聞える筈であつた。教師としては、テルモショーフの來着以來とみに動搖を來した自分の株價を、この際せひとも引上げて置かねばならぬと感じもしてゐたので、今や席を占めるとともに、何か議論を吹つかけて、ビジューキナの前に自分の智力の優秀は示せないまでも、せめては志操の清さなりとも見せつきたいものと、虎視眈々と最初のきつかけを窺つてゐた。一たい議論を吹つかけるつもりなら、どんな言葉尻だつてその口實になるものだから、ヴァルナーヴァもさう長く沈黙の無聊をかこつ必要もなかつたのである。

新客たちがはいつて来たとき、貴族團長のプロドマーソフはちやうどトゥベローゾフを相手に、僧門に今日行はれつつある改革の問題を辯じ立ててゐたが、テルモシヨソフとヴァルナーヴァが席を占めると見るや、再びこの話を蒸し返したのであつた。

郡貴族團長は改革運動の擁護者であつたし、トゥガーノフにしても同じことだつたが、このとき縣貴族團長はやをら口を挿んで、昨日自分は僧正にお目にかかつたが、貌下には頗る言葉づかひに慎重を期してをられたものの、四方山のお物語のなかで、ふとこんな冗談を仰せられた。それはほかでもないが、僧門の相續制度が廢止になると、したがつてこの國には、最も純血なロシア種族が斷絶してしまふことになる、との仰せであつたと披露した。

「それはどういふ意味でござりまするな？」と、ザハーリヤが聞いたがつた。

トゥガーノフは彼に説明して、僧門にロシア種族の純血さが保たれてゐるやうに貌下が仄めかされたのは、僧侶階級では雜婚が行はれてゐないからであらう、と言つて聞かせた。ザハーリヤはそれでもまだ分らないので、トゥガーノフはまた助け舟を出さなければならなかつた。

「早い話がかうぢやよ」と彼は言つた、「つまり僧門の人達は僧門同士にしか婚を通じないから……」

「さやう、僧門同士でございます、僧門同士で。」

「ところで僧門の人はみんなロシア人ぢやでな。」

「いかにもロシア人で。」

「だから、そこでつまり、僧門には純なロシアの血が流れてをるが、ほかの階級には色んな異民族の血が、ポーランド人ぢやの韃靼人ぢやの、ドイツ人ぢやのスエーデン人ぢやの、そののみか……ユダヤ人ぢやの血までが混つてをる、といふ次第ですわい。」

「いやはや何ともはや、ユダヤ人の血までがな！——ちよつ、汚らはしい！」とザハーリヤは言つて、ぶつと唾を吐いた。

「それに、スエーデン人にしたつて、一筋縄で行く手合ひぢやないですて。——ほかの民族と雜婚するなんて、まつたく後の祟りが恐ろしいこつてすなあ！」とアヒュラもばつを合せた。

法主は打見るところ、補祭が何か突拍子もないことを言ひ出しはしまいかと心配になつたらしく、この民族談義を打ち切りにするため、かう口を挿んだ。——

「さやうさ。うちの大僧正様はなかなか機鋒の鋭い方ですのう。」

「あの人はおまけに、何か『乳』のことで書かれたことさへおありですからなあ」と、遙か離れ小島からプレポテンスキイが合の手を入れたが、彼の言葉に應ずる人は誰もなかつた。

「それになかなかのユーモリストでしてな」と、トゥガーノフは續けた。「あの市まちに新しくやつて来た若い憲兵さんがありましたつけが、これがどうも頗るもつて暢氣屋でしてな、自分に出来ないことは何一つないと自惚れてゐた次第です。」

「さうですとも、まつたく憲兵に出来ないことは何もありませんよ」と再びプレポテンスキイは聲を出したが、またしても黙殺されてしまつた。

「ところでこの先生がね」とトゥガーノフは先を續けた、「あなたがたの僧正さんのお宅で飯の御馳走になつた人がこれまで一人もないといふ話をききましたね、それぢやこの俺が一つ御馳走になつてみせる、そしてあの老人を思ひ知らしてみせる、つてクラブで警察署長と賭をしたんですよ……」

「いやは何ともはや！」とザハーリヤが歎息した。

「さてそこでね、この剛の者が僧正のお宅へ押しかけてね、晝の勤行の済んだところへやつて來たなり、すつかり神輿かみこを据ゑていつかな動かうとしない。とどのつまりもう痺れが切れちまつてね、夕方六時が過ぎたころ、それではこれでお暇をと言ひはじめた。ところが、それまで相手に喋らせて置いて、自分はだまつて拜聴してござらつしやつた僧正さんが、この時口をひらいてな、それはいけません、ひとつ愚僧と食事をともにして頂きたいもので、と仰しやつたものぢや！　そこで相手は、耳をまるで兎みたやうにびんとおつ立てをつた、——賭に勝つたのぢやからなあ。さてその後まだ小一時間、僧正は何とかかとか客を引き留めて置いて、やがて食堂に案内をされた。」

「あいや、そりやまつたく無駄なことをされたのですわい」とザハーリヤが言つた、「無駄なこつてすわい！」

「ぢやが、まあ先をお聴きなされ。さて食堂へ二人が通ると、僧正は聖像の前に立たれてな、祈禱を上げはじめられたが、その祈禱が長い長くないのつて、入れ代り立ち代り色んなお経が出て來てな、際限がないのぢや。また一時間たつてしまつた。腹へこのお客さんはもう腰が抜けさうにふらふらぢや。」

そこでトゥガーノフは一息入れて、

「さあ、では料理をここへ、と僧正が言はれるとな、給仕の者が心得て、浅い小皿を二枚出した。その中身は、乾パンの小切れを浮せた豌豆のスープであつたが、それでやうやつと件んの士官さんの食慾が刺戟を受けたかと思ふと、もはや僧正はさつさと席を立たれてしまつた。そして仰しやるには、では御一緒に食事の感謝を神様に捧げると致しませう、とてな、またも祈禱をはじめられたが、今度といふ今度はさしもの剛の者も終りが待ち切れず、こつそり部屋から抜け出すとそのまま一目散に逃げうせてしまつた。とまあこのやうな物語を昨晩親しくされましてな、打笑つてかう仰しやつたすぢや、——『ああした連中には附ける薬がありませんわい、祈禱と斷食のほかにほのう』とな。」

「あの方は警拔なところもおありなされば、また相手の氣心を心得て、氣持のよい扱あしらひをして下さる方でもあります」とトゥベローゾフはぼつりと語を下したが、その言方には何となく、今の逸話めいた物語によつて不愉快な氣持にさせられた、といつた調子があつた。

「左様さ。ぢやが矢張りあの方も、『人物がをらん』といつて歎息してをられますわい。『さながら深い淵をば、酔ひどれの水夫かこどもの操る安定やすらのわるい船に乗つて漂ふやうな有様ですわい。どうかまあ神様の御加護で、暴風がなければよいがのう』と仰しやつてなあ。」

「沈痛なお言葉ですなあ」とトゥベローゾフは應じた。

「ところでな」と、トゥガーノフは再び口を切つた。「あந்தの町のことは、あそこは安心ぢやと言うてをられましたわい。あそこには任して置ける僧が二人をる、一人は賢い男ぢやし、も一人は敬

虔な男ぢや、とな。」

「賢い——といふのは、つまりサヴェーリイ師のことですな」とザハーリヤが引き取つた。

「賢い——といふのがサヴェーリイ師にちがひないとは、どうしてまたさう思はれるのかな？」

「何故と申して……法主様は聡い方でありまして」と、どぎまぎしてベネファクトフは答へた。

「そして、その二番目に出てるのがザハーリヤ師なんで」と補祭が傍から口を出した。

トゥベローゾフは彼を咎めるやうに、頭を振つてみせた。アヒルラは大急ぎで失言を取消し、あらためて言ひ直した。——

「ザハーリヤ師のことを、敬虔な人ぢやと大僧正がおつしやつたのは、つまりこれまでザハーリヤ師のことを兎や角いふやうな人が一人もなかつたからに違ひないですて。」

「さやう、わたしは人から兎や角いはれたことはありませんわい」と、ザハーリヤはほつと溜息をついた。

「一方サヴェーリイ師は、なかなか騒々しい人物ぢやて」と、トゥガーノフが冗談をいつた。

この瞬間こそ待ちに待つた絶好のチャンスだ、とプレポテンスキイは見てとつたので、好機をのがさず早速口をひらいて、僧門に騒々しい人がゐるとすれば、それはつまり密訴癖のある人間に相違ない。蓋し宗教的な良心といふものは自由無礙なものに違ひないから、と一家の見を披露に及んだ。トゥガーノフはうっかり用心を忘れて、プレポテンスキイに向ひ、良心の自由といふものは必要缺くべからざる美德だ、それがわが國に無いのは實に歎かましい次第だ、と答へた。

「さうぢや、それがないためにわれらの教會は、可哀さうに四方八方から愚にもつかん非難を浴びてをるのぢや」と、トゥベローゾフも自分の意見を吐き出した。

「と仰しやると、つまり何が悪いと仰しやるのですか？」と、プレポテンスキイは勢込んで法主に問ひかけた。

「他宗に對して寛仁の氣持がないことすわい」と、トゥベローゾフは素氣なく突つ放した。

「そのため別に、あなたに迷惑がかかるといふわけでもないのに。」

「いや、實もつて迷惑しとりますわい！ 例へばあなた方は、信仰などは絶滅してしまはねばならんと、聲を大にして自由に説教なさるが、それであんた方の身には別條がない。ところが假にわれわれが聲をひそめてひそひそ聲で、あんた方の學說などは絶滅するに限るとでも言はうものなら、それこそ……」

「ははあ、つまりそれがあなたの欲せられるところなんですわね！」と教師はすばりと遮つて、「あなたは、われわれを一網打盡にしまへと、いぬどもをわれわれの方へ曠しかけるんですわね。」

「それは違ひませう、あんた方こそわれわれをやつつけて了へと曠しかけてるんぢやないですかな。」

プレポテンスキイは返答につまつてしまつた。それを否定する氣にはなれないが、さりとして肯定するだけの勇氣もないのである。そこでトゥガーノフは助け舟を出して、法主さんが憤慨されてをるのは唯、純朴な心に棲む信仰の根を枯らすことを天職と心得てゐるやうな連中がゐる、といふことだけ

なのだ註を入れた。

「しかもそれが、おかみが大目にみてゐるお蔭でとんとん拍子で運んでゆくを見ると、いよいよ以てわしは憤慨に堪へんですわい。」

プレボテンスキイはにやりと笑つて、

「それがとんとん拍子でうまく運ぶといふのも、つまりは」と彼は言つた、「信仰といふものが所詮は贅澤品で、民衆には高價につくからですよ。」

「ですがな、酒を飲むよりは安上りですよ」と、トゥガーノフは一向氣乗りのしない調子で釘をさした。

「さう仰しやいますがね、飲むといふやつは——露西亞の愉樂たのしみでしてね、いはば民族的なものですし、火酒ウヰョトカにしても、とにかく信仰なんかよりは效能がありますよ。少くも、からだかばかばかして來ますからねえ。」

トゥペロゾフはさつと色を作して、自分の袈裟の袖をぎゆつとばかり握りしめた。ところがその時、トゥガーノフは教師に向つて、それは違ふと抗議を提出して、信仰は火酒ウヰョトカなんぞより遙かによく身を暖めてくれる。論より證據、わが國の百姓が何か善い行ひをする時は、まづお祈りを上げてからするが、それに反してシベリヤ送りになるやうな悪い行ひを働くときには、先づ火酒ウヰョトカを引つかけてからするぢやないか、と指摘した。

「ところがですね、酒の一手販賣は經濟學者のお蔭で廢されてしまひましたつけね」と、プレボテ

ンスキイは突然ひらりと論鋒を轉じて、「經濟學者連中の斷言するところによると、火酒は安ければ安いほど、飲む人は少くなるといふことでしたが、これは眞赤な嘘うそでしたねえ。もつとも、經濟學者はべつに嘘うそをついたわけでもないんです。——あの連中にしたつて、民衆の飲酒癖を少からしめるためには、酒の値段を安くするだけでは足りないぐらゐのことは承知してゐるんです。まだほかに大切なことは、社會の色んなことの現狀を革めることなんですよ。とはいつても、この新しい風潮のため努力してゐるのは經濟學者の連中ぢやなくつて、ただ……いはゆる『新しい人々』あるのみですよ。」

「さうさう、あのやくざな手合ひばかりですわい。しかも事はとんでもない仕儀になりましてわさ。」

「まつたくですね、あの人たちはスパイに引つかかつちまひましたからねえ。」

「いいや、ありやあ騙兒に引つかけられたのですわい。」

「騙兒に、ですつて！」

「左様。騙兒といふ手合ひはですな、これは一役買つて出ても萬更損ではなささうだと睨んだ騒動には、きつと横合ひから飛んで出て、まんまと出來上つたところをかつ攫つてしまふものでしてな。わが國では大分ながいあひだ、あの……ニヒリストとか言ひましたつけな、あの連中のことで大騒ぎをしましたつけなあ。一時は政府までが大騒ぎをやつたものでしたが、今でもまだ社會や新聞は大騒ぎをしてをりますな。ところで、あの手合ひに最後のとどめをさすものは、決して政府でも社會でも新聞でもないの、ただのそこのらの騙兒なんですわい。その騙兒どもは、あの手合ひのわいわい喚

き立てるのにうまく調子を合せてね、そのうちにまんまと相手を壓倒してね、それでやつと變動が生ずるといふ寸法なんですわい。」

プレポテンスキイは不安さうな眸をビジュリーキナに投げた。彼がすつかり途方に暮れてしまったのは、まるで春の靄が野面の雪堆を次第にむしばんでゆくやうに、トゥガーノフがじわじわと遠慮會釋もなく彼の自信を潰してゆくことであつた。ヴァルナーヴァは援兵を求めて、その念願に燃える眸をテルモシヨソフの顔へ移したが、テルモシヨソフはどだい彼の方を見向きもしなかつた代りに、先刻から「もうやめろ」といふ合圖を手でして見せてゐた補祭のアヒュラが、かう言つた。

「もうやめるんだね、ヴァルナーヴァ・ヴァシーリエヴィチ、——ちつとも面白くないわい！」

これで教師の怒氣は爆發してしまつた。おまけに、トゥガーノフまでがくるりとあつちを向いてしまつたに於てをやである。プレポテンスキイはここに於てか、遮二無二突つかかつて行つた。

四

教師はさつと席をたつと、トゥベローゾフを相手に話をしてゐるトゥガーノフめがけて走り寄つた。

「お話を失禮ですが……でも僕はとにかく……。僕は自由の味方ですから。」

「わたしも御同様ですわい。」と、トゥガーノフは又しても法主の方へ向き直りながら、さう答へ

た。「どうぞ失禮ですが、僕の話のきりを付けさして下さい！」と教師は大聲をあげた。

トゥガーノフは彼の方へ振り向いた。

「あなたは御承知ですか、自由は與へらるるものに非ず、獲らるるものなり、といふことを？」と

ヴァルナーヴァが問題を出した。

「ふむ、そこで！」

「もしあなたが仰しやるやうに、新人たちがやくざだとすれば、自由を獲る者は一たい誰なんです？」

「自然の數といふものがそれを獲るのですわい。」

「それにしたところで、つまり與へられるものではなくて、獲られるものだといふことになりましたね。僕の言つた通りだ。さう僕は言つたでせう、獲らるるものなりつて！」

「この方だつてそれと同じことを仰しやつてらつしやるぢやないか」と、椅子のうしろからアヒュラ補祭が口を出した。

「だつてさうでせう、獲らるるものなり、つて僕は言つたんだ！」

「でこのかたの方で何と仰しやつたと思ふんですかね」とテルモシヨソフは、同一意見を抱く者として補祭を支持した。「パルメン・セミヨノヴィチは君と同じことを言つてをられるのですよ」とテルモシヨソフは、わざわざ出来るだけはつきりと親切にトゥガーノフの名と父稱を發音しながら

ら、嚙んで含めるやうに言った。

「ぢやが、わしはもうお暇せにやならん」と、卓子を廻りながらトゥガーノフは囁くやうに言つて、廣間へ出て行かうとしたが、そこで又してもヴァルナーヴァに襲はれた。

「畏れ入りますがもう一言」と教師はくひさがつた。「今日では誰もかもが平等だといふことが、お見受けするところあなたにはどうやら面白くないらしいですね。」

「いやそれどころか、必ずしもみんながみんなまだ平等でないことが、わたしには氣に食はんですわ。」

プレボテンスキイはたと行き詰つて、一秒ほど間を置いて、舌もつれのする聲で、

「ね、これは動かすべからざる事實でせう、——萬人は平等ならざるべからず、といふことは。」

「だからさ、バルメン・セミョーノヴィチはちやんと、萬人は平等ならざるべからずと仰しやつてらつしやるぢやありませんか！」と横合からテルモシヨールソフは、彼を貴族團長の傍から押しのけながら言つた。

「ですが、ちよつと」と彼は、反對側から駈け戻つて來ようとしたが、今度はアヒムラが通さなかつた。

「やめとけ」と彼は言つた、「何を言はしても、馬鹿げたことばかりぢやないか！」

「いや御免なさい、後生です。僕は何もあなたと話をしてるんぢやありません」とプレボテンスキイは身を振りほどいて、今度は正面から廻つて、「僕はかう申し上げてゐるんです、——あなたはきつ

とイギリスがお好きに違ひない、あすこには殿様がおりますからね。……あなたとしては、階級的特權の消滅したことが、さだめし忌々しくもあり残念でもあるんでせう？」

「だが、本當に消滅しましたかな？」

「そこを退けつたら、お前は一つ知りやしないんだ」と、ヴァルナーヴァを押しつけながらアヒムラは突つばなしたが、こつちはぐるりと一廻りして、また貴族團長の正面へ出て來ると、かう言つた。——

「何ごとにもまれ、幾つかの意見があり得るわけですからねえ。」

「そこでこのわしは、どんな意見にしたらお氣に召しますかな？」と、からからと打笑ひながらトゥガーノフは大音聲をあげた。

「僕はかう言つてるんです……色んな判断が下し得るものだね。」

「ただ片つ方は賢明なものだが、もう一方は愚劣である、といふ違ひだけでね」と、テルモシヨールソフがまぜつ返した。

「片つ方は尤もだが、もう一方は尤もでない、ですかな」と、取りなし役の形で貴族團長が口を入れた。

「神様にも——神様のところだつて矢張り眞實は一つですからなあ！」と補祭が、さも説き聽かせるやうな口調で言つた。

「二つの點の間には一本しか線が引けませんからなあ、もう一本引かうたつて無理ですからなあ」

と、テルモシヨールソフが諄々として訓誡口調で言つた。

プレボテンスキイはカーツとして前後を忘却してしまつた。

「そりや一體なにごとです？ そんな話しやうつて全體ないぢやありませんか！」と彼は金切聲を立てた。「僕は一人だ、そこへもつて来てあなた方は、みんな揃つて仲間褒めをやつてるんだ。そいぢや誰だつて言ひ負かされちまひますさ。ただ一つ僕のはつきり言へることは、僕は古臭いものは何一つ尊敬しないといふことだけです。」

「それがそもそも古臭いことの骨頂さ。……この國で歴史の尊重された例しが曾てあつたかね？」

「これさ、聴きなさいつたら！ もうほざくのはやめやめ、このお馬鹿さん」と、親身な調子でアヒルラはヴァルナーヴァに忠告したが、その一方ビジューキナは、さも見下げ果てたといつた面持で、彼から顔をそむけた。テルモシヨールソフに至つては、彼を傍へ押しつけようとすはすみに、ぎゆつと彼の足を踏んづけてしまつたので、生來なにか進退きはまつたやうな時にはつい口數が多くなつて、しかも言ふべき言葉を取りちがへる弱點のある教師は、金切聲を立てて叫んだ。

「あ痛つ、あなたといふ人は、^{*}ひとの大事な胼胝を踏んづけるなんて！」

この『大切な胼胝』云々から、一座は思はず失笑したが、トゥガーノフはそのひまに早くも主婦と別れの挨拶を交してゐた。

しやんしやんと鈴の音がしだして、いきのいい驛馬が六頭そろつて、玄關口に停つてゐるトゥガーノフの馬車へと駆けつける一方では、鬨の上にはぬつとばかり、脊高のつぼの従者が、イギリス風の

旅行袋を肩から斜かひに、直立した。プレボテンスキイにとつては、まだ自分の身を縛しめから救ひ出すために使ひ得る、最後の瞬間が到来したわけである。そこで彼は、自分を抑へてゐるテルモシヨールソフとアヒルラの腕を振りちぎると、例の『大事な胼胝』を惜しげもなく踏まへて跳ねあがりながら、貴族團長につめ寄りさま、かうたづねた。

「あなたはツルゲーネフを読みましたか？ あの『煙』を。……あの男は貴族作家なんです、あの書いたものの中に、ロシアでは一切が煙だといふことが、立派に證明してありますねえ。『答、それすら自分が案出したものぢやない』つてね。」

「左様」とトゥガーノフは答へた。「いかにも答は外國の智慧を借用したものに違ひないが、その代り農民を土地付きで解放するといふ手は、自分で發明したものでしたね。それを一つツルゲーネフ先生に教へてやるんですな。」

「ところが本當は、農民を土地ぐるみ地主から召し上げたぢやありませんか」と、プレボテンスキイは言つた。

「召し上げたとな？——そりや嘘ぢや。發議の譽れは、畏れながら陛下にあるのぢやし、犠牲の功は貴族にあるのぢや」と、堪へ兼ねたトゥベローゾフが口を挟んだ。

「鶴の一聲で、お上品な貴族連中は、仰せに倅るだけの勇氣が出なかつたんでさあ。」
「いや、貴族はそもそも仰せに倅るなどといふ大それた氣持はなかつた」と、トゥガーノフは應じ

* ひとの大事な胼胝を踏んづける——ひとの痛いところに觸れる、弱點を衝く、ほどの轉意を有する慣用句。

た。

「とにかく、官は農民を召し上げたのです。」

「官もさうなら、時代も亦さうなのですわい。現に祝福帝アレクサンドルは、一生涯農奴の解放を念願せられたものぢやが、事はうまく運ばなかつたし、またバルト沿岸の獨逸諸侯のところでは、今なほ事は運ばずにをる。」

「獨逸人の方が利口だからでさあ。」

トゥガーノフはからからと笑つて、片手をトゥベローゾフの方へ差し伸べ、軽い蔑視の調子をひびかせながらヴァルナーヴァにかう言つた。――

「お別れする光榮を得ますわい。」

「どうもお構ひなく、だが僕はとにかく、今後とも貴族や自然権には反対ですよ。」

このプレボテンスキイのそはそはした様子には、満座の人々も微笑を禁じ得なかつたが、もう立ち去るばかりになつてゐたトゥガーノフは、わざわざちよつと歩みをとめて、彼にかう言つた。――

「ところで、一ばん自然な形の生活は何かといふと……それ、あのやうにわしの用に牽いて出した馬どもの生活ですわ。したが御覽の通り、車につながれて貴族を乗せて行きますわい。」

「おまけに途々、もつと早くやらんか、もつと早くやらんかと、びしびし鞭を浴びせられませあね」と、補祭が透かさず言葉を挟んだ。

「さうですとも、畜生といふものは、のべつひつ叩かれるものですよ」と、テルモショーソフも肩

を持つた。

「そらまた、寄つてたかつて、ひとをやつつけるんだ！」と教師は金切聲を立てて、それにしてもやつぱり自分は、依然として貴族に反抗するものだと言論した。

「ぢやあ、つまりお前さんは、謀叛人つてわけだな」とアヒルラが言つた。

「底無しの上にも底無しに呼掛けて來をる」とザハーリヤも合槌を打つた。

「ところであなたは、底無しが底無しを呼掛けるといふのがどういふ意味だか、御存じですか？」と、早速ヴァルナーヴァは喰つてかかつた。「そりや、あなたが自分で自分の悪口を吐いてゐることになるんですよ。つまり、底無しが底無しを呼び掛けるつて云ふのは、坊主が坊主を招ぶ、つてことですぜ。」

これは一同の耳に面白くひびいたので、打融けた笑聲が満場を壓した。

ひとりトゥベローゾフだけは憤ろしげに兩眼をぎろりと光らせて、胸の十字架の吊つてゐるリボンをぐいと引つ張ると、そのまま客間の方へ出て行つてしまつた。

「御老體はどうもすつかり常軌を逸してしまひましたなあ」と、その後姿を顎でしやくひながら、トゥガーノフが言つた。

「まあさう仰しやらないで、何せ新聞を購讀して、それが二六時ちゆう頭から離れず、しよつちゆう溜息ばかりついてゐる始末で、何事につけ冷靜な判断が下せないんですから」と、ダリヤーノフが

* 祝福帝アレクサンドル――露帝アレクサンドル二世を指す。農奴解放が斷行されたのは一代置いてアレクサンドル二世の治世であつた。

答へた。

「レッ、聞えますよ」と、アヒルラが小聲でささやいた。

サヴェーリイは本當に、すっかりそれを耳にしたのだつた。

トゥガーノフは階段をおりて、馬車の中に腰をおろした。主人夫妻と、お客の中の數人と、ヴァルナーヴァと法主とが、その見送りに立つて來た。ヴァルナーヴァは頗る意氣が昂つてゐた。といふのは他でもない、例の『底無し』問答以來、彼の相場がみるみる上つて來たやうな氣がしたからで、彼は矢庭に猛然とトゥベローゾフの袖を引つつかむと、かう言ひ放つた。

「ひとつお尋ねしますがね、僕は一昨日お寺に行つたところが、さる法主が『馬鹿』といふ言葉を口にするのを聞きましたつけ。法主が『馬鹿』と唱へたら、唱歌隊は何と唱つたらいいもんですかね?」

「唱歌隊は、『教師プレポテンスキイ』と三度うたふがよいわい」と、サヴェーリイは突つ放した。この思ひがけない返答に、並居る者は一瞬間啞然としてしまつたが、突然どつとばかり氣ちがひじみた笑聲を立てて笑ひ崩れた。トゥガーノフは片手を振ると、非常な上機嫌で立去つて行つた。

五

今やプレポテンスキイの身の周りは、下世話にも言ふとほり八方塞がりの有様だつた。婦人のなか

には、要するに會話の運びだけを大切に思つて、男連中の話の中身なんかはどうでもいい、唯それが話聲になつてゐさへすれば——と觀じてゐる、いはば『どうなりと御勝手』主義の連中がゐるものが、その連中までが彼を輕蔑してしまつたのである。その一方テルモシヨソフは、やうやくにして實力を發揮しはじめ、一座の注目をさらつてしまひつつあつた。ヴァルナーヴァが振り返つてみるかみないかのうちに、早くもテルモシヨソフは、並居る婦人の全部とまんべんなく話を交してゐたが、中でも郵便局長の奥さんに對する態度は甘いものつて、プレポテンスキイの見解によれば、べたべたして土臺見てゐられるさまではなかつた。その御機嫌の取りやうときたら、女性に對するそれではなくて、何か至上至高の權力に對するそのやうだつた。

やがて夜食になると、テルモシヨソフは婦人連をはなれて、男連中の仲間入りをし、一同と酒杯をあげた。その飲みつ振りがまた至極手に入つたもので、したたかに煽るのだつたが、そのくせ一向に酔つ拂はず、その席で急にアヒルラや、グリヤノフやザハリーヤ師と仲よくなつてしまつた。それのみか一度ならずトゥベローゾフとも話を交へはじめたが、老人の方では大してこの交際に乘氣にならなかつた。それに反してアヒルラは、一時間か半時間ほど話してゐるうちに、滿座の者が呆れたことには、不意にテルモシヨソフと『君、僕』呼ばはりやり始め、その手を握る、その厚ぼつたい唇にキスをする、果ては彼の苗字を呼びいいやうに崩してしまふ、といつた親密ぶりだつた。

「いやどうも、まつたくこのテルモシスカは天晴れ好青年ですなあ」と、補祭は一同に向つて吹聴した。「ええ、どうです、今われわれが二人であるのヴァルナーフカを退治したところは。みごとで

せう？ ねえ君、テルモシヨースシカ君、いつそのこともう何處へも行かんで、いつまでも僕等と一緒ににわたまへよ。ペテルブルグへ歸つてみたところで、一體なんの面白いことがあるんだね？ 此處にありや、冬になつたら一緒に狐狩りが出来るんだぜ。素晴らしいぜ、兄弟！ さうぢやないか？」

「さうだ、さうだ」とテルモシヨースフは合槌を打つて、こつちも負けずにアヒルラのことを褒めはじめ、彼を好漢と呼ぶのだつた。そしてこの好青年と好漢とは、またあらためて接吻を交すのだつた。

やがて宴も果てようとして、パハーリヤとトゥペローゾフがそろそろ歸り仕度をしてゐると、テルモシヨースフはアヒルラの袖をひかへて、かう言つた。

「君はべつに急がないんだらう？」

「ああ、まあさう急ぐ用もないさ」とアヒルラは答へた。

「ぢやあちよつと待ちたまへ、一緒に行かうぢやないか！」

アヒルラが承知すると、テルモシヨースフはピアノに合わせて少し踊らうぢやありませんかと提議して、先づ最初は例の郵便局長の奥さんを相手に、次には、そのお嬢さん達を相手に、それから二人か三人のほかの婦人を相手に、そして最後にはビジューキナを相手の殿りに、といつた順序で踊りまはり、その擧句には補祭と抱き合つて、彼とワルツを一踊り踊つたが、やがて婦人に對する作法そのままに彼を元の席へ坐らせると、その手を自分の唇のところへ持つて行つたが、さすがに接吻したのは自分の手であつた。

まさかそんな事にならうとは夢にも思はなかつたアヒルラは、すつかりあわてて、ぐいと自分の手をテルモシヨースフの手から抜いたが、相手はからからと哄笑して、かう言つた。

「おや君は、僕が君のむさい手に本當に接吻するとも思つたのかい？」

補祭はむつとして、肚の中で『こいつは、あんまり親しくする相手ぢやなさうだわい！』と考へた。とはいへ、そのすぐ後で一同が別れを告げて歸途につくと、彼も仲間はずれにはならなかつた。

郵便局長の家族、補祭、ヴァルナーヴァ、テルモシヨースフ、それにビジューキナといふ同勢であつた。彼等は郵便局の奥さんと娘さん達を家まで送りとどけたが、そのの、つい部屋の鬨ぎはで、アヒルラは局長夫人がテルモシヨースフにかう言つたのを耳にした。

「これからもちよいちよいお目にかかれませうね？」

「御念にはおよびませんとも」とテルモシヨースフは答へ、更に付け足して、「先刻あなたは、町長さんのお宅の壁に、帝室の御一族のお寫眞が残らず懸つてゐるのが、お氣に召したとか仰しやつてらつしやいましたつけね？」

「ええ、あれはとうから欲しくなりませぬの。」

「ぢやあ一つ、僕が明日そろへて差上げませう。」

そして彼等は別れた。

おもては既に真夜中の二時といふ時刻で、これは田舎町としては勿論すこぶる遅いのである。外で待つてゐたプレポテンスキイは、ふらふら歩き廻りながら、どつちにしたら無事に家まで歸れるだら

うかと、しきりに胸算用をしてゐた。アヒュラが氣の附かないやうにこつそりこの場を抜け出した方がよからうか。それともあべこべに、彼の度量のひろさに信頼した方がよからうか。といふのは他でもないが、ヴァルナーヴアはいつか、コーカサスのチェルケース族の手から無事にのがれるには、敵の度量に身を任せるよりほかに手が無い、と書いてあつたのを讀んだことがあるからで、どうしたわけだか今この場合、アヒュラをこのチェルケース人なみに考へる氣になつたのであつた。
だが、ブレボテンスキイがはつきり決心の臍を固める前に、テルモシヨソフがすつかり何もかも別の軌道へ乗せてしまつたのだつた。

六

彼等が郵便局長の奥さんと別れるが早いか、テルモシヨソフは早速、どうあつてもこの際みんな一緒にビジューキナの家にちよつと立寄りなければいかんと言ひ出した。

「いいでせうね？」と彼は、主婦の方へ半ば身を向けてたづねた。

こつちはその訊きぶりが癪に障つたが、とにかく『いい』と返事をした。

「ときにあんたんそこには、何か飲むものがある？」

ビジューキナは困つてしまつた。彼女はまるで故意とのやうに今日は酒をとりをやることを忘れて

わたし、さつき午食の食卓から下げたシェリー酒の最後の一瓶が、ほとんど空つぽだつたことまで序でに思ひ出した。テルモシヨソフはこの困惑の體を見てとつて、かう言つた。――

「ぢや、せめてビールでもあるかしら？」

「ビールなら、勿論ありますわ。」

「僕はちやんと知つてるさ、酒税役人のところにはビールが缺かさずにあることをね。そこでと、蜜はある？」

「ええ、蜜もありますわ。」

「うん、そりや結構だ。ねえ諸君、うちにはビールと蜜があるさ。そこで僕は、それを材料にして、とても素敵なラムポポをつくつて上げるよ……」とテルモシヨソフは自分の指にちゆつと接吻して、「その美味いことといつたら、飲む拍子について、自分の舌まで嚙み込んぢまひさうな奴をね。」

「そのランポポつていふのは一體なんだね？」と、アヒュラがたづねた。

「ランポポぢやない、ラムポポつていふんだ――ビールと蜜でつくる素敵もない飲物だよ。――さあ行かう！」と彼は、アヒュラの袖を引つ張つた。

「待つた」と補祭は尻ごみして、「ランポポだなんて、一體何だ？ われわれのところぢや葬式の時に飲むんだぜ……『蜜入りビール』つて云つてね。」

「ところが大違ひ、そんな蜜入りビールなんかぢやなくつて、正銘のラムポポなんだ。行かうてば！」

「いや、待つた！」と又もやアヒルは尻ごみして、「ちやんと知つてるよ、蜜入りビールに相違ないさ。……あいつをやつたら最後、とたんに足をとられちまはあ……俺は何と言はれたつてあれをやるのは眞平だ。」

「だから言つてるぢやないか、——ラムボボだ、蜜入りビールぢやないつて！」

「とにかく今日は頂戴しない方が無事らしいや」と補祭は答へた、「さもないと、明日は脳天ががらんがんにふ騒ぎだらうからなあ。」

プレポテンスキイも同じ考へだつたが、しかしアヒルやプレポテンスキイが自分の意見を固執すべく充分堅固な意志を持つてゐたにせよ、テルモシヨソフもいつかな自説を堅く執つて譲らず、到頭兩人をビジュキナの家へ引つ張り込んでしまつた。その案内者の意見では、『酒もり』は庭の四阿で催されなくてはならんといふことだつたので、直ちに其處へ大急ぎで酒の肴をはじめ、ビール瓶や蜜がふんだんに持ち込まれて、それを材料にテルモシヨソフは即刻例のラムボボを調合しはじめた。

ヴァルナーヴァ・プレポテンスキイはテルモシヨソフの傍に座を占めた。教師としては、なぜテルモシヨソフがトゥガノフの御機嫌とりをして、彼ヴァルナーヴァをやつつける手助けをしたかに就て、何はともあれ早速テルモシヨソフの釋明を求めるつもりだつたのである。

ところが、プレポテンスキイの呆れたことには、テルモシヨソフは彼を相手に喋る氣持なんぞはきれいに何處かに置き忘れて、彼に何か愛想のいい返事をするどころか、頗る苛だたしげな口調です

ばりと言つたものである。——

「僕は一視同仁さ。町人だらうと貴族だらうと、さてはまた黒百人組だらうとね。この際僕に政治の話なんかしないでお呉れよ、僕は飲みたいんだからなあ！」

「で、でもですね、あなただつて、神學校を教育で受けた人間の方がまじだといふことには、賛成されるでせうな」と、ヴァルナーヴァはしどろもどろの體で言葉を取り違へながら言つた。

「そらまた始まつた」とテルモシヨソフはすばりと遮つて、「さつきは『大事な胼胝』が出たかと思ふと、今度は『神學校を教育で』と來た！ いやはや大したキケロだよ！」

「この男は興奮するとね、よくこれをやるんでね。つまりこれを言はうと思ひながら、全然べつたことを言つちまふんですよ」と、アヒルはプレポテンスキイの辯護役を買つて出て、序でを以て、この教師がこの癖のお蔭ですんでのことに立派な知合ひを失くすところだつた、と披露に及んだ。といふのは、いつぞや彼がさる奥さんに、『マトレーナ・イヴァーノヴァさん、そのレモンを取つてください』といふつもりで、うっかり『レモン・イヴァーノヴァさん、そのマトレーナを取つて下さい』(！)と言つちまつたため、その奥さんは頗る侮辱を感じたのであつた。

テルモシヨソフは腹をかかへて呵々大笑したが、突然ヴァルナーヴァの片手をぐいと握つて、相手の頭を自分の方へ屈ませると、かうささやいたものである。

「さ、すぐ向ふへ行つて、僕の心覺えのために、さつき坊主どもや貴族どもから僕たちの聞いた會話を、書き留めて呉れ。分つたかい、あの、愈々その時機が到來したのだ、アレクサンドル一世には

出来なかつただの、オストゼー地方ぢや、今日なほうまく行つてゐないだの、といふ奴だぜ。……手短かに言やあ——洗ひざらひ残らずみんなだ……」

「なんだつてあんなことを？」と、今度は教師が驚いた。

「いや、そこまではもう君の知つたことぢやない。君は早くあつちへ行つて書きやいいんだ、その使ひ途はあとで分るさ、いいな？……われわれはそれに署名をつけて、その筋へ送るんだ。」

「何ですつて！ そりや一體なんですか？」と、プレボテンスキイは必死に両手を振りながら、大聲を立てた。「密訴するんですかい！ そんなことは眞平御免ですよ。」

「だつて現に、君はあの連中を憎んどるぢやないか！」

「で、それがどうしましたかね？」

「だからさ、憎いなら奴等をばつさりやつたらいいぢやないか！」

「なある、さう仰しやる、僕にばつさりやれと仰しやる、だが……僕あ密訴をするやうな卑劣漢ぢや……」

「ふん、ぢやさつさと出ていけ」とテルモシヨースフは相手を扉の方へ突きとばしさま、その言葉をすばりと断ち切つてしまつた。

「ははあ、『出ていけ！』と來ましたね、僕はやつとあなたといふ人の正體が分つた、あなたはアヒルラと一つ穴の貉なんだ。」

「出ていけ！」

「はいはい、はいはい。あなたは僕をラムポボに招んで置きながら、その代りに……」

「左様さ……そら、これがお前さんのラムポボだよ！」とテルモシヨースフは答へると、プレボテンスキイの後頸にびしりと峰打ちを食はせて、彼を扉の外に突き出すと、そのまま掛金をおろしてしまつた。

この一幕をとつくり見聞に及んだアヒルラは、鼻白んで、席から腰を浮かせると、自分の帽子を手にとつた。

「どうした？ どこへ行くんだい？」と、あらためて食卓に向つて腰をおろしたテルモシヨースフが彼にたづねた。

「いや、失敬します……僕は歸ります。」

「まあ一杯ランポボをやんなさいよ。」

「いや、さつぱり飲みたくなつちまつた、澤山です。ぢや左様なら、御機嫌よう」と言ひさま彼はテルモシヨースフに手を差出したが、相手は自分の手を與へるところか、彼の帽子をひんもぎつて、自分の椅子の下へ投げ込むと、『坐れ！』と絶叫した。

「いや、澤山ですよ」と補祭は答へた。

「坐れと言ふんだ！」と、テルモシヨースフは一喝して、アヒルラを力任せに引張つたので、相手は床几の上におつと唾を吐いた。

「お前、坊さんになりたいか？」

「いや、なりたくない」と補祭は答へた。

「なぜなりたくない?」

「人にも合はず、その器でもないからさ。」

「だがな、あの法主はお前さんを侮辱してゐるぢやないか?」

「いや、侮辱なんかしやしない。」

「だつて、それ、いつかお前さんの杖を取上げたといふぢやないか?」

「で、取上げたがどうしたね!」

「おまけにお前さんのことを馬鹿だと言つたぢやないか?」

「知らないね、言つたかもしれないがね。」

「だからさ、今日あいつの言つたことを、密訴しようぢやないか。」

「な、な、なんだつて?」

「つまり、かうやるんだ!」

と言ふなり、テルモシヨソフは屈み込んで、椅子の下からアヒルラの帽子をつまみ上げると、それを闕めがけて投げつけた。

「ははあ、これで分つた、お前さんはペテルブルグの卑劣漢なんだな」と補祭は、自分の帽子を拾はうと身をかがめながら言つた。だがその時早しその時遅し、彼は後頸のところにあんと耳も聳せんばかりの思ひがけない一撃をくらつたかと思ふと、庭の小徑の上に四つん這ひに伸びてしまひ、と

間髪を入れずその同じ小徑の上に彼の帽子がすつ飛んでくる。鼻さきのちよいと向ふにはプレボテンスキイが跪いてござる、といふ始末になつてしまつた。どうしてこんな仕儀になつたのやら、補祭は咄嗟には合點がいかない程であつたが、次の瞬間、扉口にテルモシヨソフが仁王立ちになつて、庭園用シャベルを振りかざして威嚇してゐる姿が目にはいると、やつとのことで今しがたの一撃がいやに幅つたいどすんとした感じだつた譯が呑込めて、かうぼやいたのだつた。――

「いやはや、成程これはラムボボだわい。御教授のほど千萬忝いぜ。」

さう言ふなり彼はヴァルナーヴァに向つてかう話しかけた。――

「どうしたい? 行かうぜ兄弟、今度はめいめいの家へな!」

「僕はだめだ」とヴァルナーヴァは答へた。

「なぜだ?」

「だつて僕は、どうやら身體ぢゆう青痣だらけらしいし、おまけに頭が痛いんだ。」

「へえ、『頭が痛い』なら、おつつけ頭痛もなほらうさ。さ、家に歸らう、送つてやるよ」と言ひながら、補祭は思ひやり深くヴァルナーヴァを扶け起して、庭の出口の方へ導いて行つた。戶外はそろそろ明るみだしてゐた。

庭の木戸をあけながら、アヒルラとプレボテンスキイは其處で思ひもかけず、ビジュエーキンにばかり出會つてしまつた。

自由主義の酒税吏ビジュエーキンは、背の高い、頗るつきの好男子で、その御面相も、別にとり立て

てこれといった取柄はないながら、決して悪相ではなかつたが、ちやうどその時、出先から戻つて来たのであつた。彼はアヒルラやヴァルナーヴァ、プレボテンスキイの顔を一瞥すると、快活にかう話しかけた。

「やあ、やあ、だが諸君、きみたち酔つぱらつて居るすなあ？」

「へべれけさ」とアヒルラは答へた。「正にへべれけと言つて差支へない次第でさあ。」

「何をさう御馳走になつたんですね？」とビジュンキンはたづねた。

「ランポポですよ、あそこで御馳走になつたのさ。まあ一つ、四阿へ行つてみなさい。あんたの分もまだ残つて居るから。」

「だが、あそこに誰がゐるんです？　うちの女房ですか？　まだ誰かゐるんですか？」

「シラクサの僭主ディオニシウスさ。」

「やあ、だがやつぱり、あなたは酔つぱらつて居るんだ！……僭主なんて、およう筈がないぢやないですか？……ところで君の方は、ねえヴァルナーヴァ・ヴァシーリイチ、どうやらもう人の顔の見分けもつかないらしいぢやありませんか？」と、酒税吏はヴァルナーヴァに話しかけた。

「濟みません」とプレボテンスキイは、おつおつと頭を下げながら答へた。「まつたく見分けがつかないんで。僕の顔はどうやら見覚えはあるんですが、あなたをどこで思ひ出したのか、それがお目にかかれないんで。」

「いやはや可哀さうに、言ふことまでがもうすっかりしどろもどろになつちまひやがつた！」と補祭

は言つて、其ままヴァルナーヴァを引つ張つて、この客あしらひのいい邸内から出て行つてしまつた。數分ののち、アヒルラはつつがなくヴァルナーヴァを自宅まで送りとどけて、聖餅焼きの婆さんの手に引渡した。婆さんの方では、自分の息子に對する補祭の思ひがけない親切に仰天して、お禮の百萬遍を浴せかけるのであつた。

アヒルラはそれには一言も答へず、その足で家へ戻ると、下女の 에스ペランサに向つて、早く銅メダルを持つて來いと命じた。

「あなた様は、てつきり、何かにぶつかりなすつたのですね、補祭さま？」と、婆さんはしきりに訊きたがつた。アヒルラがその渡されたメダルを後頭へ押しつけるのを見たからである。

「さうだよ、エスペランサ、おれはぶつかつちまつたのさ」と彼はほつと溜息をしながら答へた。「だがね、假りにお前が今の今までおれのことを力自慢だと思つてゐたにしろ、もうこれから先はそんなことを思はんで呉れな。なるほど法主さんは、司法大臣だわい。ねえ 에스ペランサ、あの人はおれに、自分の力を自慢するな、自分の強さを自慢するな、と仰しやつたつが、なるほどその通りだなあ！」

といつてアヒルラは、奥女中を退らせると、窓に對してしやがみ込み、そのままのべつに溜息をつきながら、後頭に例のメダルを當てがひつつ、かうささやくのだつた。

「いやはや見事さつぱりとランポポを喰らつちまつたわい。これぢや全くのところ、二日ばかりは人中へ出られはせんわい。」

法主は頗る興奮且つ御機嫌斜めのいで御歸館になつた。今日はお祝ひだといふので、彼が町長の邸にかなり長々と神輿かみこを据ゑてゐたものだから、留守をまもるナターリヤ・ニコラーエヴナ夫人は、平生の習慣をやぶつて、主人の歸りを待たずに寢床にはいつてゐたが、尤も良人の寢間に充てられた廣間と自分の寢室の間の扉は、あけつ放しにして置いた。ナターリヤ・ニコラーエヴナは、良人が歸つて來たらきつと目を覺ますつもりだつたのである。

トゥベローゾフはその氣持が分つたので、妻の寢室への扉があけ放しになつてゐるのを見ると、その部屋へはいつて行つて、妻の名を呼んだ。

ナターリヤ・ニコラーエヴナは目をさまして返事をした。

「眠つてはゐないのかな？」

「いいえ、サヴェーリイ・エフィームイチ、眠つてはをりませんの。」

「いや、それは有難い。わしはお前と話をしたいのでな。」

と言ふと老人は彼女の寢臺の端に腰をおろし、まづ例の貴族團長と交した談話を妻に話してきかせたのち、愚痴ばなしを始めた。それは、開化の人には『信仰することなど不面目だ』といふ信念が今

やロシヤの津々浦々にひろまりつつあるが、一般はその成行に就いてさつぱり無關心だ、といふ歎きであつた。彼は妻に向つて、風俗の頹廢や善き理想の失墜に對する自分のさまさまの危惧を並べたのであるであつた。そして、信仰の人であり、祖國を愛する公民であり、また哲學的思索人でもあるサヴェーリイ師は、七十歳の今日になつても依然として考へ方は新鮮、明晰、且つ濫い血が流れてゐた。

彼の一言一言には良識が輝かしい光を放ち、その語調には心からの誠實がひびくのであつた。ナターリヤ・ニコラーエヴナが良人の昂揚した情熱的な話の腰を折らぬやう氣をくばつて聲一つ立てないので、彼はほかの如何なる席でもとても享樂できないほどの完全な自由をもつて喋るのであつた。

「そこで、まあ一つ考へても御覽、ねえナターシャ！」と彼は、もうそろそろ夜が白みだして、手飼ひのカナリヤも目をさまして、その嘴を棒にこすりつけて清めはじめたのに氣がついて、さう指摘した、「まあ一つ考へても御覽、ねえうちの婆さん、あのトゥガーノフはわしの言ふことに何一つ反對を唱へず、一々わしの意見に賛成だつたのだよ。といふのもつまり、あの男もわれわれ同様、亡くなつたあのマルファ・アンドレーヴナが仰しやつた通りぢやといふことが、分つてをるからぢやよ。つまりそれ、尻も長ければ嘴も長くつてさ、まるで山鷓やまじみたいに沼の中につつ立つて、ふらふらしてゐる。嘴を抜かうとすりや、尻尾がはまり込む。尻尾を抜かうとすりや、嘴がはまり込む。かうした二進も三進も行かん窮狀に陥りながら、それを脱け出すに是非とも必要な熱意といふものがさつぱり見られん。……まことにあさましい限りの冷淡さぢやよ！」

ナターリヤ・ニコラーエヴナは黙然としてゐる。

「しかも、その擧句の果がどうかといへば、あの男は、あらうことかこのわしのことを、『凝り固まり』ぢやとまで抜かしをつたのぢや!……いやはや、ひどいことになるものぢやわい、わしがあまでした後になつて、今さらこのやうな呼び名が、わしのどこに當てはまるかの? (サヴェーリイは聲を低めて先をつづけた)。わしのことを『凝り固まり』ぢやと云うて置きながら、あの男はこんな話をわしにして聞かせをつたのぢや。……といふのは、實はわしが、あの男に或る問を出したからぢやつたが、それはつまり……わしが擧げる事例が小事であるか大事であるかは兎もあれ角もあれ、しかしみんなこれは今日の社會を支配してゐる一つの精神の徴候にほかならん——とわしは言つてな、『さてそこでぢや、もし今日われらがこの小事の始末をつけられんやうなら、これがそのうち大きくなりをつた曉には、その大事の始末はどうなると思はれるかな?』と疊みかけてやつたのぢや。するとあの男は、例のわしの大嫌ひなわがロシア特有の戯けた口調でな、一場の笑ひ話を披露しをつたものぢや。その笑ひ話は、なるほどその場合にうまくはまつた打つてつけのものではあつたが、さりとてわしとしては職掌がら、お前をほかにしては何びともとても話すわけには參らん代物なのぢやよ! で、その話といふのはな、何とかいふ士官がつての、行軍に出てとある宿舎に泊つたところが、その隣に素晴らしい美人がをるのを見てとつてな、その眉目形に惚れ込んでしまつて、早速例の軍隊式で從卒を呼んでな、かう言つたものぢや、『おい、あの美人と知合ひになりたいが、どうしたならよからうな?』するとその從卒は、ちよつと思案してをつたが、ちやうどその時サモヴァルの

仕度を済ますと、いきなりかう大聲で叫んだものぢや、『おや、いぶりつ臭いぞ!』とその士官はがばと飛びあがりさま、その美女のをる部屋へ駈け込んで、『あいや御婦人、こちらがいぶりつ臭いので、あなたの身をその美しさ諸共お救ひ申上げようと、かくは駈けつけて參りました』と言つての、まゝとその女と昵懇を結んでな、從卒には禮をつかませヴォトカを振舞つてとらせた。ところがその後ほどなく、その同じ浮氣男がな、別の土地へ移つてみると、またそこで美麗な婦人が目にはいつたが、今度は隣り合せではなくして、往來を隔てて自分の窓と向ひ合せであつた。で、またも從卒に、『おい、あの婦人に一つとりもて!』と命じたところが、從卒は前と同じく『おや、いぶりつ臭いぞ!』といふ返答しかようせなんだ。そこで士官は、この從卒を天晴れ才覺のあるものぢやと思つたのは買被りぢやつたと悟つて、その昵懇を結ばうとの念願も二度目には從卒のとりもちを以てしては成就せなかつた。さあ一つ、この話のどこが似通つてゐるか、自分で判斷してみるがよい。それはつまりかうぢや——わが國でな、開化人の資格として無信仰ぢやの、祖國を嘲弄することぢやの、家庭の絆の神聖を無視することぢやの、何でもかでも選り好みをせぬ氣風ぢやの、さういつたものが是非とも入用ぢやとなると、例の譬へ話の美人——つまりこれは上邊の文明ぢやが、この美人は易々と手に入ることが出來た。ところが時代は移つて、今度は別の美人と昵懇をとり結ぶ必要が生じた今日になると、言ひ換へると、精神的な獨立といふものが入用な時になつてみると、この美人は往來を隔てて窓の向ふ側に坐つてをつてな、それを手に入れる術もない仕儀なのぢや。頭をかかへて、青息吐息、『あ、あの女とどうしたら知合ひになれるのかのう!』と呻くばかりでの、不細工な從卒どもになんば

手を合せて頼んでみたところで、相變らずの『おや、いぶりつ臭いぞ』のほかには何の智慧も浮ばん始末なのぢやよ。まつたく、この場合に臨んで『いぶりつ臭い』など言つてみたところで、それが何の役に立つかな?」

「さうですわ」と、ナターリヤ・ニコラーエヴナはほつと溜息をして、ぽつんと言つた。

「さうとも、さうとも! ここまで来れば、お前にもはつきり分るぢやらうな、——この際一たい誰が『凝り固まり』なのかな? さういふ物の成行きをはつきり見てとつて心を悩ましてをるこのわしがさうか、それとも、何もかもすつかりはつきり分つてをりながら、しかも『とにかく、わしらの生涯さへ無事ならそれでよい、あとは野となれ山となれぢや!』などとほざきながら、のんびんたりと傍觀してをる連中がさうか。これがそれ、例の『いぶりつ臭いぞ』といふ奴なのぢやよ。さうぢやあるまいかの、奥さん?」

「さうですわね、あなた、きつと下女がサモヴァルの仕度をはじめたんでせうよ!」と、早々な寢呆け聲でナターリヤ・ニコラーエヴナは口走つた。

トゥベローゾフは茲に至つてやつと、自分の言ふことを聞いて呉れる耳のない空氣に向つて今まで自分が長々とお談義をやつてゐたことに氣がついて、白髪頭をうなだれると、ふとにつこり笑つた。彼はふと、いつぞや久しい以前に、あの亡くなつた大貴族夫人マルファ・プロドマーソヴァが彼に言つた言葉——『おや、あなたは本當に孤獨ぢやおいでなさらないの? あなたには善良な妻があつて、あなたを愛して呉れる、といふのが一體なんです。それにしたところでやつぱり、あなたの思ひ

悩む種を、奥さんは分つちや呉れませんか。ですからね、世間並の人よりちつとでも遠見の利く人は誰でも、家の者に取巻かれながらも孤獨なものなんですよ』を思ひ出したのである。

「さうだ、孤獨だ! 何から何まで孤獨なんだ!」と老人はささやいた。「しかもわしはその孤獨といふことをとりわけしみじみと感じた今この現在、孤獨でありたくないとひしひしと思ふ今この現在に於てさうなんだ。なぜといつて……わしが凝り固まりだらうと凝り固まりでなからうと、とにかく……わしはもうこれ以上の我慢はせんことに決心したのだからな。そして一旦これと決心したことは、それが大膽不遜にわたらうとどうだらうと、是が非でもやり了せることに決心したんだからな。……」

さうつぶやくと老人は、まどろめる妻の安らぎをみださぬやうにそつと寢臺から身を起して、彼女に十字を切つてやると、例のパイプに煙草をつめ、それをくはへて庭へ出てゆき、入口の段々に腰をおろした。

八

今やトゥベローゾフは、長いあひだ思案を重ね、久しい前からやりたくて痺れをきらし、しかも誰一人にも打明けたことのない或る仕事を斷行しようといふ、一大決意を固めたのである。それにそも

そも彼は、誰を相談相手にすればよかつたであらうか？ 彼の念頭に浮んだ計畫を、誰に喋つたらよかつたであらうか？ あのおとなしい、『おてもおなくても同じやうな』ザハリーヤぢや、さつぱり相談の相手にはならない。また、まるで自然力そのままの生き方をしてゐて、何のため何の用で自分がこの世にゐるものやらさつぱり無我夢中の、あの向ふ見ずなアヒルでも困る。さりとて役人連中でも、奥さん連中でも、乃至は残る唯ひとりのトゥガーノフ老でさへもが、その人ではない。この人から法主が期待してゐたものは、生れながらのロシアの旦那としての後援なのである。いやいや、誰にも打明けるわけにはいかない。最愛の妻、あの柔和なナターリヤ・ニコラーエヴナにしたところで、いぶり臭いと云へば夢の中でまでサモヴァルをしか思ひ出せないやうな始末では、とても相談相手にはならない。……

「うちの可愛い細君ときたら、夢の中でまで、このわしといふ年寄りに温いものを飲ませて暖ませようと、それだけを氣にかけて心配してゐるけれど、實は、このわし自身の中に燃えてゐる或る石炭があつて、それがわしの身を暖めて呉れるのだといふことを、わしの靈魂の渴きを癒して呉れる力のあるのは、生命の流れだけなのだといふことをさつぱり御存知ないのだ。わしは老人だ……白髪だ……半分棺桶に足をつつ込んでゐるのだ……おつつけ、路ばたの石つころみたいに死んで……おまけにその死に臨んでも……自分は少くとも自分の立てた誓を果さうと努力して来た……同胞のくづをれた精神を呼び醒さうと努力して来た、われとわが心に言ふ慰めをさへ失はうとしてゐる……とそれを思ふだけでも、わしの魂の空虚はみたされないのだ！」

老人はすつかり考へ込んでしまつた。煙草のけむりの細い流れの幾すぢが、彼の白い口髭の下から渦まきのぼつて、空氣の中にひろがりながら、折しも昇つてきた太陽の琥珀玉に染められてゆくのだつた。雞はとまり木から舞ひおりて、小舎の外へ出て来ながら、羽ばたいては羽を清めてゐた。橋の上で牧童が一人、菩提樹の笛を吹きはじめた。川の岸口は跣足の婆さんが擔いでゆく空樽が天秤棒にからりころんと鳴りはじめ、牛がもうもうと鳴きはじめ、法主の家の下女はあくびの出かけた口を十文字にむすんで、長い枯枝でもつて横を門の外へ追ひ出し、カナリヤは窓邊で囀り、夜はすつかり明けはなれた。

鐘樓の鐘が鳴りわたつた。

トゥベローゾフは下男をよんで、寺男のバヴリユカンを迎へにやつた。

「さうだ」と法主は肚の中で思案するのだつた、「これは自我といふものから離れなけりやならん、どうあつても離れなけりやならん、そして……煩惱心をさらりと棄てるのだ。それをやつてみよう。」木戸の闕の上に一人の若いジブシー女があらはれた。赤ん坊を胸に抱き、もう一人を背中におぶひ、残る一人は彼女の襦袢にまとひついてゐる。

「何か戴かせてくださりませ、お仕合せな、御才覺なお坊さま！」と言ひながら、彼女はサヴェーリイの方へ歩みよつて来た。

「はてな、何をお前にあげたものだらうな、不仕合せな、不才覺なお人よ？ 家内はまだ寝てをるし、わしは錢を持つてをらんのだがのう。」

「何かあなたの御不用なものを戴かせてくださりませ、その報いには譽れと幸ひがございますよ。」
「わしに不用なものといふと、はてな？ あ、さうぢや！ お前さんはうまいことを言つたわい、
——なるほどわしには不用なものがあつたよ！」

と言つてトゥベローゾフは家の中へはいつて行つたが、やがて愛用の長煙管や小煙管、南京玉の煙
草袋、それに煙草の灰を掻き出すブリキ罐までを持つて出てくると、それを残らずジプシー女に渡し
て、かう言つた。——

「さあさ持つておいで、これをみんな御亭主に上げるがいい、その方がよつぽど似合つとるから
う。」

ナターリヤ・ニコラーエヴナはまだ眠つてゐたが、法主はそれを自分のせゐと考へてゐた。留守に
したり、愚痴をきかせたり——尤も、この愚痴の方は彼女が聴いて呉れてゐたわけではないが、でも
兎に角目を覺してゐて呉れたには違ひないので——そんなことで随分長いあひだ安眠妨害をしたから
である。

彼は既へはいつて行つて、一どきに二食分の燕麦を、ひとつがひの栗色の小馬にやると、そつと庭
を横ぎつて家の中へとつて返したが、そのときふと思ひもかけず、消費税吏ビジューキンの使走をつ
とめる兵隊が、ちやうど木戸をくぐつてはいつて来るのが目についた。兵隊は帳簿をかかへてゐた。

法主は彼の手から使走簿をとつて、それを押し披いた途端に、みるみるその顔は紫色に變じた。帳
簿には一通の封筒が挿んであつたが、その上書きには、『古^{スチール・ゴッド} 市郡管長サヴェーリイ・トゥベルク

「ロフ殿」とあつた。この『トゥベルターロフ』といふ字は軽く一本線を引いて消してあつて、その
上に『トゥベローゾフ』と書いてある。

「折返し受取書をお出し願ひたいとの仰せでありました」と兵隊が言つた。

「一たい誰の命令かな？」

「このたび見えられました役人の祕書の方^{かた}であります。」

「よし、ちよつと待つてをれ。」

法主は、これは只事ではあるまい、何か面倒なことを持ちかけて來たに相違ない、おそらくは何か
言ひがかりをつけて來たのだらうと、察しがついたのである。

『それにしても、一たい何事だらうな？ しかもこんなに早朝から……察するところ昨夜は、まん
じりともせずにかか厭らしいことを書きをつたのだな。……いやはや閑な連中だわい！』

そんなことを考へながら、トゥベローゾフは今やさんと陽の光のみち溢れた自分の廣間へ通
と、圓い銀眼鏡をかけて、その問題の書面の封をはがした。

九

扱てその七面倒くさい文書は、一種かう得態の知れない代物で、例の官廳語が豊富を誇つてゐると

ころの不愉快きはまる、陰謀臭のふんぶんたる言廻しを以て、管長トゥベローゾフに向つて、『重要事項ニ關シ、兼ネテハマタ補祭アヒルラ・デスニーツインガ僧侶ニモアルマジキ邪惡ノ行狀ニ關シ、篤ト説明相成度ク』、官吏ボルノヴォローコフの許まで『内々』御來駕下されたしといふのか、それとも出頭を命ずといふのか、その邊のところはうやむやにぼかしてあつた。

「ふつ、こいつはどうも豪いことになりをつたわい、冗談も冗談、どだい馬鹿げきつた冗談ぢやないか?……一たいあの連中は、よくもこのわしに對してこのやうな冗談を仕掛ける氣になつたものぢやなあ?!……待てよ、いやこれは冗談ごとではあるまい。『トゥベルクローフ』とやりをつたな……わしの苗字をこんな風にもぢりをつたのは、明かにわしを侮辱しようとの下心からぢやし、おまけに……このアヒルラの『僧侶ニモアルマジキ邪惡ノ行狀』といふのは何事ぢや!……一たいこれら一切は何のつもりぢやらう、何をめあてにでつち上げたことぢやらう?……まんまと奴等の思ふ壺にはまつて飛んだ過ちをしでかさぬやう、これは一番、じつくり構へて相手の出方を待つといふ手で行くでしょう。もやもやした場合には、これが唯ひとつの良策ぢやからなあ。」

そこで法主はペンをとりあげると、その得態の知れない文書の文言の下のところへ、『管長トゥベローゾフハ面談ヲ求メラレタル仁ノ權限ヲ承知スルノ光榮ヲ有セザルニツキ、コノ出頭命令乃至ハ招待ニ應ジテソノ仁ノ許へ出向クコトヲ自己ノ義務ト存ズルコト不相叶』としたため、この紙片をもとの封筒へ入れると、斜かひに宛名をかう書いてのけた——『肩書モ稱號モ一切存ジ上ゲザル差出人ニ返送ス』。

そのまま、その文書を送り届けられて來た例の使走簿に抛り込むと、彼は玄關へ出て行つて、帳簿を兵隊に渡した。そこへやつて來たひよる長い寺男、バヅリユカンに向つて、馬車に油を差しておけ、そしてあと一時間したらお前と一緒に管内の巡視に出るから、その仕度をせよと命じ、それから下女を呼んでアヒルラを迎へにやつた。

さうかうするうちにナターリヤ・ニコラーエヴナも起きて來て、昨晚はお話中につい眠つてしまつてまことに申譯ありませんと、良人に向つて繰返し繰返し詫びを言ひ、彼が平生巡視用に使つてゐる小鞆の仕度をはじめたが、煙草はどこへ入れませう? とたづねたに對して、法主が手短かに、いやわしはもう煙草は喫はんと返事をしたのには驚かされたのである。さう答へるなり法主は、折しもはいつて來た補祭に話しかけた。

「わしはこれから管内の巡視に出る。お前に來て貰つたのは、その前に一言念のため」と彼はアヒルラに言ひかけたが、相手はすかさず彼の言葉をさへぎつた。

「いや、御親切は有難う存じますが、實は司祭長さま、わたしはもう心得てゐますんで。」
「さうか。だが今のところ、これはまだ何のことはないわ。わしとても大して怖れてをるわけでもないが、しかしどうかお願ひぢやから、わしの留守の間だけでも、もう少し慎重に構へて呉れんけりや困るぞ。」

* トウベルクローフ——この法主の苗字トウベローゾフはトウベローザ(月下香)を意味する美しい名であることを、わざわざトウベルクリヨ
ーズ(結核)に似せてもぢつたのである。

「それはもう今度こそは、司祭長さま……あなた様のお言葉はなくとも、一切充分に氣をつけますとも。」

トゥベローゾフは立ちどまつて、彼の顔をじつと穴のあくほど見つめた。補祭の恰好といひ顔といひ、あまり芳しい有様ではなかつた。彼の生得のふさふさした捲毛は、さながら假髪かづらがすれでもしたやうに頭の上に横たはつてゐたし、右のところの顚顚の垂毛がすつと生え際までまくれ上つてゐるかと思ふと、左の垂毛は眼のところまでもかぶさつてゐる。

法主は、このそそかしい補祭の身にこの上また生じ得る椿事があれば、それは一體どんな事だろうと空恐ろしい想ひでじつと觀察してゐたが、相手は自分の帽子の蔭に眼を伏せて、かう喋り出した。

「わたしはね、つい昨日もね、法主さま……ビジューキナの家から歸るとすぐ……といふのはわたしちみん町長のところから歸る途中であの女おんなのところへ寄つたんですが、それから歸るとすぐさま、女中にかう申したんです。——いやエスベランサ、まつたくサヴェーリー師の仰しやる通りだよ。あの方は、自分の力を頼むな、自分の強さを自慢するな、つて仰しやつたつけがなあ、とね。」
法主は返事をする代りに補祭の前へ歩み寄ると、彼の顔の左半分に方圖もなく蔽ひかぶさつてゐる髪の毛を、片方の手でもちあげてみた。

「いや、サヴェーリー様、そこは無事なんです、やられたのはこつちなんです」と、法主の手を自分の後頭の方へ持つてゆきながら、アヒュラは小聲で言つた。

「恥かしいと思へよ、補祭」とトゥベローゾフは言つた。

「それどころか、辛くつてならないんです、法主様！」と、アヒュラは自分の胸をぼんと叩いて答へると、わつとばかり泣きだして、廻らぬ舌で、「その罰に、わたしはこれからは一時間ごとに、わが身を責めるつもりなんです。」

トゥベローゾフは、アヒュラの苦惱の盃にはその上もはや一しづくも注ぎ込まずに、却つてその縁を溢れて盛りあがつてゐる分を、手づから明けてやつたのである。すなはち彼は部屋の中を一わたり歩きまはると補祭の手にちよつと觸つて、かう言つたのである。——

「覺えてをるかな、いつだつたかわしは、煙管のことでお前にこつびどく叱られたことがあつたなあ？」

「申譯ありません。」

「いやいや、わしはあれを有難いと思つてをるのだよ。して、わしとしてはこの喫煙といふことを大して悪い事と思ふのでもなし、またこれまでその習慣がついてをったのぢやが、しかし度をすごして淫に陥らんやうにと、今日かぎりこの習慣はふつつりやめて、煙管はのこらすみんなジプシーにやつて了うたわい。」

「ジプシーにですつて！」と顔ぢゆうをばつと輝かせながら補祭が大聲を上げた。

「その通り。尤もわしがあれを誰にやつたところで、お前としては同じことぢやがの、ただお前もな、お前のその向う見ずの癖を誰かに拂下げてしまふがよいぞ。お前は若僧ではない、お前は五十づ

らを下げをるし、苟しくも法衣に身を包んでをる以上は、コサツクもないわけぢやからのう。いや、まあもう一ど御機嫌よう、わしはそろそろ出掛けなければならん。」

と言つてトゥベローゾフが出て行つてしまふと、補祭はその足でザハーリヤ師の家へまはつた。それは、この師匠を煩はして、何とか口實をつけて即刻消費税吏のところへ行つて貰ひ、あのテルモシヨソフといふ男が如何なる身分の出であるかを突きとめて貰ふためであつた。

「そんなこと調べてどうするんだね？」と、ベネファクトフは答へた。

「とにかくあの男が、どんな生れで、どんな種族の出で、どんな父母の子だかを、わたしは是非とも知りたいんですよ。」

そこでザハーリヤは、このアヒュラがどうしても入用だといふ情報の蒐集にとりかかつたのである。

10

ビジューキナの家では、その日の朝は頗るもつて幸先が悪かつた。消費税吏夫人は、昨夜たしかにはめてゐた高價なダイヤモンドの頸飾りのないことに気がついて、いくら捜しても見附からなかつた。召使たちは残らず轉手古舞の有様だつたし、奥さんも同様だつたが、紛失物は例の四阿をはじめ家ぢゆう隈なく探ね廻つたけれど、どこにも見當らなかつた。

ボルノヴォオローコフは當町の檢察に着手するし、テルモシヨソフも猛烈に多忙だつた。彼は自分の動産の容れ物に使つてゐる馬車用小櫃のまはりで轉手古舞のしつづけだつた。その中に納めてある愛藏の寫眞のコレクションの中から帝室のかたがたのお寫眞數葉をとり出すと、テルモシヨソフは、埃がついてゐるやうな氣のした中の數枚を消しゴムや小型ナイフできれいにして、一まとめに小さな封筒の中に納め、さて何とかいふ假空の友人に宛てたペテルブルグ行きの手紙を書きはじめた。テルモシヨソフの目論見を知らない限り、これがどういふつもりだか察しのおつた筈はないのである。彼はその文中に、自然の美や雲の黄がかつた薔薇色やを描出し、つづいて自分がボルノヴォオローコフの知遇を得たことを記し、また勤め向きの立身榮達やサマーラ縣で或る遺産を手に入れることに就いての洋々たる希望を述べ立て、最後に昨夜かれが接する機会をもつた古^{スタールイ・ゴロド}市の社交界に關するあつさりした素描が附け加へてあつた。但しこの社交界のことは猛烈にこきおろしてあつて、ただ一つの例外例は郵税局長の細君だけであつた。曰く、『この婦人はまづ白羽の矢を立てるだけの價値は充分にあるね。そればかりぢやない、つらつら按ずるにそこには何かかう一種運命的なものさへあるのだ。僕は一目あの婦人を見たとき、寧ろ息子の情とでもいつたものをあの婦人に感じたんだからな。あつさり白狀しちまへば、あの婦人がもし僕をぶん擲る氣になつたら僕はさだめしあの婦人の手に感謝の接吻をし兼ねないだらうよ。とはいへ僕自身にしても、この一件の成行きがどんなことになるやら見當がついてゐないんだ。何しろあの婦人には娘が二人もゐるんでね。一人は母親に生き寫したが、もう一人の方だつて、正直のところ、劣つてゐるとは言へないね。ああ君、玄妙不思議な運命の手が、

どういふつもりで僕をあの尊敬すべき婦人の家庭に近づかしたのか、ただ神のみぞ知ろしめすさ。さしづめ、『まづまづ大目にねがひます、ねえ自由さん』とでも歌ふところだらうな。まあ僕のことを彼はいふまへに、今度歸省する時は君も一週間ほどここへ寄つて見たまへよ！ 君だつて一目見たが最後どんなことになるやら、これ亦神のみぞ知ろしめすだぜ。君にしたつて獨り暮しは味氣ないだらうぢやないか。況やそれ、君も僕も日々のパンに事缺かず、その上且つ他人に援助を與へる餘力までが出来た今日に於てをやだよ！ ぢや今日はこれで失敬。但し僕は近いうちにまた必ず便りをするよ。それはほかでもない、僕はこの尊敬すべき郵便局長夫人を材料にして、ひとつ文學的スケッチをやつてみようと思ひついたから、出来たら君の手を通じて一流の雑誌に發表してやらうと思ふのさ。君のテルモシヨールソフ。』

この手紙をニコライ・イヴァーノヴィチ・イヴァーノフの名宛にすると、テルモシヨールソフは封じた封筒を二本の指でちよつと折り曲げてみて、さうすれば例の郵便局長夫人に關する追て書の全文が透けて讀めることを確かめると、ゴクリと喉を鳴らしてかう獨りごちた。——『あの女は手紙をそつと開封してみる癖があるつて昨日プレポテンスキイの奴が言つてたつけが、それが本當かどうか、まあ一つ拜見するでしょうか。もし本當なら、萬事こつちの思ふ壺だがなあ。』

そこで彼は手紙と寫眞を取りあげると、そのまま郵便局へ行つた。その手紙のほかにも、テルモシヨールソフのポケットにはもう一通別の文書がはいつてゐた。それは例の通牒をトゥベローゾフまで持たせてやつたあの朝まだきの時刻に彼の書いたものであつた。その文面は。——

『愛國の假面のもとに隠れをる民主主義的社會主義者の陰謀は到る處に遭遇するところにして、當地にありてはその陰謀が格別に多種多様な分子によりて構成せられあるを見るものなるが、何にもまして寒心すべき一事は、この陰謀に既にしてかの僧侶階級が著大なる程度にまで參與しをる事實なりとす。この僧侶階級なるものが民衆に接近しあり、從つて最も危険なる分子なることは言を須ひざるところなるが、果せるかな自由主義的なる寛容政策の幾多悲惨なる失敗の實例は、當時に於て無慮無數に看取せらる。茲に一例を限りて言はんには、ガリツィヤに於てロシヤ僧侶の示したる效驗を解説論評することが若干新聞に許容せられて以來、わが國の多數僧侶は明かにガリツィヤの僧侶に倣はんと努めつつあり。彼等は今や教會の職務を執行することのみにては足れりとせず、或は教會の自由を叫び、或はロシヤ人民の爲を呼號して、庶民を煽動するに至れり。』

古スタールイ・ゴロド市の法主サヴェーリイ・トゥベローゾフは、その兇暴不遜なる性格ならびに危険思想によつて既に一再ならず上司の注意するところとなり、且つその僧侶にもあるまじき所業をば幾回となくたしなめられたる者なるにも拘らず、依然として自制するところ殆どなく、その本心はありとあらゆる革命主義もて充滿しをれり。

この者が將來政府の施政方針に幾何の害毒を齎すべきかは輕々に豫斷するを欲せざれども、小官の見るところによれば、彼が齎すべき、而して既に一部齎しつつある害毒は、頗る以て甚大なるものあり。すなはち法主トゥベローゾフは當地に於て全町の至大なる尊敬を買ひをるのみならず、彼が明かに智力を具へ、且つ勇氣をも具へることは否定し得べからざるところなりとす。殊にその勇氣は、

永年にわたる上司の黙過によりて増長せしめられ、今や何の畏るところなき不敵さにまで達しつ
つあり、斯かる人物はその一切の行動に就て出来得る限り嚴重なる制限に服せしめ置かざるべからざ
るところ、彼は却つて些の顧慮もなく一切を談じて憚らざるのみか、更に教會に於て衆庶に向つて辯
舌を揮ふの權利をさへ享受しをれり。

右の如き僧門の分子は、もともと民衆に極めて接近しをるものなるところ、更にその一方に於て、
地方の領地全體、すなはち地主貴族に漸く接近せんとする徴候を示しつつあり。これ亦一例を擧げん
に、くだんの疑はしき法主トゥベローゾフは、打ち見るところ貴族團長トゥガーノフの眷顧を蒙りつ
つあるものの如し。このトゥガーノフの人物並に思想については閣下の夙に知悉せらるるところなる
べし。このトゥガーノフ氏は、當地の町長宅の夜會の席上、「地面から太陽を遮るものがある」なる
言を弄したりしが、この地面なる言葉をもつて民衆を、而して太陽なる言葉をもつて君主を意味しを
ること明かなる以上、果して何びとを目して遮る者となせるかは敢て想像に難からざるべし。然り彼
みづから當夜の會話中に於て、彼は地の人間なるが、「縣知事は三日天下の教王なり」などと言ひ
て、自説を註解するところありたりき。而して最後に、右の如き不穩の言動にかけて加へて、當夜の
席に列りをりたるプレポテンスキイといへる當町の教師（因みにこの者は全く愚昧の人物なるが、そ
の思想の堅實なることに至つては寸毫の懸念なし）が、ロシヤは何物によつて如何に治められざるや
と問はれても我等は悉く答ふること能はず、と言ひたりしに對し、彼は露骨なる冷笑の色を以て答へて
曰く、「わしはその邊のことに關しては、あのエカテリーナ朝のパーニンの言うた言葉に全幅の信頼

を置くものですわい。あの人はかう言ひましたな、ロシヤは神様のお慈悲と民の愚昧のおかげで治ま
つてをるとな」と。小官は絃上の條々に對し閣下が注意を寄せられんことを乞ふ光榮を有するととも
に、亦閣下の前に、小官の許に私設秘書として仕へるイズマイル・ペトロフ・テルモシヨソフ
の餘人を以ては到底代ふべからざる功績に關し、證言することを自らの義務と考ふるものなり。この
者の鋭き觀察眼ならびに社會の凡ゆる層を洞察する能才ありてこそ初めて小官は、幾多の貴重なる情
報を入手し得たる次第にして、甚だ烏滯がましき差出口に以たれど小官は茲に、もし閣下に於てこの
有能なる人物をば何等かの觀察的職務の獨立的地位に起用せらるるならば、必ずや彼の齎すべき貢獻
けだし無量のものあるべしとの意見を開陳せんとす。

この書面を懷中に道のあるきながら、テルモシヨソフは、自分の唇をしきりに嚙んでは、かう、
自問するのだつた。――

『ボルノヴォロコフの悪者め、こいつに署名するだらうかな？ なあに大丈夫さ、――ぎゆうぎ
ゆう締めあげてやりやあ、署名するに決つてるさ！』

* パーニン、エカテリーナ十二世の治世に、外交はもとより内政の改革に縱横の巨腕を揮つた權臣。

テルモシヨースフは先づ郵便局の事務所に立寄つて、そこで例の手紙を出すと、すぐその足でちか
に局長夫人のところへ行つた。二人はまるで百年の舊知のやうに相まみえ相迎へたのである。彼が彼
女の手接吻すれば、彼女は彼女で彼の脳天をチュツと吸つて、御光來を謝するのであつた。

「いや、それどころか、わたしこそあなたにお禮を申上げなかりやならんので」とテルモシヨース
フは答へた。「いやはお話にもなんにもならん退屈さでしてな、とんでもないところへ、とんでも
ない連中のところへ舞ひ込んだものだ、怖しくつて昨夜は夜つびてまんじりともしませんでした
よ。」

「さう、あのダーリヤ・ニコラーエヴナはどうも行き届かない人にしてね。いいえ、行き届かない
つてことはないんですが、つまり一家の主婦ではないんですの。」

「なるほど、さうらしいですな。」

「さうでございますとも！ なにしろあの人は二六時ちゆう本と首つびきですものねえ。」

「いやはや、馬鹿げきつたこつてすねえ！ 今や眼を働かすべき時で、本なんぞ讀んでゐる場合ぢ
やないですよ。現にわたしなども、昨夜はとつくりとここの皆さんを眺めもし、お説を拜聴もしたん
ですが、……いやどうも顔負けでしたなあ。」

「ですからわたくしも、昨夜うちの娘たちにかう申しましたのよ。——あの遠來のお客様としては、
さぞかし面白くていらつしやることだらうね、つて。」

「いや、そのことなら御心配は無用ですよ。何しろわたしが勤めてゐるのは、金が欲しいのどうの
といふのぢやなくて、むしろ地方の事情に通じたいからなんですからねえ。」

「まあ、さういふお心算でしたら、この土地には御觀察の材料がうんとこせと御座いませうとも！」

「それそれ、その觀察のためなんですよ！ ところで、お約束の肖像を持つて参りましたよ。お差
支へなければ懸けて差上げませう。」

郵便局長夫人はお禮の文句も出ないほどの満悦ぶりだつた。

「まあ、お宅のお美しいお嬢さんがたにお目にかかれるまで、小生よろこんで一働きやると致しま
せう。……たしかにお目にかかれるでせうな？」

局長夫人は、娘たちはまだ着更へを濟ませてをりません、何しろ家事向きの采配を振つてをります
ものですから、でも追つつけ出て参りませう、と答へた。

「いや、お願ひします、よろしくお願ひします」とテルモシヨースフは手を合さんばかりに頼み込
んだが、やがてうまくおだてに乗つた主婦が出て行つてしまふと、彼は早速ポケットに入れて來た釘
でもつて、例の肖像を壁間に配置しはじめた。

お嬢さんがたの身仕舞ひはおよそ一時間ほどもかかつたが、そのあひだちゆう局長夫人も姿を見せ
なかつた。

「吉兆、吉兆！」とテルモシヨースフは思つた。『てつきりおれの傑作に讀み耽つてゐるわい。』

やがて母君の先導のもとにお嬢様がたも姿をあらはした。イズマイル・ペトロヴィチは素早い、
しかも射透すやうな視線を母親に投げた。彼女は燦々たる満悦の光を放つてゐたのである。

『まんまとおれの餌に引つかかりをつたわい、引つかかりをつたわい!』と、テルモシヨソフはわれとわが胸に目くばせして、持前の蠱惑的なお愛想を十層倍に奮發した。しかし念のため、果して局長夫人が『引つかかったか』否かを確めるため、彼はわざわざ話題を文學のことや、自分が旅行の途々綴つてゐる感想録や、覺書のことに向けていつた。

「人物描寫をお願ひしますわ! どうぞお願ひですから、人物描寫をもつとお續けあそばして! もつともつと寫生をお願ひしますわ!」と局長夫人は頼むのだつた。

「左様、わたしはこの土地の社交界の方々についての如是我聞の條々を、もうちゃんと書きとめておますし、それに失禮ながら、あなたやお宅のお嬢様がたのことも書いちゃつたんですが、……いや、ほんの少しばかり、軽く一刷毛二刷毛といふところですがね。……出来ることなら、今しがた出したわたしの手紙が取戻せるといひんですが……」

「まあ、それはいけませんわ、何だつてまたそんなことを!」と、さつと顔を紅らめた局長夫人が答へた。

『引つかかりをつたな、この追剥ぎ女めが、引つかかりをつたな!』とテルモシヨソフは安堵の胸を撫でおろして、なほも彼がこの奥さんやお嬢さんがたについて記したことを是非とも皆さんに読んで差上げたいといふ願望を、主張するのであつた。廣間にはそれから長い間、聞えるものといつたら、『いけませんわ、なんだつてそんなことを? さうまでして戴かなくても私ども、あなた様の言葉は信じ上げてをりますのに!』と、『いやいや、どうして読んで差上げてはいけないのでせう?』

……だつて確かにあなたは、わたしの言ふことを信じて下さらないのですからね!』の應酬だけであつた。

テルモシヨソフの申出は、あまりにも誘惑的にお嬢さん方の好奇心に作用した。彼女たちは代る席をとび立つて、事務所にある父親のところへ駆けつけて、遠來のお客さんの興味津々たる手紙を持つて來ようといふ氣勢を見せはじめた。

局長夫人が或ひは言葉で或ひは合圖で彼女たちをいくら制めても、彼女たちの方では一こう母親の氣持をさとらず、相變らずとび立つて行かうとするのだつたが、その代りテルモシヨソフとしては、事の真相を益々完全にさとるのであつた。つまり、手紙はちゃんと主婦の手中に握られてゐるので、それを取らうとするなら彼女の手から取り上げて、ついでに彼女自身をまでまんまと物にする——といふ手しかなかいのであつた。

テルモシヨソフはそこで一分間の沈思の間もあらばこそ、猛然と席をとび立つと、必死の制止や呼聲をふりもぎり、『いやいや、かうなつてはもうわたしは、あなた方から受けた深い法悦の情を及ばずながら寫した軽い一刷毛二刷毛の跡を、あなた方のお目にかけるといふ満足を、斷念するわけには行かなくなりました』などと大聲をあげながら、さも親切めかして事務所めがけて駆けだした。

その猛烈な勢ひは、頼んでも拜んでもとても抑へやうがなかつたが、行つてみると、果せるかな手紙は事務所にはなかつた。

イズマイル・ペトロヴィチはすつかり途方に暮れた態で婦人がたのところへ戻つて来たが、見れば婦人がたの方の當惑しやうは更に一層ひどかつた。二人のお嬢さんは彼がはいつてくると、いきなり席をとび立つて逃げ出して行つてしまつたが、それは母親に叱られたため流れ出した涙を、お客さんに見せまいがためであつた、一方局長夫人はといふと、覺悟をきめて首の座に居残つてゐた。テルモシヨールソフは無言のまま彼女の前に立つて、にやにや笑つてゐた。

「かうしてお姿を見ると」と、つんと澄ましながら奥さんが口をきつた、「わたくしお恥かしくつて。」

「手紙はあなたがお持ちですか？」

「どうしたら宜しいでせう？ つい我慢がならなかつたものですから。これ、ここに御座いますわ。」

「いや有難いことですよ、あなたがこれを無視されなかつたといふことは」とテルモシヨールソフは、その更めてまた封印のし直してある自分の手紙を彼女の手から受取りながら、相手を褒めあげた。

「いいえ、わたくしお恥かしくつて、とてもお恥かしくつて、でも仕様がありませんわ……わたくし女なんですもの……」

「いやもう澤山々々！ 女ですと！ あなたが女でいらつしやるならいらつしやるで、益々結構ぢやありませんか。女友達といふものはいつても男友達よりいいものですし、この僕ときたら元來まるで馬鹿みたいに人を信じ易い男でしてね、どうしてもかうした何が……いやつまり女の友達が、どうしても入用なわけなんですよ！ 僕はあのボルノヴォロコフさんと意氣投合しましてね。……われわれ二人は仲よしだつたんですが、あの人は今でもやはり、長官といふよりは寧ろ僕の親友なんですよ、さうまあ少くも僕だけは考へてゐる次第なんです。」

「ええ、分りますわ、分りますわ。あなたはとても人を信じ易い、真正直な方ですわ。」

「その點にかけちや僕は馬鹿者なんです！ 全くの馬鹿者なんです！ 僕は三つ兒にだつて騙されちまふんですからねえ！」

「それはいけませんわ、ほんとにいけませんわねえ！」

「ですがね、一たんこんな風に生れついた以上、あなたはどうしろと仰しやるんですか？ 實は或る方がね、僕がボルノヴォロコフと親密にしてゐることを知つてをられましたね、よくかう仰しやつて下さるんですよ——『おい、イズマイル・ペトロヴィチ、お前の信じつぽさときたら、あんまり馬鹿げてるぞ！ 悪いことは言はんから、あの男の老獪な友情なんか當てにするなよ。ボルノヴォロコフはお前の眼の前ぢやうまい事ばかり言つてをるが、陰へ廻ると手の裏を返したみたいに口振りが變るんだからな』とね。ですがね、やつぱり僕はとても本當とは思へないんで。」

「まあ、なぜでせう？」

「まあまあ、ちよつと待つて下さい。ほら、唄にもあるでせう、『憎みたいのは山々なれど、それが出来ないしよんがいな』つてね。僕としては、ただ疑念だけでもつて、或る人間に關する自分の考へを變へるなんてことは、とても出来ない相談なんですがね、しかし……もし何か歴乎とした證據が見せて貰へたらねえ！……あの男が陰に廻つて僕のことをどう言つてゐるかこの耳で聞か、それともあの男の手紙が見られたらねえ！……ああ、もしそんな人があつたら、僕はその人の友情の御恩を肝に銘じて、生涯忘れないでせうよ。」

局長夫人はその老獪なボルノヴォロコフをまだ一目も見たことのないのが残念になつて、テルモシヨソフにもしやその裏切者の寫眞を持つてはゐまいかと尋ねた。

「いや、寫眞はありませんがね、手紙ならありますよ。さう、これがあの男の筆蹟ですよ。」
と言つて彼は、ボルノヴォロコフの手で何やら一ぱいに書き散らされた紙のきれはしを見せ、それを局長夫人の家のテーブルの上に残したままで辭し去つた。

一三

この二番目の釣針は、一番目のにもまして狙ひ見事に投げられたので、その日の暮れる前、ちやうどテルモシヨソフがボルノヴォロコフやビジューキンと一緒に珈琲を飲んでゐるところへ、配達

夫がやつて来て、イズマイル・ペロトヴィチに即刻、局長夫人のところまでお出向きを願ひたいと口上を述べた。

「ああ、さうだつた！ 僕はあの婦人に、今日あの家の連中と一緒に郊外へ出掛けて、何とかいふ林を見物する約束をしたのに、すっかり忘れちまつた！」とテルモシヨソフは答へて、配達夫のあとについて出掛けた。

局長夫人は廣間に獨りで彼を出迎へ、彼の手を握りしめて、かうささやいた。
「ここで待つていらしてね！ わたくし今すぐ参りますから」と言ひ棄てて、彼女は出て行つてしまつた。

一分ほどして局長夫人が戻つて来てみると、テルモシヨソフは窓ぎはに佇んで、自分の背中を帽子でもつて叩いてゐた。局長夫人はあたりを見廻して、扉の錠をおろすと、無言のままポケットから一通の手紙を取出して、それをテルモシヨソフに渡した。

テルモシヨソフはその封筒を手にとつたものの、開けてみようとはしなかつた。つまり薄野呂の役を演じてゐるわけなので、その手紙をどうしろといふのか、相手の註釋を待つてゐるやうな振りをしたのである。

「大丈夫よ、大丈夫よ、お読みなさいな、誰もはいつちや來ませんから」と主婦が彼に言つた。
テルモシヨソフは手紙に眼を走らせた。それはボルノヴォロコフがペテルブルグにゐる自分の従妹のニーナに宛てて、自分の不幸を訴へた手紙で、彼がモスクヴァで偶然テルモシヨソフに――

しかも文中には『この者は怖るべき人でなしの恥知らず』と註がついてゐた——とつつかまつてしまつた次第を述べ、『何とぞ手蔓のありつたけをたぐつて、この卑劣漢に波蘭かペテルブルグでうまい口をあてがふやう、百方御盡力ありたし。なぜといふに、さうでもない限りこの者は、こちらの昔の亂行沙汰を知つてゐるものだから、どんな騒動をもちあげるやら分つたものに非ず。何せこの者は、その破廉恥をもつて一世を驚倒させるだけの腕前があるし、おまけに、わしら二人の滞在する先々で、忽ち失せ物が頻出するところを見ると、まづ泥棒と言つてもよいやうぢや』と、従妹ニーナに助け舟を頼んでゐるのであつた。

テルモシヨソフは、この親友兼上官の手紙を頗る平然たる態度で、筋肉一本びくりともさせずに終りまで讀んだが、讀み了へるとやはり無言のまま、それを局長夫人に返した。

「それが御自分の親友の仕業とお思へになれましたか？」

「よもやこんな事とは思はなかつたです！ 神明に誓つてもいい、よもやこんなこととは思はなかつたです！」とテルモシヨソフは、ほうつと息を吹き、頭を振り振り答へた。

「正直のはなしが」と局長夫人は、返して貰つた手紙を隅から隅へくるくる廻しながら、喋りだした。「わたくし本當に呆れ返つてしまひましたのよ。……うちの女中がね、『奥様、奥様！ 何だか見たことのない男の方がいらして、手紙をポストへ投げ込んで行きなさいましたよ！』つて申すんですの。わたくしは、『へえ、それがどうしたの？』つて何氣のない返事をして置きましたものの、内心ぢや、なぜまた手紙をポストへなんぞ入れていつたのだらう？ その土地ぢやまださういふ制度

にはなつてゐず、手紙はちやんと手渡しすることになつてゐるのにさ。潔白な人なら、手紙を出すことなんぞを匿し立てをする筈がない、これは何かきつと後暗いことがあるにきまつてゐる！ とさう考へましてね。それにあなたは、どんな風にまた何故そんな氣にわたくしになつたのか、とても本當にはして下さいますまいけれど……とにかく一種かう蟲の知らせのやうなものが致しましてね、こんな風に考へましたの、いやいや、これは只事ぢやないぞ、きつとこれは何かあの若いお方の身にとつて禍になるやうなことが書いてあるやうな、そんな氣がするわ、あのわたくしが……まるでわが息子のやうに可愛くなつてしまつたあの方の身に——とね。」

テルモシヨソフは局長夫人に手を與へると、自分も相手の手に接吻した。「ほんとにまあ」と局長夫人は眞似や作り事ではさらさらな神経質な涙を兩眼にうかべながら、さらに喋りつづけた。「ほんとにまあ……とわたくしは考へましたの、なんといふことだらう、あの方を見ず知らずの土地にひとりぼつちなんだものねえ……わたしはあの方が、わが息子のやうに可愛くてならないのにさ、とね。かういふ蟲の知らせにかけてはわたくし間違ひつこはありせんよ。とにかく有難いことですよ、わたくしがこれを讀んだといふことは。」

「これをお持ち下さいませいな」と彼女は、その手紙をテルモシヨソフへ差出しながら言葉をつづけた、「お持ちになつて、焼き棄てておしまひなさいな。」

「焼き棄てるですつて？——どうしてですか？ いいや、わたしは焼き棄てるのはよしませう。さうですとも、ちやんと名宛先にとどくがいいんです。が、ちよつと寫しだけは取らして貰ひたいですな、

ただ自分の心覺えにこれの寫しを取つて置くだけですがね。」

テルモシヨールソフとしては、いかにもこの手紙は自分の名譽にとつて芳しからぬものには違ひないけれど、その代り或る點で頗る自分にとつて好都合だと、早速そこへ目をつけた次第だつた。それはつまり、かうなつた以上自分は危険人物として、かならずや好い地位に祭り上げてもらへるに相違ないからである。

寫しをとつたものの、テルモシヨールソフはやはり原本の方も一緒にポケットに潜めて、散歩に出ていつた。

彼はその晩おそくまで郊外の野原をぶらぶら歩き廻つて、大分ふけてから宿に歸つてみると、すでにビジュールキン夫婦は寢室に退いてをり、ボルノヴォロコフは獨りで坐つて、何やら書いてゐた。

「ほう達筆をふるつてをられますな、閣下？ またも何か椽大の筆を揮つてをられるわけですか？」と、さも愉快さうにテルモシヨールソフは喋りはじめた。

返事は例によつて、みじかい、さも氣のなささうな『うん』だけであつた。

「さては、または何か厭らしい舞文曲筆ですか？」

ボルノヴォロコフはぎくりとした。

「いや、それにきまつてまさあ！」と、さも面倒くさいといつた調子でテルモシヨールソフは發音すると、矢庭に思ひもかけず扉の錠をおろして、鍵を抜いてポケットに納めた。

ボルノヴォロコフは席からとび上ると、今まで書いてゐた紙を大急ぎで引き裂きはじめた。

一四

残忍酷薄な大山師はからからと笑つた。

「おやおや、ひどく周章てふためかれたものですねあ！」と彼ははじめた。「僕が扉に鍵をかけたのは、他意があるわけぢやなく、一つあなたとゆつくり打寛ぎたかつたまでの話なのに、あなたは折角の傑作を残らず破いてしまひましたね。」

ボルノヴォロコフは腰をおろした。

「この文書に一つ署名をお願ひしますよ。但し破かんやうに願ひますぜ。」

と言ひながらテルモシヨールソフは、例のトゥベロゾフやトウガーノフのことで、あることないこととりまぜて書き並べ、しまひに自己推薦をやつてのけた得態のしれない怪文書を、相手の前に置いた。

ボルノヴォロコフは氣のなささうにそれを、初めから終りまで一讀した。

「いかがです」とテルモシヨールソフは、相手が讀み了へたのを見てたづねた、「署名なさいますか、それともなさいませんか？」

「わしが君に言へることは、これだけだ——わしは呆れ返つた、だが……」

「だが僕のことですら呆れ返るものもないぢやありませんか！ 僕はそれを百も承知だし、僕の方だつてやはり、あなたのことぢや別に呆れ返りませんですよ！」と言ふなり、テルモシヨーフはボルノヴォローコフの面前に、例の従妹ニーナに宛てた彼の手紙の寫しを置いて、かう付け加へた。

「本物は僕がお預りしてありますよ。」

「君が？……だがよくまあ臆面もなく？」

「いや、今更お互ひに臆面論をやらかす仲でもないぢやありませんか！ この文書を僕がお預りしてゐるのは、強者たり且つ智者たる者の當然の権利によつてですよ。」

「君はそれを盗み出したのか？」

「仰せの通り。」

「そいつはどだい話にもなんにもならん！」

「どうしてまた話にもなんにもならんことがありませう。考へても御覽なさい、親友でもあり味方でもあつた、相共にロシアを滅ぼさうと企てた、かと思ふと急に今度は、僕のことを無類の卑劣漢だの無頼漢だの言ひふらすぢやありませんか！ こいつは小父さん、罪なはなしですぜ。その罪ほろぼしに、今度は一つ僕の名譽回復になるやうな推薦狀を書いていただきたいんで。」

ボルノヴォローコフは席からとび上つて、部屋の中を歩きはじめた。

「まあお掛けなさい、今更じたばたしたつて追つつきませんやね！」とテルモシヨーフは勧めた。「まあ一つ、和氣霽々裡に事を結着させようぢやありませんか。さもないと僕は、あなたの舊悪がぢやんとつたつてあるこのあなた自筆の手紙を種に、あなたを何處へ閉ぢ籠めちまふことが出来るか、御存じでせうなあ？ そこへ行つたら最後、ポーランド人だつて従妹のニーナさんだつて、とても救ひ出しては呉れませんぜ。」

ボルノヴォローコフは、いらだたしげに自分の兩の腿をびしりと叩いて、大聲をあげた。

「どうして君はわしの手紙が盗み出せたのだ、わしはちやんと自分でポストに入れて來たのに？」

「まあ、どうして僕が盗み出したかといふことは、土曜日ごとのお樂しみの謎々にして置ませう。それはもう僕自身の問題で、あなたの知つたことぢやないですよ。そこで、僕はこれを最後にもう一ぺんだけ申し上げますが、署名を願ひます！ その一枚目の方には、あなたの職名、官等、姓名を書いて下さい。それからあなたの手紙の寫しには、『原本に相違なし』と書いて、なほ僕がこれからはんの一こと二こと口述することを書き添へるんです。」

「君が……君がこのわしに口述する？」

「左様、その通り。僕があなたに口述して、あなたがそれを書くんですよ。それからあなたは僕に、解約金として金一千ルーブルを下さるんです。」

「解約金だと！……何の？」

「僕を厄介拂ひになすつた冥加金でさあ。」

「千ルーブルなんて持合せはないがな。」

「借用證を戴いて一時御用立てしてもいいですよ。百か百五十も現金で出して下されば、あとはちほどでも結構ですよ。……ただね、僕はいくつ便々と長話するのはそろそろ御免ですよ。いかがです、宜しいなら宜しい、宜しくないならそれも御勝手、ひとつはつきり極めて戴かうぢやないですか。すれば僕は恭しくあなたに御挨拶をして退散に及びますよ。」

ボルノヴォロコフはその傍を、行きつ戻りつ歩き廻つてゐる。

「まあま、よく考へて、よく考へて！ かういふ大事は熟慮の上でなけりや斷行はできませんからねえ。しかしね、どつちみち碌な思案の浮びつこはありませんや——僕といふ人間は、かうと極めたことはちやんちやんとやつてのける男ですぜ」と、テルモシヨースフは言つた。

「よし、署名しよう」と、ボルノヴォロコフは鋭く言ひ放つた。

「ではどうぞ！」

テルモシヨースフは上衣の裾でペンを拭いて、インクに浸すと、それを例のペテルブルグの従妹——ナ宛の手紙の寫しと一緒に、恭しくボルノヴォロコフに差出した。

「なんて書くのだね？」

「只今。」

テルモシヨースフはやをら咳拂ひをして、かう始めた。——

「ではお書き願ひます。——『卑劣漢テルモシヨースフは。』」

ボルノヴォロコフは立ちどまると、眼をまわして相手の顔を見た。

「君、その文句を僕に書けといふのは、それは本氣かね？」

「間違ひありません。どうぞお書き下さい、——『卑劣漢テルモシヨースフは』……」

「さう言はれて君は腹が立たんのかね？」

「なあに、總じてこの世のことは、腹が立つも立たないも、それを言ふ相手によりけりですあ。」

「成程な。ぢやあ、早く言ひたまへ、その先は何かね。わしは書いたぞ——『卑劣漢テルモシヨースフは』とな。」

「あつく御禮を申し上げますよ。ではその先を。」

一五

秘書は、ボルノヴォロコフのかけてゐる椅子の後に立つて、彼の肩ごしにじろりとその紙を眺めると、口述をつづけた、——『卑劣漢テルモシヨースフは端倪すべからざる天才的手段を弄して、あなたに宛てたわしの自筆の手紙を手に入れをつた。その手紙の中にわしは持前の不注意から、あなたがこの紙の少し上のところを読まれるやうな事を書いてしまつた。尤もそれはもはやわしの手ではなくて、その同じ無頼漢テルモシヨースフの手で書いてはあるが。』

「もういいのか？」

「いや、もう少し。かうお書き願ひます、——『わしが現に自分の手でポストへ入れた手紙を、どうしてこの男が手に入れたものやら、わしにはどうしても見當がつかんが、とにかくこの一事を以てしても、あなたにはこの破廉恥漢が如何に豪膽不敵で進取の氣象に富んでをるか、よく得心のゆくことであらう。この男は、あなたの力で給料のよい地位を世話して貰はんかぎりは、少しは附き纏つてわしを責め惱ますことに決めてをるのぢや。どうかお願ひぢやから、われわれ一同の無事安泰のためを思つて、この男のために一つ無理算段をしてお呉れ。さもないとこの男は、われわれがその昔したことを一切合財あばいてしまふと言つてをる、例のわれわれの革命家時代の愚かしい所業の段をな。』」

「そのお仕舞ひのところの文句は何とか改められんかなあ？」

「駄目です。綸言汗のごとですよ。」

ボルノヴォロコフはわが身の恥を書き加へると、その紙をぼいと向ふへ投げた。

「さあお次はこの、坊さんと社會の危険な動きに關する文書です。これは署名だけで結構です。」

ボルノヴォロコフはペンを手に取つて、もう一度その紙をじつと眺めはじめたが、稍々しばし沈思してから、かうたづねた。

「この連中が君に何をしたといふのかね、このトゥベロゾフとトゥガーノフがさ？」

「何一つしやしませんよ。」

「立派な人物かもしれんぢやないか……」

「太いにさうかもしれせんね。」

「ぢやあ、なんだつて君はあの連中のことを中傷するんだね？ だつてこれは、たしかに中傷ぢやないか？」

「みんながみんなぢやないが、中傷も少々ありますな！」

「なんだつてそんな事をするのかね？」

「やむを得んですよ。何しろ僕は自分の腕を見せなけりやなんのですからね。あなたがた血筋のいい人達は伯父さん伯母さんが出世の世話を焼いて下さるが、われわれ成上り者は自分で自分の面倒を見るほかないんでしてね。」

ボルノヴォロコフは溜息をつくと、そのテルモシヨソフが彼の恥とサヴェーリイの破滅と自身自身の幸福を築き上げてゐる紙の上に、嫌惡の色をありあり見せながら署名をした。

テルモシヨソフはその署名済みの讒訴を手にとると、疊みながらまた言ひ出した。

「さあ、そこで今度は三つ目の用件にかかりませう。それが済んだら、僕は帽子をかぶつて左様ならをしますよ。八百ルーブルの手形もちやんと出來てゐます。あとの二百は現なまに願ひたいですな。」

ボルノヴォロコフは卓子に兩肘をついたまま、無言でテルモシヨソフの顔を眺めてゐた。

「おやおや、黙りつくらすかね？」

「いや、わしは君の顔をかうして眺めて、つくづく見惚れてゐるだけだよ。」

「人生の寵兒の顔にたと見惚れなさるがよろしい、そしてどうぞこの手形に署名をして、それからお金をお願ひしますよ。」

「なんの代金だね、ええテルモシヨースフ氏？ それはなんの代金かね？」

「なんの代金かつて？ 分つてるぢやありませんか、——そのむかし聖なるモスクヴァや罪深いペテルブルグで、その夜その夜の静寂の中で味ひなすつた秘密の享樂のお代だですよ。談論風發、密計密謀、斬奸照魔の表、その他一切のお樂しみのお代ですよ。——そのお樂しみの證跡は、この僕のポケットの中にもちやんと仕舞つてありますから、お望みとあらばいつ何どきでもあなたの履歷を臺なしにして差上げますよ。」

ボルノヴォロコフは手形に署名し、お金を抛り出した。

「これは恐縮ですな」とテルモシヨースフは、手形と金を仕舞ひ込みながら、丁寧にお辭儀をして、「お値切りにならなかつたのは、まことに欣快至極で。」

「値切つたらどうなつたかな？」

「もし値切られたら二倍にせり上げるつもりでしたので。」

テルモシヨースフはまんまと強請つりつた物を残らず集めると、帽子をさがしはじめた。

「僕は旅行馬車の中で寝ることにしませう」と彼は言つた。「何しろあの寢室で二人寝るのは息ぐるしいですからね。」

「なるほど、そりや結構だ。ところで君、わしの自筆の手紙の方は返して貰へるのだらうな？」

「ははあ！ いや駄目ですよ、取極めの中にうたつてないですからね。」

「だが、なんであれが君に要るのかね？」

「だつて契約の中にうたつてなかつたぢやありませんか！」

さう言つて、テルモシヨースフはくすくす笑ひだした。

「欲しけりやお金はまだ出すが、どうだね？」

「それには及びませんよ、僕は慾ばりぢやありませんのでね、これでもう澤山です。」

「へつ、君はなんたる……」

「畜生、ですかね？ いや結構々々、どうぞ御遠慮なく。僕は耳に蓋をして、ねんねんころろと

行きますかね。」

「ぢや、これだけは一つ耳に蓋をせんで聽いて呉れ、——あの見えなくなつたビジューキナのダイ

ヤモンドは、何處にあるんだね？」

「へえ、それを僕が知つてゐなけりやならん譯でもあるんですか？」

「君は……君はあの女と一緒に何處やらにゐたんだらう……四阿よあだつたかに？」

「一緒にゐたがどうなんです？ ほかの連中も同席だつたんですからね、あの教師と補祭が。」

「さうか、ぢやこれだけは一つ言つて呉れないか、——あのダイヤは、まさかわしの持物の中に匿しちやあるまいな？」

「そんなこと、僕の知つてる道理がないぢやありませんか？」
「やれやれ！ この男のお蔭でわしは氣が狂つてしまふわい！」と、ボルノヴォローコフは身を悶えながら叫んだ。

「念の爲に申し上げときますがね……」と、相手の手をぎゅつと握つてテルモシヨースフはささやいた、「あなたは、そのことを例のお従妹さんなんかに仰々しく書いてやるのは、おやめになつた方がいいですよ。さもないと……この町で他人の手紙を覗くのは、なにも僕だけぢやないんですからね。」

一六

ビジューキナのダイヤモンドは紛失する、ラムボボに端を發して遂にアヒルラとプレボテンスキイは敗亡してしまふ、ダリヤ・ニコラーエヴナや郵便局長夫人をまんまと手の中にまるめ込む、そして最後にボルノヴォローコフに王手詰めをかけてしまふ——とこれが殆ど一晝夜のあひだの出來事であつてみれば、當のテルモシヨースフも、些かグロッキーにならざるを得なかつた。彼は猛烈な睡氣に襲はれて、旅行馬車の中に敷いてあつた乾草の上に大の字なりに身を横たへると、そのまま翌朝おそくまでぐつすり熟睡したのである。テルモシヨースフが寢室に用ひた馬車の入れてあつた納屋は涼しく、

おまけに錠がおりてゐたので、イズマイル・ペトローヴィチは目が覺めてからも大分長いあひだ横になつたまま、時々伸びをしたり踵をぼりぼり搔いたりしながら、さまざまの思案をめぐらしてゐた。

このわたくしどもの苗床に生えた果實先生の思案のしぶりは、特に次の點に於てすこぶる興味ある特色を發揮してゐた。それは他でもない、彼は一分間といへどもはや過ぎ去つたこと出來てしまつたことには遡らず、また自分が無遠慮きはまる仕打ちを以て猛烈に手きびしくあしらつてのけた新しい顔なじみの誰彼のこと、やはり一分間だつて念頭にのぼせなかつたのである。こんなことをいふと何だかちよつと妙に聞えるかもしれないが、とにかくテルモシヨースフといふ人間には、案外一種の淡泊な素直なところさへあるといつてもまづ間違ひはあるまいと思ふ。但しそれがありとあらゆる人間や、ありとあらゆる見解に對する傲岸な蔑視といふ、際限もないほどの道徳的弛廢とごちやませになつてゐるだけの話である。彼はあたかも、良心とか名譽とか愛とか尊敬とかいふ總じて高尚な感情と呼ばれる一切のものは、すべて哲學者や文學者、乃至はその他の氣の觸れた空想家連中がでつちあげた寢言であり謔言であり繪空ごとであると、すつかり思ひ込んでゐるらしかつた。彼は何も否定してゐたわけではなく（それぢやあんまり議論めいて來るので）、ただそんなものは何一つとしてありはしないのだ、従つてそんなものは心の端にもかける値打はないと心得てゐただけの話である。彼の對人觀もこれに劣らず奇抜なものだつた。つまり彼は、現在この瞬間に彼の眼前に立つてゐる人間が彼と行き會ふまでも生きて來たのであり、彼と別れて後も生きようと欲してゐるのだ、従つてその人間にはその人なりに各自の回想もあれば前途の望みもあるのだといふことは、まるで考へてもみなか

つた。否、彼の考へによれば、どんな人間にしろみんなまるで雨水の泡か茸みたいに、テルモシヨールソフの眼に彼の姿が見えたその瞬間だけ跳り出して来たものに過ぎず、従つて彼はその機を逸せず即座にその人間を持前の厚かましい無遠慮きはまる遣口で引廻し搾り上げ、相手が用済みになるや否や彼は忽ちにしてその人間を忘れてしまふのであつた。彼は持前の冷笑的な口調であつさりかう言ひ言ひしたものである、——「僕といふ人間は誰かをひどい目にあはしても、その後ぢやその人に意趣を含むなんてことはありませんよ」云々。そして全くそれに違ひなかつた。もし今この瞬間にアヒルラなりプレポテンスキイなりがこの納屋の中へはいつて来たにしても、彼は昨夜の出来事なんぞには鵜の毛ほどもこだはらずに、彼等と仲よく喋りはじめるに相違ないのである。

ボルノヴォロコフをモスクヴァの街頭でひよつこり見附けた時もそれで、この公爵のことは久しく忘れ去つてゐたのだつたが、それが急に彼にとびついて、「よし、一つこの男にぶら下つてやろう！」と獨りごちたものである。そしてまんまとぶら下つたのである。ビジューキナにぶつかつた時もそれで、ふと口説いてみたくなつて、つい口説き落したまでである。彼女との一件の進行にあたつて、ふいとその頸にかかつてゐたダイヤモンドがこつちの物になるかもしれんぞと思ひついて、早速それを實行に移してしまつたのだつたが、しかもその戦利品の匿し方がまた頗る巧妙を極めてゐて、萬々が一ビジューキナ夫婦が家宅搜索の非常手段に訴へたとしても、勿論ダイヤモンドがテルモシヨールソフの手許にありやう筈はなく、この種の貴重品を常々その身にちかに帯びんがまでに後生大事に扱つてゐるボルノヴォロコフ公爵のところに発見された筈である。つまりダイヤモンドは公爵の大外套に

縫込まれてゐたのである。トゥベロゾフ法主のことに至つては、テルモシヨールソフはもとより一度だつて考へてみたことさへなかつたのだが、ビジューキナがこの法主のことを訴へるのを耳にするや否や、彼はこの老人をやつつけてしまはうと忽ちにして發心し、次いでこの老人を自分の『觀察的才幹』を世に紹介する踏段に使つてやれといふ妙案を打出し、今ではこの計畫を實現しようといふ彼の不退轉の念願たるや、世の如何なる力もこれを抜く能はざるものがあつたのである。

もし老法主にして這般の消息に通じてゐたならば、かうした役割を勤めることは彼にとつてこの上ない大きな侮辱を感じられたことであらうが、勿論彼はそこにそんな企らみがあるなどとは夢にも思ひがけなかつたので、かくは栗毛の馬に馬車を曳かせて村から村へ、寺から寺へと遍歴し、蜿蜒幾里の森を通りぬけ、草地や畑境に憩ひ、かくして自然の御母の懐にいだかれて浩然の氣を養つてゐる次第であつた。

一ばう町の方では、その頃はもうテルモシヨールソフの不撓不屈の努力によつて、長い係蹄が仕掛けられてゐた。町人ダニールカの訴狀は執り上げられて、瑣々たる小事はここに大事となり、法の決斷を仰がねばならぬこととはなつた。

アヒルラは眞蒼になつてゐた。彼はあちこち飛び廻つては、かうたづねるのだつた。——
「ねえ、あんたがたはどう思ふね。ダニールカのお蔭でこのわたしは今度はどこに遣られるのだからな？」
彼にとつて裁判ほど怖いものはこの世になかつたのである。

程なく裁判があるといふ噂は町から郡部へつたはり、そしてとてつもなく誇張された形でトゥベロ
ーゾフの耳にはいつたが、初めは敢て信じようとしなかつた彼も、やがて方々から確認の返事を受け
るに及びすつかり心配になつてしまひ、管區めぐりを途中で打切りにして、パヴリヌカンに町へとつ
て返せと命じた。

一七

アヒルラ補祭の身にふりかかつた災難や、またその瑣細な事件に當の法主までが連累になつてゐる
といふ喧々囂々たる噂は、町まではまだ馬車で二日二晩はたつぶりあらうといふ遠い教區で、サヴェ
ーリイ師の耳にはいつた。

とても堪へられぬほどの暑い日がつづいてゐた。トゥベローゾフが泊つた最後の村から町までの道
のりは、なほも十二里ほどを剩してゐた。その翌る朝、法主の發ち方があまり早くなかつたので、残
る道のりの半分も來たかと思ふと、二進も三進もゆかぬほどの酷熱に襲はれてしまつた。可哀さうに
栗毛の馬はみんな口から泡を吹き、汗だくになり、見るも無慙な姿であつた。トゥベローゾフはこ
こで飼葉をやり且つ最後の休息をとるため、車をとめることに決心した。といふのは法主はだいたひ旅
籠屋などへ寄るのは大嫌ひで、折よくその邊りの森のはづれに、『みそさざいの丘』と俗稱される絶

好の場所のあることを思ひだし、その涼蔭に一休みして行かうと決めたのである。

そこからは廣々とした平らかな斜面が一望のもとに開け、その盡きるところ、殆ど五里あまりの彼
方に當つて、町の教會の黄金の頂きが點々としてきらめいてゐたが、背後は千年の森林で、宛々とし
て一大密林を成してゐた。そこには深い静寂と涼氣があつた。

炎熱に心根つかれ果てたトゥベローゾフは、馬車から降り立つたかと思ふとその瞬間に、この上も
ない神氣の爽快を感じた。どこもこれも暑熱と疲労に充ち満ちてゐるのに、この鬱蒼たる暗青色の若
い櫛の林の中には、身も心も生き返るやうな爽涼の氣がこもつてゐた。櫛の若樹の、しなやかな、ま
るで緑いろの蠟にでも浸けたやうな葉の上には、塵のあと一つなかつた。どこを見ても活々した、柔
かな、人ごころを休める艶消しの色であつた。色とりどりの、まるで型にはめて打抜いたやうな羊齒
の葉の下からは、どぎつい赤色をした車葉衝羽根草の果がのぞいてゐた。上を仰げば、黄金の光を全
身に浴びたかさかさの胡桃の樹がそそり立ち、遙か彼方の暗褐色をした泥炭地には、ありとあらゆる
種類の茸がばら撒かれ、その間を點々と岩蕁が珊瑚のやうに彩つてゐる。

パヴリヌカンが下着とチョッキ一枚になつて、汗だくの馬を車から外して草地へ曳いてゆき、轆か
ら長くのばした綱の先で飼葉にありつかせてゐる間に、法主はしばらく森の中を歩いてみたが、やが
て馬車から毛氈をとりだして、それを緑濃い窪地へ持つて行つた。その窪地にはまるで泉のやうに勢
よく涼々の響を立ててゐる小流がある。その清冽な水に浴みした法主は、その場に毛氈を敷き伸べて、
一休みしようと思つた。

小流の調子のよい響と涼氣は、トゥベローゾフの炎熱に焼かれた頭へ、健全な『ロシヤ魂』をしきりに吹きかけて来て、彼は知らぬ間に、われにもあらずうとうととまどろんでしまった。眠らうなどとは全く考へてもおなかつたし、——起きあがらうとするけれど、睡りがおさへつけて離さうとしな

い、——何かパヴリユカンに言はうとするが、眠りが柔かな手でもつて口をおさへる。

法主の夢見ごこちはまことに深いものがあつたので、パヴリユカンがわざわざ碾割と茸でもつて煮た麥粥を食べて貰はうと、起きなされ起きなされと肩を揺すぶつてみたけれど、さつぱり利目がなかつた。トゥベローゾフは今にも目を覺ましさうになつたが、『まあお前おあがり、わしは何ともいへぬ寢心地だて』と言つたまま、更に更に深い眠りに落ちてしまつた。

パヴリユカンは一人で晝食をしたためた。彼は匙とパンを菩提樹の皮で編んだ旅の籠の中へ集め入れると、みづみづした草の上に鍋を引つくり返して焚火を水で消し、馬車の下へもぐり込んで、直ぐさま法主の手本に見ならつた。サヴェーリイ師の馬たちが、その顎で地面をつついてゐるのも長い間ではなかつた。彼等も一匹また一匹と間もなく静まつて、てんでに首を垂れ、まどろんでしまつた。

あたりは睡魔の領するところとなつた。その静けさはまことに犯しがたいものがあつて、森の繁みからこの林のはづれまで頓馬な兎が一匹とび出して来て、びよんと一跳び後足の上にもちよこんと坐つて、鬣をうごめかしてみたが、すぐまた急に恥かしくなつたと見え、長い耳を背中へ投げかけ、姿を消してしまつた——ほどであつた。

トゥベローゾフがはつと夢から覺めたのは、彼の唇が何とも名狀すべからざる苦勞の擧句に、やつ

とこせで誰かに向つて『ああ今日は』といふ挨拶を返した瞬間であつた。

『わしは誰と挨拶をしとるのかな？ 何がわしと對坐してをつたのかな？』と、目が覺めた彼は自

問した。と彼は、今しがた彼の傍に、誰かしら冷え冷えとした物靜かな人物が、熟した梅の色をした長い衣をまといつて立つてゐたやうな氣がした。……それがいかにも明かな現の出來事のやうな氣がして、サヴェーリイは素早く兩の肘で半身を起してみたが、見えるものは唯むかふに睡つてゐるパヴリユカンの姿と、あちらに首を垂れてゐる栗毛の馬たちの姿と、かしこに立つてゐる馬車の影だけであつた。それらはみんな簡單明瞭であつた。向ふではそれのみならず、副馬があまりの静けさに退屈して、頭の塵を掻き落してゐさへするではないか。……まんまと拂ひ落すと、その場をはなれ、ごろりと横になり、また起きあがつて、風の匂ひを嗅いでゐる。トゥベローゾフはまだうとうとしつづける、馬はすんすん向ふに歩いてゆく。やがて馬は林のはづれの若草の繁みを食みはじめ。やがて小さな櫛のてつぺんにかぶりつく。やがてとどのつまり、野生のクローバーの茂つた境まで出て行つて、ま

たもや生暖い風を嗅いでゐる。サヴェーリイはその一部始終をじつと見守つてはゐるが、自分が一たい何處にどうしてゐるのやら、どうしてもそれが分らない。それは夢でもなく現でもない。濕っぽいところ

で眠つてゐたせいで、彼は朦朧としてしまひ、頭の中はまるで霧が立ち罩めてゐるやうである。彼は眼をこすつて、上方を振り仰いだ。頭上はるか天空高く、一羽の鴉が舞つてゐる。鴉だらうか、それとも鳶だらうか？ いや違ふ。いや違ふ、と老人は考へる、あれはどうしても鴉だ。彼が身をしやんと立てると、視界も従つて廣くなる。……そこへ向ふからまるで一撮みの豌豆まめでも撒いたやう

に、ク・ウ・ルリュと啼きながら、舞つて来る、追ひついて来る、ク・ウ・ルリュと啼いてゐるあれは仔鴉の群だ、だからあれはやつぱり鴉だ。それにしても何をあんな高いところから狙つてゐるのだらうな？ 一たい何が欲しいのかな？ あれはもう空中を舞ふのに草臥れて、この水が飲みたいのかもしれない。するとトゥベローゾフの脳裡に、ふと、この泉に直接つながつてゐる或る傳説が浮んで来た。この泉は傳説によると、格別に摩訶不思議な來歴をもつてゐるのだ。この清らかな透きとほつた泉の溜りは、まるで水晶の盃を地面に埋め込んだやうだ。この窪地が出来たのは、雷の落ちたせゐだといふ。雷は天から落ちて来て、この地面を深く貫きとほしたのだが、それにも同じくまた、頗る風變りな機縁がある。いつの世にか、もちろん遠い遠い昔のことであるが、戦ひに疲れ果て力盡きた一人のロシヤ武士が、ここまで来て倒れ伏した。その武士一人を四方八方から、雲霞のごとき邪宗の軍勢がひしひしと取圍んだ。もはや最後と思ひ定めた件んの武士は、救世主よ、ねがはくば俘の恥辱から免れしめたまへ、とキリストにお祈りを上げた。傳説のつたへるところによれば、その瞬間忽然として、澄みわたつた天空から一條の矢がさつと突き刺さつてまた上方たかく渦巻き昇つたかと思ふや、轟然として雷が落ちたので、韃靼の軍馬はひとしく膝をついて騎れる者どもを振り落した。やがて彼等が身を起し、立ちあがつた時には、かの武士の姿はもはや見え、彼が佇んでゐた場所には、夜光の玉なす泡をきらめかしながら溶々また韃々と、清冽な泉が見上げるばかり高々と水を吹き上げ、窪地の稜角を憤ろしげに裂き破つて、白銀なす流れをなして遙か緑の草地を奔つて行つたといふ。さればこの泉は、神祕の泉として人みな尊崇するところであるが、なほも民間の言傳へによれば、

この水に奇蹟の力の秘められてゐることは、鳥や獸すらも知つてゐるさうである。それは誰知らぬ人としてはなく、誰しもちやんと承知してゐるといふのも、ひとへにそこに『農民』信仰が儼として神秘的な存在を諭へないからである。ここでは信仰が奇蹟を生み、さればこそこの邊りのものは一つ残らず、百歳を経て亭々たる櫛のいただきから、またその根に宿を求め、茸の末に至るまで、悉くが強く健かなのである。そののみならず打ちみるところ、この地では全く生命の絶えたものまでが蘇るものらしい。例へばあの細々とした、かさかさ枯れた胡桃の樹を見よ。それは落雷に焼かれてゐるけれど、その根元の少し上のあたりの皮には、まるで緑色の蠟でもつて造つたやうな『錫杖葉』が萌え出てをり、そこから又もや新しい生が發出するであらう。ところで世間の噂では、この邊は雷雨の名所ださうである。

『なあに、かうした電氣の飽和した場所といふものは、よくあるぢやないか』とトゥベローゾフは考へたが、その瞬間思はずぞつとして、まるで白髪がよだたんばかりであつた。やつと立ち上つたばかりの彼の眼前數歩のあたりに、小さな肉色の雲が見えたかと思ふと、次第にその輪郭を變へながら、例の馬がのんびりと歩き廻つてゐる林の縁へ、靜かに這ひ登つて行つた。その雲はまるで眞直ぐその馬めがけて進んで行くやうであつたが、やがて馬に追ひつくと、見る見る縦に長くなり、ゆらゆらと立ち昇り、さて恰も砲口から出た煙のやうにひろがつてしまつた。馬は一こゑ高く嘶いて、驚きのあまり足も地につかず驀地に走りだした。

これは困つたことになつたと、トゥベローゾフは大急ぎで駆けだして、まづパヴリユカンを呼び起

し、別の馬にたすけ乗せて、怯え立つた馬のあとを追はせたが、さうかうしてゐるうちに、その馬はもう影も形も見えなかつた。

「急げよお、追いつけよお」とサヴェーリイは寺男をはげまし、懐中から銀時計を引き出してそれを眺めた。午後三時をすぎたところであつた。

老人は無帽のまま日蔭に坐つて、あくびをしたが、と不意にぎくりとした。遙か彼方にあたつて殷殷たる轟きが聞えたのである。

『あれは何だらう、雷かしら？』

と思つて彼は再び立ちあがり、森の外へ出てみようとした途端、果して東方から、黒々とした雨雲が押し寄せて来るのを認めた。雷雨の凄じい息吹きを迎へようと今や身構へた森や野の眞只中で、サヴェーリイは全くの獨りぼつちで、雷雨に襲はれたのである。

また一鳴りして、畑地は一しほ激しく震動し、その上をさつとばかり爽かな涼氣がはためいた。

東の方をすつかり蔽ひ盡してゐる黒雲めがけて、それよりは小さな叢雲が幾つも幾つも渦を巻いて昇つていつた。それはあたかも何ものかの手が、まるで舞臺の背景を次々に天井へ吊り上げながら運んでゐるかのやうで、今にも火光一閃その全體を裂きとほさんとする氣配が動いてゐた。何か怖るべき見世物を演ずる準備の成つた魔術師が、燈火を一齊に點じて幕をあげる前に、いま一應提灯を手眞黒な舞臺を見廻つてゐるかのやうであつた。黒雲は這ふやうに動き、近まれば近まるほど、益々底知れぬ厚味を呈して来るのだつた。それを運んでゐるのは神ではないだらうか？　もう少し先へ行つ

てから爆發するのではなからうか？　ところが否。みよ、その上邊に沿うて、絲のやうな火條がきらりと光つたかと思ふと、稲妻が閃々ときらめきはじめて、一どきにその團々たる雲塊の全表面を奔りまはつた。太陽はもうなかつた。雨雲はその圓盤を遮りかくしてしまひ、そこから射出してゐる恰も長劍のやうに長い光芒は、一瞬間明るくなつたかと思ふと、やはりさつときらめいて消えてしまつた。つむじ風がひようひようとう鳴りだした。叢雲はまるで旗のやうにはためきはじめた。みのつた裸麥の褐色の晶の面を、一めん白い斑点がさつと色めき渡るかと思ふと、さわさわと沼の面のやうにざわめき立つた。その斑点の一つが、まるで天から降つたやうに一箇所に落ちたかと思ふと、また別の場所に別の斑点が湧き出し、それが一どきに兩方から駆け寄つて一つに合さり共に消え失せてしまふ。道ばたの畑境のあたりでは、風が穂をゆさぶりゆさぶり、その凄じさは、まるでそれが風ではなくて、何か生き物が根もとに身を潜めて荒れ狂つてゐるかのやうであつた。森はざわめく。その森の頭上に稲妻模様がひらめく。またもう一ぺん、森の樹々の頂きをかすめて同じ模様が描き出されたかと思ふと、不意にしんとした。……萬象ひつそりと静まり返る！……稲光りも風も何もかもみんな鳴りをひそめてしまつた。嵐の前の静寂である。避難し後れたものは、皆この静もりの最後の瞬間を利用して身をひそめるのである。蜜蜂が數匹トウペローゾフの身のほたりを過ぎて行つたが、それは飛んでゐるのではなくて、まるで風の壓力で運ばれてゆくやうな感じであつた。今では眞黒になつてしまつた小暗い灌木の繁みから、怯えきつた兎が二三匹とび出して来て、畑境のところを地面とすれすれに身を伏せた。現在の照明では矢張りまるでアスファルトのやうな黒一色に塗られてしまつた草地の上を、

銀色の毬が一つころと轉がつて、忽ち地中に姿を没した。蝟はつねずみである。何もかもが仕舞ふべき場所仕舞はれてしまった。も一つ最後に残つたのは、先刻まで空を翔つてゐた鴉で、これは翼を肩のところぎゆつと縮めると、さつと下へ舞ひおりて、高い榊の樹の頂きにどさりと腰を据ゑた。

一八

トゥベロゾフは臆病者ではなかつたけれど、とにかく神経質な人であつた。さうした連中といふものは、大仕掛けな放電がはじまると、思はず識らず打克ちがたい不安の念に襲はれるものである。彼もさうした不安を今感じつつあつたので、あたりを見廻しながら、まさに來ようとしてゐる雷雨を迎へ且つ送るためには、果してどういふ場所が一ばん安全であらうかと、思ひめぐらしてゐる。

彼のとつた第一の行動は、自分の馬車の中へ駈け込んで、そこに坐つてすつぽり身をくるむことであつたが、彼がそこへ坐り込むか坐り込まぬかのうちに、森がぎりぎりときしめきだして、馬車はまるで樹の皮で造つた搖籃のやうに震動しはじめた。この隠れ家がさつぱり頼みにならないことは明らかだつた。馬車は手もなく引つくり返つて、彼を下敷にしてしまふに違ひない。

トゥベロゾフは馬車からとび出すと、一さん走りに裸麥の畠へ駈け込んだ。眞向からまた兩側からうねりかかつて來る風は、彼を押しとめ、裾をひつつかんで後へ引き戻し、彼の身もとでひようひ

ようと鳴り、喇叭のやうに吼え、金切聲を立て、轟々とわめいた。

トゥベロゾフはまつしぐらに例の窪地の泉めがけて走つた。ところがこの水晶の泉盤の中は尙さう安心がならなかつた。その水はざわめき立ちたぎり立ち、その面にちりぢりに砕け走る渦卷の下からは、地の底に閉ぢ籠められた何者かが今にも躍り出して來さうであつた。と突然、その暗い鉛色をした團々たる水の中に、さつとばかり血色の火焰が閃き、一面に漲りわたつた。もちろん落雷であるが、それにしても何といふ奇妙な落雷だらう！く、の字なりの矢をなして上から下へ落ちた雷は、その同じ瞬間さつと水中に反映を見せたまま、同じくくの字を描いて空へ舞ひ上つたのである。まるで天と地が火を取なしたかのやうだつた。まるで屋根から帶鐵を一山投げおろしてもしたやうな、轟然と耳を聳せんばかりの音響がして、泉の中からは見上げるほどの噴水をなしてしぶきの雲が吹き上つた。

トゥベロゾフは両手で顔を蔽つて、片膝をつき、自分の魂も命も神の御手に託したが、一ぱう野面や森の中では、大自然の力の前に出ると人間といふものが如何に儂い卑小なものであるかを、何よりも雄辯に人間をして想起せしめる、あの雷撃の應酬の一齣が見舞ひつつあつた。次から次へ稻妻が翔つた。轟然たる響とともに落雷が相つき、そしてトゥベロゾフの眼には突然、眼前に立つ榊の眞黒な幹と、それをめがけて、まるで仄暗いランプのやうな光を帯びた球が、ふはふはと漂つて行くのが映つた。と、何ともいへぬ見事な火花がその樹の中心に當つて、目くるめくばかりの閃光を發したかと思ふと、みるみる大きな塊にふくれあがつて、終に爆發した。凄じいバリバリッといふ響が大氣

をゆるがした。老人は息がつまりさうになり、手の指にも足の指にも灼熱した環がくるくると廻りはじめ、からだは病的なほど一直線にぐいと伸びきり、それからへなへなと折れて、ばつたり倒れた。……意識はたつた一つあつた、——それは、何もかも粉みちんだといふ意識だつた。最後だ！ といふ言葉が法主の脳裡にちらつと閃いたが、そのあとは一言も出なかつた。法主は、彼が気が遠くなつてからどれほどの時間が経つたか、長いこと自分が人事不省だつたのかどうか、さつぱり見當がつかなかつた。だんだん意識をとり戻しはじめた彼は、遙か彼方の天空を重苦しいゆつくりした響がわたつて、やがて静まつてしまつたのを耳にした。雷雨が過ぎたのである。サヴェーリイは首をもたげて四邊を見まはすと、自分から二歩ばかりのところの地面に、何かしら途徹もなく大きな、無様な恰好をした物が見えた。それは一山もありさうな枝の堆で、つまり櫛の大木の頂の全部だつたのである。その木はまるでナイフで根もとからすつぱり切られたやうに、地面に横たはつてゐたが、裸麥の穂とごちやまぜになつて折り重なつてゐる枝の下から、きいきいと厭らしい叫びが聞えてゐた。それは先刻の鴉が聲をかぎりに喚いてゐるのであつた。鴉は木と一緒に落ちて来て、重い枝でもつて地面へ押しつけられ、紫色の口を一ぱいにあけて、身もだえしては必死の聲をふりしぼつてゐるのであつた。トゥベローゾフは大急ぎでこのむごたらしい光景から跳びのいたが、その跳び方の威勢のいい事といつたら、さながら彼の齡が七十歳ではなしに十七歳であるかのやうだつた。

一九

雷雨は來方も早かつたが、通り過ぎてゆくのも早かつた。黒雲のとざしてゐた邊りには、空色の微光のうへに薔薇色の帯が一本次第にくつきりと描き出され、馬車の馭者臺にすぶ濡れになつて置いてある燕麥の袋の上には、もう雀が來て楽しさうにチチと鳴き交しながら、びしよびしよになつた粗布の隙から濡れた穀粒を勇敢に啄み出してゐた。森はすつかり活氣づいて來た。もの靜かな愛らしい囁りがきこえ、畑境には、響のいい羽音を立てながら、一番ひの野鳩が舞ひ下りた。雌鳩は地面にその小さな翼をひろげて、赤味のさした小さな趾でその面を一刷きすると、その翼をまるで帆のやうに立て、相手から顔をかくした。雄鳩は喉の囊をふくらませて、彼女の前に地につかればかりのお辭儀をして、さも哀しげに『うむる！』と話しかけた。この挨拶がやがて接吻になり、やがて可愛らしい翼が戦くかのやうに、小さな蓬の繁つた總にぶつかるのであつた。生活がはじまつたのだ。ついその邊で、蹄の音がした。パヴリユカンである。彼は一匹の馬の背にまたがり、もう一匹は手綱で曳いてゐた。「これはお師匠さま、生きてござりましたな！」と彼は、近よつて来て、馬車の傍で馬から下りながら、嬉しさうに叫んだ。「わたしはね、あなた様おひとり雷にお遭はせ申してはならぬと、一さんに

* うむる——「死んぢやふ」といふ意味の言葉。それを巧みに鳩の暗聲に借用したのである。

急ぎよりでしたが、そこへばりばりつと落雷しましてな、わたしはもうドスンと馬から落つこつて、この鼻づらを地面へしたたか打つてみましたで。……おやおや、この解はばつさりやられましたので？」

「さうだよ、お前、ばつさりやられたのさ。さあ、馬をつけて出發としようか。」

「やれ、やれ、えらい力のものでござりますなあ！」

「さうだよ、お前、さあ出掛けるとしよう。」

「今度はもう、そよそよと涼しい風が吹いて、ええ氣持で行けますわい。」

「有難いのう、さ早く馬をお附け、まつたく有難いのう。」

そしてトゥベロゾフはもどかしさうに、パヴリユカンの手傳ひをはじめた。

雨を一浴びした馬は忽ち車に附けられ、そして法主の馬車は、轍の跡だらけの田舎道の水溜りに車輪の飛沫をあげながら走りだした。

大氣はなんともいへず清々^{すが}しかつた。光の加減も暖かであつた。野づらからは微かな水蒸氣がたち昇り、空氣のなかに胡桃が匂つてゐた。トゥベロゾフは自分の馬車の中に坐りながら、實に實に久しいあひだ味つたこともないほどのいい氣分を感じてゐた。彼はひつきりなしに深く胸一ぱい息をしては、かうまで深い息のつけることを喜んでゐた。まるで鷺が翼を一新したやうな感じだ！

町の關門にさしかかると、澄みとほつた鐘の音が彼を迎へた。晚禱を告げる鐘である。

トゥベロゾフの馬車はまつすぐ庭先へはいつて行つた。

「まあまあ、サヴェーリイ様、あなたのお蔭でわたしはもう心配で心配で！」とナターリヤ・ニコラトエヴナは、良人の出迎へに走り出ながら叫んだ。「大それた雷さまでしたのに、わたしの大事な

あなた様はお獨りなのですよ。」

「いや、奥さんや、わしはすんでのことと死ぬところぢやつたわい！」

と言つて法主は妻に、自分が『轟きの泉』のほとりで遭遇した一部始終を物語り、なほ附け加へて、これから先は自分はいはば第二の人生に入つたも同然だ、それも自分の生ではなく、何者かほかの生である、そして自分はこれまで自分の短い生涯の無常さ卑小さをつひぞ考へてみたこともないのも同然だつたから、これを自分に對する教訓であり天譴であると考へるものだ、と語つた。

ナターリヤ・ニコラトエヴナはただもう可愛らしい兩眼をばちばちさせてゐるばかりだつたが、やがて溜息をついて、「ところであなた、何か召上りたくはいらつしやいませんか？」と言つた。しかし良人がその返事に首を横にふるのを見ると、今度は、では渴いてはいらつしやいませんかと尋ねた。

「渴いてゐる？」とサヴェーリイは鸚鵡返しに言つて、「いかにも、わしは渴いてをるよ。」
「ではお茶でも？」

法主はにつこりして、妻の頭のでつぺんに接吻すると、かう言つた。

「いや、眞理にだよ。」

「まあ、いいではございませんか？ あなた様の神さまのお蔭で、あなた様がかうしりと仰しやることは、みんな結構なことばかりですもの。」

「いやまあ、それはさうとして、わしは顔を洗ふからな、奥さん、あんたは一つ補祭の身に起つたことを話してお呉れな。」

さう言つて法主が、きらきらしてゐる銅の手洗鉢の方へ歩み寄つて顔を洗ひはじめると、ナターリヤ・ニコラーエヴナはアヒュラの件で耳に入つたことを一切話してきかせ、今度のことは残らずみんな、自分の良人に意趣を含む者のこしらへ上げたものに極つてゐると結んだ。

法主は黙然としてゐたが、やがて化粧を済ませると、杖と帽子をとつて、折しも晩禱の修せられてゐる教會へ出掛けて行つた。

それから五分ほどすると、彼は祭壇の供物壇の傍に佇んで、落日の光を浴びた窓の傾斜した框板の上に一葉の紙片をひろげ、それに筆を走らせてゐた。何を書いてゐるのだらう？ 彼の手の下から流れ出る文句を、われわれは讀むことが出来るわけである。

これが即ち、サヴェーリイが町長のポロホンツェフに宛てた直筆の手紙である。——『明日は祝日

に當り候につき特別禮拜式執行仕候については、謹んで閣下に御通知申上ぐるとともに、その旨本日直ちに豫め當町の官吏各位に漏れなく御通牒を願ひ、各位とも當院まで御枉駕あるやう然るべき請書を御徴收のうへ御招請のほど、御配慮相煩候。なかんづく特に參列御勸説方相煩したきは、この宗教的義務を等閑に付する傾向最も顯著なる官吏各位にして、その懈怠の故は蓋し愚僧が、電火石火裡に上司に密訴する悪例を彼等が示しつつかある點を、會て指摘したることあるが故と被存候。本狀御落掌の上は請書に閣下の御署名を相願度謹んで得貴意候。』
司祭長は寺の發送簿を持つて來させ、その手紙に番號を入れると、手づからそれを帳簿に書き込んで、すぐさま寺男に命じて名宛先へ持つて行かせた。

二二

その夕べにつづくサヴェーリイの家の夜更けは、われわれがこの老人が日記に向つてゐるのを見たあの夜に似通つてゐた。彼は同じく獨りで自分の小さな廣間にをり、同じやうに歩き廻り、同じやうに腰をおろし、書いたり考へたりしてゐたが、ただ彼の前には例の曆本は見えなかつた。彼の歩み寄つた卓の上には、半分に折られた小さな紙片が載つてをり、その上に彼は、次のやうなきれぎれの覺書を、ぎつしりと字畫正しくまるで南京玉のやうに絲にとほして行つたのである。——

『神よ、ねがはくは爾が天なる審判と爾が天なる正義を爾が子に賜ひたまへ。』

『發端は平凡に、雷雨に遭ひたる予の昨日の状態より説き起す。鴉——彼が雷雨を避けんとして最も堅固なる櫛に隠れ家を求め、而も保護を豫期したる場所に於て死を見出したる次第。』

『かの鴉はいかばかりの教訓を我に與へたることぞ。救ひを待つところに果して救ひありや、滅びを惧るところに果して滅びありや?』

『理性をなみする我等の際限なき思索。今日までに悟得したるものの悟得の可能を否定せんとする所謂博學。』

『靈に關する知識の不足と不確さ。人性に關する無理解と、それより生ずる善惡に對する冷かなる無關心、他人の行動に對する曲解。すなはち、不正を正とし、價值あるものを難ずること。愛國的感情の熾烈さを非議する或る種の自由主義者の謬れる見地よりすれば、猶太人を打擲したる埃及人をば殺したるモーゼは、蓋し非議すべきには非ざるか? 『法を盲信する』輩の見地よりすれば、師を賣りたるユダは蓋し褒賞に値ひせざるや? なんとなれば彼は、爲政者の追求を受けざる師を賣りて以て『法を守り』ければ也。(ヘルソンの司教インノケンチイとその解釋)。現代も同じく種々の陥穽に満ちをれり。隠れたる國賊どもの奸計に對して必ずしも公平ならざる態度を執る者を非難すること。國家の福祉に關する配慮の徒費せらるることの甚大さ。而して最近の實例として、國祭日に於ける祈禱が、なほざりにせられたるがため結局一片の形式に墮し了れること。』

『語釋。——「神よ、ねがはくは爾が天なる審判を賜ひたまへ」をば「ねがはくはわれら静けき平

和なる生を生きむ」(使徒パウロ)の意に解すること。かかる生はいかばかり大切なるや? 例——

ソロモンの後に王位に立ちたるレハベアムは、自己と偕に生長て己のまへに立てる親しき少年等が、狡計をもつて彼に勧めて、民の重き輓を軽くするは彼みづからが王者の尊嚴を貶しむることなりと説きたるに従ひて、イスラエルの禍を増しぬ。「わが父は爾等に重き輓を負せたりしが、我は更に爾等の輓を重くせん」(列王紀略上十一、十二)。この禍より生じたる諸々の出來事および王國の分裂。』

『右よりして明らかなることは、天帝の御心がいかなる人間の手にもゆだねられず、ひとへに神の御手にあるやう、われら須く希念し且つ祈るべき也といふことなり。』

『然るにわれらは不法にもこの心遣ひをなみしをるが故に、予としては、かかる末世に寺が空ろならざるを目睹する毎に、そが何によつて然るかを解するに苦しむ者なり。あらゆる臆測を仔細に検討するに、結局予はこの現象を予の威嚇に對する恐怖心以外の何物を以ても説明すべからざるを見る。従つて予は、かかる禮拜者は悉くこれ狡猾且つ懶惰なる奴僕にすぎず、また彼等の禱りは禱りには非ずして、寧ろ商取引、寺院内の商取引にすぎずと斷するもの也。あはれかかる有様をもし主イエスにしてみそなはせ給ひなば、み心をいたく惱ませらるるとどまらず、手に繩を取りて、彼等を寺より追ひ出し給はむ。』

『主のおん例にならひて、予は予が寺院内にて目のあたりにする斯かる良心の取引をば、叱責し且つ非議するもの也。教會は斯かる雇人根性の祈禱を排す。おそらく予は、誠心ある者をしてかかる狡猾の風に染まざらしめんがため、自ら繩を手にして、今この寺の中にて商取引を營みをる者どもを追

ひ出すも咎めなかるべし。ねがはくは予の言葉が、彼等にとつて繩に代らんことを。寧ろこの寺が空虚とならんことこそ願はしけれ。その期に及ぶとも予は動することなかるべし。予はわが主のみからだと御血潮を予が頭上に捧げて荒野に赴き、祭服を着てごしき石の前にて歌はむ——「神よ、ねがはくは爾が天なる審判と爾が天なる正義を爾が子に賜ひたまへ」と。露西亞よ千載に安かれ、恵み豊かなれ！」

『終の呼掛け、ねがはくは造物主よ！ かれら良心なき不義の奴僕が狡猾なる故を以て、ロシアを他の國民の物笑ひになし給ひそ。』

二三

以上はサヴェーリイがその翌る日、彼によつて會堂に呼び集められた官吏一同を前にして行ふつもりであつた説教のプログラムであつた。また實際この説教は行はれたのであつて、而も以上のやうな言説を以て彼は自分の説教のしめくりを附けたばかりでなく、これを以て教會の勤行の大尾としたのである。

古スヴェーリイ、プロド市の知識階級は、これは説教ではない、革命であると感じ、もし今後とも法主がこんな風説をつづけるなら、官吏連中はそのうちに極りがわるくて表へも出られないことになつてしまふであら

うと思つた。サヴェーリイの親友であり味方である連中さへもが、彼が不用意千萬にも俗衆の反感を挑發した點を、手ひどく非難したものである。この挑發の點に就ては、彼の味方も敵も仲よく一致して、聲をあはせてかう言ひ放つのであつた、——いや、これはもう我慢がならん！ この合唱の外に立つてゐたのは、ボルノヴォロコフとテルモシヨソフといふ二人の外來者があるのみであつた。彼等もその説教を聴聞したのだつたが、別に意見がましいことも言はず、憤慨もしなかつた。それどころか、テルモシヨソフは彌撒から戻つて來ると、腕組みをして、ひどく嬉しさを顔をして、朗讀口調でかう述べた、——『今ははや爾が僕に暇をとらせ給へ。』

「そりや何のことかね」と上役はたづねた。
「つまり、僕はこれで御免を蒙りますといふことですよ。どうぞ御息災にお暮しなさい。ところで、お暇を戴くに臨んで、これを名残りの御厚情に一つあづかりたいものですな。上官に宛てて次のやうな書面を一筆おねがひします——予が先便を以て御報告を申上げたかの僧は、本日國際日に相應しき尊崇の念を一切忘却し、極めて鞏固すべき言辭を弄し候。その言辭に關しては、予が足下に派遣するテルモシヨソフ氏より直々言上するの光榮を有すべく候、とね。」

「どうとも勝手にするがいいさ！ 書きたまへ、署名するから。」
二人の親友は愈々これで袂を分つ段になつたが、彼等の別離は、折しも町人のダニールカが眞蒼な怯えきつた顔をして不意に出現に及んだことによつて一分間ほど延期になつた。彼は全身濡れ鼠のすたすたにされた姿でボルノヴォロコフの眼前へとび込んで來て、そのまま相手の足もとに倒れる

と、こんなことを喚き立てはじめた。――

「旦那さま、わたしを何處へなりお心の向くところへ放逐してくださいまし。もうわたくしはこの町にだけは住んでおられません！ 今しがたも川つぶちに集つてゐた人達が、みんなしてわたしをこんな目に遭はせましたんで。」

とダニールカは、自分が法主のことを悪しざまに訴へ出たといふので、みんなして寄つてたかつて自分を死にさうな目に遭はせたのだと事情を説明し、その證據としてぐしよ濡れの上にしたずたになつた襤褸着物を示し、今しがた皆して自分を橋の上から川の中へ突き落したと上申に及んだ。

「こりや素晴らしいぞ……暴動だ！」とテルモシヨーフは歡喜の叫びをあげると、部屋の中まで帽子をかぶつて、上役に對してかう指摘した、――「ね、どうです、これが奴等の十八番はちたんなんですよ。」
テルモシヨーフがその町を立去ると、すぐに續いてボルノヴォローコフも、ほかの土地の亂脈沙汰を摘發すべく反對の方角へ出發したのである。

二三

古スクーライ・ゴロド市の人々は、トゥベローゾフの説教のことを最早そろそろ忘れかけてゐた。ところが三日目の夕方になつて、驛遞馬車に乗つた一對の奇妙なお客さんが、この町へやつて來た。一人はひよる長

い筋ばつた區警察署長で、もう一人は百姓の作るパン菓子パン菓子のやうにすんぐりした正教管區監督局のお役人で、ボタンのやうな鼻をしてゐる。

これはサヴェーリイの身柄を拘束すべく派遣された役人であつた。法主はこの兩名の監視の下に縣市へ出頭を命ぜられたのである。半時間ののちにはこの町ぢゆうに知れ渡つて、トゥベローゾフの家の前に人垣を築いてしまつたが、一時間ののちには、その家の表扉がひらかれて、旅仕度をしたサヴェーリイが出て來た。ナターリヤ・ニコラーエヴナも良人を送つて出て來て、並んで歩きながら、その小鳩のやうな可愛らしい頭を、良人の肘にもたせかけてゐた。

この二人はお互ひにお互ひの心を安める術を心得てゐて、この場に臨んでも、不覺の涙は一しづくも滲さないのであつた。

法主の出てくるのを待ち受けてゐた群衆は、どつとばかり前へ押し出して、低い喚聲を立てはじめた。

トゥベローゾフは帽子をとつて、帯よりも低く頭を下げて、四方八方へ挨拶をした。群衆の鈍い喚き聲はびつたりやんだ。多くの人々は、はらはらと落涙して、一人のこらす十字を切りはじめた。

町長の濃やかな心遣ひによつて、見えない片隅に匿してあつた三頭立の驛遞馬車が、そこへ引き出された。
法主は片足をその階段へかけ、片手で横木にすがつたが、そのとき例の警察署長は彼の肘の下へ手

を廻して支へ、監督局の役人は残る片腕をぐいと上へ持ちあげた。……老人はさも厭はしげにぶるりと身を顛はし、その頭はまるでバネ仕掛の人形のやうに、がくりと後へ反りかへつた。
ナターリヤ・ニコラーエヴナは小走りに良人の傍へ駆け寄ると、彼の片手をにぎつて、かうささやいた。

「御自分のお生命だけは大切に遊ばして下さいませね！」
トゥベローゾフは彼女に答へた、――

「心配せんでもよいわ。わしの人生はもう終つてをる。これからは『聖なる生』がはじまるのぢや。」

第 四 編

『人生は終つて、これから「聖なる生」がはじまる』と、訊問に答へるための門出の最後の瞬間に、トウベロゾフは語つた。その言葉が終るや否や、彼を運ぶ威勢のいい三頭立は、まつしぐらに坂を駆け登つて、姿を消してしまつた。

法主の見送りに出てゐた人々は、いつまでもいつまでもその場に立ちつくしてゐたが、やがて三々五々散りはじめた。夜が更けわたつて、家々の門や木戸は門でとざされ、中天にかかつた一輪の月が、今や主人のゐなくなつた法主の家の中庭に、主人と別れたナターリヤ・ニコラーエヴナが一人ぼつねんと坐つてゐる姿を、見守つてゐた。

彼女は別に急いで家の中へはいるでもなく、つい先ほどわが良人が降りて行つた玄關の段々に、泣きながら腰かけてゐた。彼女は咽び泣きをしながら、その小さな頭を手欄てりかに打ちつけるのであつたが、ともに涙をわかすべき友もなく、慰めて呉れる人もなかつた！ いや、實はさうではなかつた。彼女

には友があるのだ、それも頗るがつしりした友達が。……

泣いてゐる老婆の眼の前へ、あけはなしになつたままの木戸から、もじやもじやと縮くれあがつた頭髪に何もかぶらず、のつそりはいつて來たのは補祭のアヒュラだつた。彼はコサツク風の短い厚地の寛衣をまとひ、だぶだぶのズボンをはいて、二頭の馬をうしろに曳いてゐたが、その馬の背にはいづれも、どつしりと重さうな荷がしたま積んであつた。ナターリヤ・ニコラーエヴナが黙つて眺めてゐると、アヒュラはその二頭の馬を庭先へ曳き入れ、積荷を地面へおろすと、木戸へとつて返して、そのがつしりした頼もしい手でもつて錠をおろし、鍵をそのだぶだぶのズボンのポケットに仕舞つた。

「補祭さん！ あなたわたしのところへ引越して來て下すつたのねえ！」と、アヒュラの意中を察したナターリヤ・ニコラーエヴナは叫んだ。

「さうですわ、お氣の毒な奥さま、わたしはあなたの守護役に引越して來ましたわ。」

二人は抱き合つて接吻をかはすと、ナターリヤ・ニコラーエヴナはその夜の残りを坐りとほすべくその小さな寢室へ引きとるし、アヒュラは愛馬を納屋へをさめると、玄關の昇り段の上に毛氈をひろげて、ごろりと仰向けにころがると、星空のもとに大の字なりになつた。

その一夜、彼はまんじりともせず、この際ひごころから崇拜するかの司法大臣にどんな手助けをしたものであらうかと、しきりに思ひめぐらしてゐた。これはヴァルナーフカをやつつけるのとは大分勝手がちがふ。今度は智慧を働かせなければならぬ。だがどんなものだらう、智慧だけで、腕力の方には要らないものだらうかしら？ こんな場合にせめてあの……お伽噺にあるやうな飛行毛氈か、急歩

靴か、それとも……隠れ蓑でもあればいいがなあ！ さうなれば彼だつて頗る賢いことが仕出來せる筈なのだが、それが無いとなると、補祭は何から手を付けていいやら皆目わからないのであつた。しかも事態は便々と手を拱いてゐるわけには行かぬのだ。

何せ頭を働かす悪だくみにかけてはさつぱり不得手なアヒュラは、この飛行毛氈と隠れ蓑のことに想ひ到るに及んで、肩の重荷のおりたやうな氣がして、ほつと溜息をつくつと、自ら毛氈に打乗つて飛行しはじめた。彼は例の靴と蓑のお蔭で誰の目にもかからずに、かうした珍寶がなければとても御前に推參できる見込みのない大官連を片つ端から歴訪して、ぐうぐう寝てゐる相手の横顔をそつとつづいては、かう陳情に及ぶのであつた、『サヴェーリーイ和尚をひどい目にあはせないで下さりませ、さもないと後悔しても追つつかないやうな事になりますぜ。』

するとどうだらう、この姿なき聲を耳にするや否や、大官連は豪華な寢床の中で忽ち輾轉反側しはじめ、一人残らず駆け出して、一人残らずかう叫びはじめたのだつた、『おお、後生です、お願いです、サヴェーリーイ和尚の辯護に立つて下さい！』。だが今どきこんなことの出來るのは、急歩靴や隠れ蓑があればこそで、アヒュラが早速それに思ひついて、ちやんと手許に用意したのは頗る慶賀すべきことではあつた。それがあつたればこそ、補祭は黄色い南京木綿の袈裟一枚の姿で、燦爛と光り輝やくこの壯麗なお邸へもすんすんはいつて來られたのであるが、その光輝たるや到底我慢のならぬほどの眩しさで、今となつては流石の彼もこんな所までやつて來たのを後悔したくらゐであつた。今までに歴訪した大官だけでもう充分かと思はれるのに、急歩靴はまつしぐらに突つ走つて、こんな

所まで彼を引つ張り込んでしまつたのである。この邸の光り輝く眩しきときたら、何一つ見分けもなにも附かないほどで、彼は今ではもうサヴェーリーのことも自分の大切な使命のことも忘れて、どうしたら後戻りが出来るだらうかとそればかりに心を碎きながら、身をもがくのであつたが、勇みに勇む例の急歩靴は委細かまはず、彼をぐんぐん高みに連れてゆくばかりで、しかも彼はこの靴を停める號令をつい聞かずに來てしまつたのである。……

「俺は焦げちまふぞ！ ああどうしよう、俺は焦げちまふぞお！」と補祭は悲鳴をあげて、ちやうどそのとき彼の前にちらりと翳つたほんの僅かな小暗い斑點に避難しようと身をもがいたが、同時にこの斑點からニコライ・アフナー・シーヴィチの物靜かな聲がきこえたので、二度びつくりしてしまつた。

「もうおやめなされや、補祭さんや、焦げるのなんのつて大きな聲で寢言なんぞ言つてさ！ まるでわれわれみんな恥のため頬を燃やせとでも言はんばかりさ！」と、侏儒はその小つぽけな身體でもつて補祭の顔から日光を遮りながら言つた。

アヒュラはがばと跳ね起きると、手桶のところへ飛んで行つて、ひやりと冷たい水をブリキの柄杓で立てつづけに一杯飲みほしたのである。

「どうした、ニコラ、その今言つた恥といふのは何のことだね？」と、自分の捲毛を水でしめしながら、彼はたづねた。

「ところで法主さんは何處においでかな？ ええ？」

「法主さんはね、なあニコラ・ヴラ、隠れんぼぢやないが、昨日引張られて行きなすつたよ……」
「何ですつて、『隠れんぼ』ですつて？ それどころか、そんなら助け出さなければならぬぢやありませんか。」

「いやお前さん、俺も昨夜は夜つびてそれを考へたがね、到底何一つ妙案は出なかつたのさ。」

「それそれ、そのことで御座いますよ、石を水に投げるのは誰にでも出来るが、その石を拾ひ出すのは中々難かしい、と言ひましてね。」

と言ひ棄ててニコライ・アフナー・シーヴィチは、小さな長靴をきゆつきゆつ云はせながら、法主夫人を訪ねて家の中へよちよちはいつて行つたが、そこにはほんの一分ほどしかあらずに、早速補祭を連れて町長の邸へ出かけ、そこを出ると町長もろとも判事のところへ廻り、かうして侏儒はこの二人と相談を遂げたのであつたが、町長からも判事からも吉報は耳に入らなかつた。彼等はトゥベローゾフに同情の意を表し、なるほど法主もあんな挑發的な説教をやるなんて拙いことをしたのだが、それにしても今度の處置は何ほ何でも苛酷に失してゐると語つた。

さてどうしたものだらう？ どういふ手を打つたものだらう？ いやもつと一般的に言つて、果してトゥベローゾフの擁護に乗り出すべきであるか否や？ かういふ點になると二人とも一言も觸れなかつた。

侏儒は、役人衆のくだくだしいくせに内容の貧弱な長廣舌を拜聴しながら、溜息をついたり、とつおいつ思案に暮れたりするばかりだつたが、一方アヒュラはといふと、兩眼をばちくりさせながら、

町長の顔を眺めたり判事の顔を眺めたりしてゐたものの、その思ひの落ち著く先は矢張り例の飛行毛氈や魔法の蓑のことで、あれがあるならば兎に角、ないなら土臺打つ手も何もないぢやないかと考へてゐた。乗り出さうにも船がないのだ。

「わたしの力で出来ることは唯ひとつ」と判事はふつと思ひついて言つた、「縣の検事に手紙を出すことだけです。あれはわたしの同僚ですし、きつと法主のため一肌ぬいで盡力して呉れるだらうと思ひますな。」

この案は頗る町長の氣に入つた。ニコライ・アフナーシエヴィチとしては、別にそれが氣に入つたわけでもなかつたが、異を唱へるのはこの際つつしむべきだと思つた。

そこで問題は、その手紙をどうして送るかといふことになつた。郵便は隔日でなければ出ないし、さりとて飛脚を立てるのも、二人の役人の意見によれば餘りに仰々しい嫌ひがある。おまけに例の郵便局長夫人はテルモシヨソフと肝膽相照す仲だし、そのまたテルモシヨソフといふ人物こそ今度のトゥペロソフの件を密訴に及んだ當の發頭人に違ひないと、これはアヒュラの指摘によつて一同が睨んでゐたので、この夫人がその同じ飛脚に託して、この策士に宛てて情報を發送する可能性も濃いと云はなければならぬ。

かうした窺狀を耳にすると、補祭は即座に宜しい引受けましたと名乗り出て、その手紙が出来さへすれば、自分がこの首にかけて明日は必ず名宛先に届くやうに取計ひませうと宣言した。しかしその實行方法に關しては、アヒュラは嚴に祕密を固守して、その點については何も訊いて下さるなと頼む

のだつた。

一同もとより異議はなく、事はそのやうに運んだ。日暮れ前に役人が補祭の手に、毒に藥にもならない一通の書面を密かに渡すと、黄昏れてのち一時間するとザハリヤ師の家に、黒々とした巨大な騎士が馬に跨がつてそつと乗りつけ、片手でほとほと小窓を叩いて、この『おとなしい坊さん』の名を呼んだ。

ザハリヤは窓をあけて、その騎士の姿を見ると、かうたづねた。

「おやお前さんが、えらく物々しい姿をしてゐるぢやないか？」

「シッ！ 嚴重に靜肅と沈黙をお守りねがひますよ」と、じやじやばる馬を脚でもつておさへながら、騎士は意味ありげに答へた。

ザハリヤは人氣のない河岸を左右に目をくばつて、かうささやいた。

「お前さん、なに用で何處へ行くのかね？」

「いや、それは一切申し上げられないんです、ちやんと約束したんですから」と騎士は又も意味ありげに答へて、「一つお願ひがあります。それは明日わたしを捜さないこと、それからもう一つ、わたしがどういふ用向きで出掛けるのか、一切おききにならないことです。……ええままよ、約束はしたけれど、あなただから一つ譬へ話で申し上げませう、――」

コサツクは進路を北にとりたり
コサツクは息をつがんと欲りせず

それから、わたしの帽子の中にはね、――

コチュベイより帝ビョートルに宛てし

頭目の悪事をあばく密訴状……

分りましたかね？」

「いや、なんにも分らんな。」

「そこが譬へ話のいいところであ。」

と言つて騎士は、自分の胸をぽんと叩くと、かう付け加へた、――「ですがね、これだけは覺えて置いて下さいよ、ザハリーヤさん、出掛けるのはコサツクぢやなくつて、この補祭アヒルラだといふことをね。それから、わたしの氣持はあの人が辱しめを受けるのを黙つて見ちやゐられないといふ事を、も一つおまけに、この頭の中には手綱をとつて呉れる分別といふものが無いといふ事をね。」

と言ひ放つなり、補祭は馬の手綱をゆるめ、兩の膝頭で馬をぐいと緊め上げて、まつしぐらどころか、まるで飛翔するやうな勢で走り去つた――夜空の暗藍色の背景に、そのもじやもじやの捲髪を、

その南京木綿の袈裟の二抱へも三抱へもありさうな裾や袖を、愛馬の尻尾を、その婆婆たる鬣を、颯爽となびかせながら。

二

補祭が携へて疾驅し去つた手紙に、ニコライ・アフナーシエヴィチが何の期待も置いてゐなかつたのは流石に目が高かつた。アヒルラはまる一週間ぶつとほしに馬を乗り廻して、悄然たる馬上に同じく悄然とうなだれながら戻つて來ると、あの手紙は結局なんの足しにもならなかつた、また何の足しになる筈もなかつたのだと答へた。

「そりやまたどういふ譯だね？」と、アヒルラは問ひつめられる。

「なあに、至極簡單なはなしでさ！ サヴェーリーイ師御自身が、わたしに何もするなと仰しやつたんでさ。ねえお前、折角だがそのやうな骨折りには及ばんよ、われわれ僧門の者の味方になつて呉れるやうな醉狂人はをりはせんよ、皆さんもわしの擁護になんぞ乗り出して下さらんやうに、わしからお願ひ申したと傳へて呉れ、とね。」

さう言つたきり補祭は、それ以上この話をつづけたがらなかつた。

「だつてさうでさ」と彼は斷定するのだつた、「あの方を擁護する術を心得てゐるやうな賢い人が、

一人もわれわれ仲間におない以上は、無駄な騒ぎをしたつて始まらんぢやありませんか？ それよりあの方の言附けを守つて、餘計な手出しはせんがいいですよ。」

そんな話よりもアヒルラが遙かに上機嫌で語つたのは、トウベローゾフの様子がどんな風であるか、この一週間のうちにどんな事が彼の身に起つたか、といふことの方だつた。その彼の話は、――

「大司教さんはね、うちの和尚さんのことで別に物凄いい剣幕といふわけでもないし、腹を立ててなにかちつともおないんですよ。今度あつた罰をうちの和尚に加へることにしたのも、俗界のお役人衆ととにかく反りを合せて行かうといふ、ほんの政策にすぎないんでしてね。サヴェーリイ師に召喚状が来たのは、ただそれだけのことなんですよ、さうですとも！ だからサヴェーリイ師は、身の明りを立てて、すぐ歸つて來ることも出来るわけなんですよ、何しろ大司教さんまでが内心ぢや同情してござるんですからねえ……さうですとも！ それのみか、和尚がお着きになつたその翌日といふのに、早くも大司教から、密かにこんな御内示があつたんですよ――一緒に縣知事さんのところへ行つて、よく事をわけて詫びを入れて來ようではないかつてね、さうですとも！ ところがサヴェーリイ師がね、例の強情我慢な氣象でね、片意地な返事をしちまつた。……自分に罪があるとは思つとりません、従つて何を詫びるのやら見當がつきませんとね！ これで大司教まで怒らしちまつたんです、さうですとも！ ところがね、この御立腹も大したことはなくてね、大司教さんは例の説教についての裁判の判決を青いX印で消してしまつて、サヴェーリイ師を僧正のお宅の寺男の役につけるといふことにして、暗黙のうちに四方八方まるく收めちまつたんですよ、――さうですとも！」

「ちや、あの方はいま寺男の仕事をしてをられるのかな？」とザハリーヤがたづねた。

「さうです。一時間毎の祈禱を誦んだり、晚禱のお經を讀んだりしてをられますがね、平生の癖は依然としてその儘ですよ。例へばこんな話があるんです、――大司教がね、『そちはどういふ風に過ちを犯したのかの？』と、政略的な問をかけられたところが、うちの和尚は取り違へたやうな振りをしてね、もつと政略的な返事をしたんですよ、『その時の風は、ちやうどこの下衣を着用してをりました、猊下』とね。尤もそんなことで相手の心證を害はれたのですがね、さうですとも！」

「お・お・おほ！」とザハリーヤは慨歎して、絶望的に頭を打振りながら、両手でもつて耳に蓋をした。

「和尚さんは僧侶村の或る憲兵曹長の家に小つぽけな黄色つぽい部屋を、一月銀二枚半で借りてね、御自分で壺をかかへて川へ水を汲みに行かれる有様ですよ。お顔もお姿も大そう瘠せ細られましてね、奥さん、あなた様に何とかして早く來て貰ひたいとお申附けでしたよ。」

「行きますとも、明日にも行きますとも。」と、法主夫人は涙ながらに答へた。

「左様。まづ新聞といへばこれくらゐですな。ところであの手紙を貰つた檢事はね、ただ口頭で、『かうお傳へして呉れ、これはわたしの出る幕ぢやない、そちらにはちやんとそちらの上役があるのだからな』と言つたなりで、返事の手紙はよこさず、宜しく申し上げるやうに傳言しましたよ。もしお望みなら、この『宜しく』をお受け願ひます。さうさう、それからテルモシヨソフ氏からも皆さんに宜しくとのことでしたつけ。縣廳町であの男とひよつくり出逢ひましてね。なんでも威勢よく馬

車を飛ばして何處かへ行くところでしたが、わたしの顔を見ると、『やあ、ちよつと待つてゐて呉れ給へよ、この門のところだな、補祭君。ちよつと君に頼みたい物があるんだ。實はあの郵便局長の奥さんや娘さん達が、わたしの立つ前に無理やりに芳墨帖を押しつけてね、何か詩を書いて呉れと御所望だつたもので、そのまま持つて来てしまつたもの、さて送り返さうにも頼む人がないのさ。まあ一つ頼まれて呉れ給へ、君が歸つたらこれをあの人達に渡して呉れよ』といふわけだね、わたしは肚の中で、糞くらへと思ひましたよ。ぢや縁切りに頼まれてやらう、と返事をしましてね、持つて歸りましたよ。」

補祭は袈裟のポケットから、雑色の紙を綴つた薄つぺらな芳墨帖をとり出すと、こんな文句を讀み上げた、――

*この最後のページに

君のため四行を記す

我等が尊敬のしるしに……

嗚呼、嘔吐な催し給ひそ?

「さうね、これがあの男が皆さんに表した尊敬のしるしですよ、ありがたくお受けを願ひますよ。」

と言ひながらアヒルは、テルモシヨソフの敬意を盛つた芳墨帖を、一同の眼の前のテーブルへぽいと抛り出すと、旅の疲れを醫すため一眠りしに寢に行つてしまつた。

翌る朝は早くから侏儒がやつて來て彼を起して、補祭のそばの乾草束の上に腰をおろすと、かうたづねた。――

「さてそこでな、あなた、この上はどういふ手を打つたものですかな？」

「分らないなあ、ニコラーヴラ、まつたく分らないなあ！」

「それとも、このままで引き退るんですか？」と、ニコライ・アフナーシエヴィチは嘲るやうに言つた。

「だつてさ、ねえニコラ……君はどこへちよつかいを出さうつて言ふんだい？」

「ちよつかいを出す？」

「さうさね、君はどこへちよつかいを出さうつて言ふんだね？ 見たまへ、どこもかしこも狼みたいな野郎ばかりぢやないか。」

「そしてこのわしは、あなた、老いぼれた鬼ですよ。このわたしに狼なんぞ怖くはありませんわい。食ひたけりや、このわたしを食ふがいいんですよ。」

侏儒は立ちあがつて、冷然としてその手を別れのしるしにアヒルに差し出したが、相手がその手

* この四行詩の初め三行は、よく中學生などが持ち廻る芳墨帖に記されるありきたりの文句にすぎない。第四行目に至つて彼は流石に舌が可笑しくなつて、自嘲の文句で結んだのであらう。

を握らうとすると、彼はもどかしげに手を振り拂つて、顔を紅潮させながら、かう言ひ添へた。――
「いやいや、あなた！ そんなことぢや駄目ですよ！ おまけにあなたはその通りの大男ぢやありませんか！ まあわたしのすることを黙つて見ていらつしやい。老いぼれた鬼はね、狼なんぞ怖がり
はしませんよ、食ひたけりや食ふがいんです！」と言ひ棄てて、ニコライ・アフナーシエヴィチ
は咳をしながら自分の大きな有蓋馬車に乗り込むと、そのまま立ち去つてしまつた。

アヒルラは彼のあとを追つて門口まで出てみたが、馬車はもう影も形も見えなかつた。

この日のうちに、補祭はナターリヤ・ニコラーエヴナを良人のもとに送りどけて、自分はその見
棄てられた家を一人で守ることになつた。

三

テルモシヨースフの詩は、サヴェトリーの姿を町の知識階級の記憶から、見事に拭ひ去つてしまつた。このテルモシヨースフが最後に加へた奇想天外な一撃やら、そのお蔭であの圖々しい局長夫人が
その娘が陥つてしまつた世間に顔向けもならない状態やら、そんなことで噂はもちきりで、老法主の
姿などは土地の舞臺から消し飛んでしまつた観があつた。一同は頗る満悦で、腹の痛くなるほど笑ひ
こけるのであつた。テルモシヨースフが『辛辣な悪黨』として好評噴々たるに反し、法主の方は『退

屈な凝り固まり』として時たまにしか思ひ出されなかつた。

日は日に重なり、月は去り月は來た。町は、この物語の本筋とはかかはりのないあれこれの出來ごと
とで、どうにかかうにか時をつぶして行つた。何とかいふ娘が廢兵隊長のボヴェルドーヴニヤのこと
で町長に訴狀を出した、そんなこともあつた。アヒルラが驛舎の玄關の段に腰かけてゐて、旅の人々
の話から、例のボルノヴォロコフ公爵といふ役人が頓死してしまつたといふ噂を聞き出した、そんな
なこともあつた。一方トウベローゾフは相變らず配所の月を眺めてゐて、その味方たちは最早『何と
も打つ手がない』と固く思ひ諦めてゐた。さういふ點では、味方よりも敵の方がまだしも幾分ましであ
つた。少くも彼等のうちの若干はこの法主のことを忘れなかつたからである。例へば例の抜目のな
い局長夫人の如きは、法主の救ひ出しに乗り出したものであつた。つまり彼女としては、テルモシヨ
ースフから受けた手ひどい侮辱を忘れることはできなかつたし、況んやまた他人の災難を見て手を拍
つて喜んでゐる世間を許して置くことも出來なかつたのである。で彼女は、自分一人だけがみんなよ
りも抜目のない、みんなよりも利口な、先見の明のある、更に一步を進めて潔白ですらある女である
所以を、世間に思ひ知らしてやらうと思ひ立つた。

そこへもつて來て、この目論見には打つてつけの機會が降つて來たので、彼女は例によつて抜目の
ない、しかも悪意のある遣口で、その機會を利用したものである。彼女は一ばん世間を、到底眼をあ
いてはゐられないほどの光耀を以て眩惑し、自分の權威を九天の高みにもち上げてやらうと發心し
た。

町から一里半ほどのところにある豪奢な莊園に、モルドコナーキ夫人といふペテルブルグの貴夫人が避暑に来てゐた。この年若い、おまけに頗る麗はしい女性の良人はもう老人であつたが、その彼が會て御用商人だつた頃、ふとした縁で郵便局長夫人の娘の一人の名附親になつて呉れたことがあつた。さうした縁故があつてみれば、このモルドコナーキ老人の若い細君を、その良人の名附娘の命名日の祝に招待することは立派に理由の立つことだし、その席上衆人環視のなかで、博愛家としてまた教會の保護者として令名のある彼女に、虐げられたトゥベローゾフの救出方を頼み込んでみよう——と局長夫人は思ひついたのであつた。

局長夫人の目算は大して拙いものではなかつた。蓋しこの年若い、おまけに凄くお金のあるペテルブルグの博愛夫人は、都では中々の勢力があつたし、地方の役人筋の大なる尊崇を得てゐた。もしこの彼女がやらうといふ氣になつて呉れたら、他の誰にもまして法主のためになるやうな取計ひが出来る筈であつた。だが、その氣になつて呉れるかしら？　しかしその事なら、満座の者が聲援をして彼女に頼み込むことになるに違ひない。

その奥さんは別に話相手もなくして退屈してゐたので、局長夫人の舞踏會に駕を枉げ給ふことを、敢て辭退はしなかつた。妄執の蛇と化した局長夫人は凱歌をあげた。老トゥベローゾフを救ひ出さうといふ突如たる發議を以て先づ郡下をすぐつたお歴々の度膽を抜いてやる、——さうすれば満座の人々も一人のこらず、厭々ながらも謂はば合唱隊のやうな形で、並び大名のやうな形で、自分の音頭に唱和して來るのは目に見えてゐると、彼女は考へたのであつた。

局長夫人はこの甘美な想念を胸に包んで秘めてゐたが、やがてそれを實行に移すべき日が愈々やつて來た。

四

郵便局長夫人の家に於ける命名日の祝典は、田舎町の型どほりに、まづ朝の輕餐^{ザクシスガ}を以て幕を切つて落した。次々に來着する客を出迎へながら、彼等の念頭には何等の眞劍な考へもなく、配所の老人を救ひ出さうなどといふ配慮は今や雲散霧消し忘れ果てられてゐることを見て、彼女は肚の中で歡呼の聲をあげた。

客たちは浮々と嬉しさうな顔をして相ついで到着した。イの一番にやつて來たのは『郡司令官』と綽名されてゐる廢兵大尉ボヴェルドーヴニヤで、これは田舎の書記あがりの、大きな眼玉をした赤毛の士官であつた。彼は自作の詩を今日の賀筵の本尊に献呈すべく携へて來たのである。それにつづいて淑女紳士が續々と登場し、やがてアヒュラ補祭も姿を現はした。

アヒュラもやはり浮々してゐた。彼は袈裟の裾の下から割り抜きの聖餅をとり出すと、それを今日の賀筵の本尊に差出しながら、かう言つた、——

「聖母様のおさがりで御座りますので、はい！」

やがて闕の上に、おとなしいザハリーヤ師が現はれ、丁寧に御辭儀をしながら挨拶を述べた。――
「主よ、祝福を垂れたまへ！ 守護天使の日のお目出度うを申します！」と言ふと、つい數分間前にアヒルラが持参したのと寸分たがはぬ聖餅を、二本の指につまんで賀筵の本尊に與へ、「有難い聖餅を戴きなされ！」と唱へた。

一同にお辭儀をすると、物靜かな司祭は袈裟の裾をさつと擴げて腰をおろし、息をついでからかう言つた。――

「いや今日の勤行はなかなか長うござつて、戶外はきびしい暑さでしたなあ。」

「大そう長うございましたな。」

「左様々々。よいお祈りでありました、ありがたことに！」

と言ふとザハリーヤは、眞新しい袈裟の袖を肘までたくし上げて、お茶を一杯のんだ。

とその時、にやにや笑ひながら唇を拭き拭き、彼の前へ出て來たのは醫者で、一回の彌撒について聖母様の聖餅は何枚出るのですかと質問した。

「一枚でありますな、あなた、一枚で」とザハリーヤは答へた。「至聖至淨の聖母様がお一人しかあらせられぬやうに、聖母様をことほぐ聖餅も一枚さがるのでございますわい。左様、一枚でありますわい。そしてもう一枚の方は、あれは殉教者をことほぎ、聖徒を、豫言者をことほぐのでありますな……」

「では、聖母様のおさがりは一枚で？」

「左様、一枚で、ただの一枚で。」

「ところが補祭さんの説ですと、二枚ださうでして。」

「それは嘘ですわい。左様、眞赤な嘘ですわい」と、人のいいザハリーヤ師は優しい微笑を浮かべながら答へた。

アヒルラは沈黙を守り通すつもりでゐたのだが、醫者はその時自分の袖をぐいと掴んだのを見ると、急いで振りはらひ、持前の太い聲でかう言つた。――

「そんなことを言つた覚えはありませんぞ。」

「言つた覚えはない？ ぢや君の持つて來た聖餅は、ありや一體なんだね？」

「御用の濟んだ聖餅でさ」と補祭は返事をする、テーブルの下にかがみ込んで、こんなことを喋りだした、「おや、さつきここにパイプが落ちてたやうだが、ありや何だつたかな……」

「いや、この男にはよくあります事だな」と、醫者の陽氣な高笑ひを忍びやかに繰返しながら、ザハリーヤ師が言つた。「この男はお寺でも、時々何やかやと出鱈目を言ひ出しますが、といつて何か下心があるといふわけでもありませんので、左様、この男には何の下心もないのでしてな。」

命名日の朝の御馳走は、今回はお茶だけで散會の手筈になつてゐた。局長夫人は相當に持つて廻つた淡泊な調子でもつて、宅では今日の御馳走はお夕飯にさせて戴くことにしてをります、従つて晝食にはどなた様もお招き致しません、その代り夜分には皆様に充分めしあがつて満足して戴き、皆様に歡をつくして戴けるやう、精々努力をいたします、と一同に告げた。

さて今や、この歎賞すべき夕べとはなつたのである。

五

郵便局長の一家は總出で、大切なペテルブルグの正賓を出迎へた。

大柄で色白で押出しの立派なモルドコナーキ夫人は今日の集ひを幸ひあらしめたわけであるが、彼女の前に出ると一切が光を失ひ、はじめな姿になつてしまふのだつた。さしものダンカ・ビジューナでさへ、この奥さんの前ではべちやんこの形だつた。主婦はといふと、別にべたべたしたお世辭の文句で苦勞するでもなく、正客のまはりに最も興味のある人物を陣どらせ、ボヴェルドーヴニャ大尉とヴァルナーヴァ・プレポテンスキイの二人を起用して、正客のお相手を百方つとめさせた。その一方、歡談にちよつとでも都合が悪い人物と睨まれた連中は、遠慮なしに左遷されてしまつた。その連中は誰々かといふと、何かといふと話の最中に『糞くらへ』といふ文句を使ふ癖のある家長をはじめこの町に流行してゐる『少佐みたいに馬鹿だ』といふ諺の起源をなすところの高架索出身の老少佐、それに補祭アヒュラであつた。この三名は巧みに配膳室に隠匿されてしまつたが、そこには葡萄酒と、すでに調理を終へた前菜が置いてあつた。この追放された連中にとつて、蠟燭一本で照らされたこの部屋の居心地は頗る佳絶で、戦線の後方へ遠ざけられたことを些かも託ちはしなかつた。それどころ

か、此の場所は彼等にとつて願つたり叶つたりであつた。氣取りも格式もいらぬ無禮講ではあり、あまりに前菜がすぐ手の届くところにあるといふわけで、彼等は活氣にみちた會話をなし、哲學論を闘はせさへしたものである。少佐は、何が故に人は『屢々厚顔無恥であるか?』といふ問題を探究しはじめ、その起源は甘やかされたことにあると斷じ、色々の實例を引いてみせた。ところがアヒュラは、さうした原因の多くに反對の意を表して、厚顔無恥といふものは二つの原因から生ずる、それは

「忿怒と、更に多くは酒から」であると主張した。

少佐はすこし考へてゐたが、やがて、なるほど酒から來る厚顔無恥といふものはある、と賛意を表した。

「本當ですとも、請合ひですよ」と補祭は説明して、大きな杯で果實酒をぐいつと煽ると、議論を展開しはじめた。——「なんならわたし自身に例をとつてお話ししてもいいですがね。わたしは酔ふと頗るいい男でしてね、といふわけは別に亂暴を働くこともなし、厭らしい考へが浮ぶことも決してないからです。だがその代りにね、わたしは酔つばらふと、自慢がしたくて堪らなくなるんですよ。本當ですとも！それは、斷じて故意にやるわけじゃないんで、正直のはなし生れつきなんですよ。何か自分のことで法螺を吹きはじめ、あとで考へてみると、一體どこからあの時はそんな出まかせな音が出たものかと、われながら呆れる始末なんです。」

家長と少佐は聲を立てて笑ひはじめた。
「本當ですとも！」と補祭はつづけた。「例へばですね、いきなりこんなことを喋りだしまふ—

「檢察の役人たちが大司教の御前に伺候して、わたしは別にして欲しくもないのに、わたしを僧位に列するやうに請願したとか、さもなければまた、縣市の商人が連名で、わたしを補祭長にするやうに運動してゐるとか、さもなければまた……。」補祭はそこで配膳室の中を見まはして、ひそひそ聲で、「いつかなんぞは、突拍子もなくこんな事を言ひだしたものです、——わたしが若年のころ正教管區監督局の書記さんの娘と密かに婚約を結んだことがある、つてね！ いやこいつはどうも吾ながら何とも申譯のない次第でね、あとでみんながこの法螺を話して聞かせて呉れた時には、穴があつたら這入りたいと思ひましたよ。」

「いや、事が書記にまで及んだら、忽ちにして碌なことはありませんわい」と、少佐が氣の利いたことを言つた。

「左様さ、碌なことどころぢやありませんさ！ まつたく以て七なことですよ！」と補祭は合槌をうつて、またもや果實酒をぐいと煽つた。

「いやもう、話がここまで来てしまつたら、思ひきつてぶちまけてしまひますがね」と彼は、なほも聲をひそめながら言葉をつづけた。——「わたしは一ど、持前の大法螺の崇りでね、すんでのことで公けの呵責に遭はされるどころでしたよ。その話を聞いたことがありますか？」

「いや、聞きませんね。」

「こりや呆れた！ 何とも怖ろしい事でしたよ。刑法第一條で絞首に處せられるかも知れなかつたんですぜ。」

「いやはや！」

「さうですとも。しかも、わたしの首が刑場に轉げ落ちるだけならまだしものこと、わたしの名はあのグリーシカ・オトレービエフだのマゼーパだのと共に、七千三百年の長きにわたつて、^{*}四旬齋の第一日曜には、補祭が呪咀の叫びを以て唱へることになつたでせうよ！」

「まさかそんなことが！」と、自分の席で身をくると向け直して、少佐が叫んだ。

「どうしてそんなことのないことがあるもんですか！ 或る親切なお方が命を助けて下さらなかつたら、あつさりさうなつてゐたところなんですよ。」

「ぢや一つまあ、補祭さん、その話をしてみなさいよ。」

「ぢや、ちよいともう一杯ひつかけて、お話しするとしますかな。」

アヒルはまたもやぐいと一杯煽ると、愈々その第一條に該當すべき自分の犯罪を物語りはじめた。

六

「そのひよんな出來事のそもその起りはね」と補祭は述べはじめた、「復活祭の前に、わたしの

* 四旬齋の第一日曜には云々——この日は教會で、オトレービエフ(偽デミトリイのこと)だの如き呪ふべき國賊の名を補祭が大聲で唱へて、「呪詛あれ！」と叫ぶと、満座の僧がそれに和する儀式が行はれた。

馬と寺男のセリヨ一ガの馬を繋いで二頭立にしてね、わたしが縣廳町へ出掛けたことから始まるんです。セリヨ一ガは子供達を迎へに行つたんですが、わたしはただぶらりと出掛けたんでね。わたしが一體なんのために出掛けたのかといふことは、悪魔だつて御存知ないでせうよ。まあ知合ひの誰彼に會つて来ようと思つただけの話でね。さてそんな工合で愈々縣廳町のそばまで来てみると、橋が流されちまつてゐてね、渡舟で川を越さなければならぬ。雲霞の如き人々がわいわい言つて待つてゐるといふ始末。ひよいと見ると渡守の小屋で、兵隊あがりの男が火酒ウヰトカを賣つてゐる。よし、順番がくるまで一番やつてやれと思つてね、二人してずつと通つて、寒さ凌ぎに立てつづけに二合ほどやつちまつた。そこには色んな人が詰めかけてゐてね、新發意もあれば馭者もある、兵隊もあれば小役人もある——この小役人といふやつが一番手に負へない連中ですがね——それにまたわれわれ仲間の僧侶もあるといつた次第でした。われわれの土地の知合ひの人達も中にまじつてゐたものでね、ひとつ交誼を温めようてな譯でまた二合つつ煽つたんです。さてその渡舟についてゐる小役人といふのがね、おそろしく口の達者な野郎でね、われわれ一同に、何とかかとか話しかけて煩くつて仕様がな。そこでわたしは、『なあ君、元の古巢へ舞戻つて呉れないか、君はわれわれと人種が違ふんだよ』つて言つてやりました。するとその男は、『僕はかう見えても、陛下の將校なんだぞ!』と抜かしをつた。わたしはそこで、『おれだつてそんな事を言ひや、まづ參謀將校といつたところさ』とやり返すと、その男は、『なるほど坊さんがたは參謀將校かも知れんが、お前さんはその部下にすぎんぢやないか』と言ひをつた。そこでわたしはね、『いかに神様の御座の前に出りや、おれの位は坊さんより低い

に違ひないが、政治の上のことになりや、おれだつて坊さんがただつて平等だぞ』とやり返す。といつたわけで喧嘩になつちまつた。なにしろぐいぐいと煽つた酒の勢だ、わたしはかう極めつけてやつたんです、『この代書役人め、お前さんなんか理窟が分つてたまるもんかい! お前さんには第一お經がちゃんぶんかんぶんぢやないか。お前さんの脳味噌は空つぽなんだよ。ぢや一つ言つてみる、開關以來、坊さんで帝位に登つた人が一人でもあつたかね?』すると、『いや、それはないな』と來た。わたしは威勢がついてね、『そらみる、ないだらう。ところが忝くも補祭の身で帝位に即いた男があるんだ。』相手はすると、『そりや誰だね? 何時ごろの話だね?』と聞き返す。『何時ごろの話かとおいでなすつたね? 生憎おれは算術家ぢやないから、はつきりその年代を覚えちやゐないがな、まあ一つ物の本でも開けてみて、あのグリゴリー・オトレーピエフがヂミートリイの名を冒して帝位に即く前は、その前身が何だつたかよく調べて御覽。そこでお前には、補祭さまの有難味がとつくり呑み込めることだらうよ』とわたしと言つてやると、向ふは、『そりやオトレーピエフの話ぢやないか、お前さんなんかオトレーピエフの足もとにも及びはしないよ』と切つて返す。なにせこつちは酒の勢でせう、口から出放題をまくし立てはじめたんです——『及びがつくかつかんか、そんなことがお前さんに分るものかい。それどころか、うんと近いかも知れないんだぞ。あのオトレーピエフはヂミートリイに生き寫しだつたが、このおれはあのヴェネツィヤ王フランツか、それとも土耳其のマムードに生き寫しで、みごと王位に登つてお前さんの鼻を明かして呉れようぞ!』わたしがこれを喋り終へるか終へないうちに、その小役人は忽ち大聲で喚きだす、がやがや騒ぎがはじまる、やれ證

人だ、やれ書類だ、といふ騒動になつちまつたんです。わたしは捕つて、高手小手にくり上げられて、荷馬車に積まれて、護衛の兵隊がついて、牢屋送りになつちまつた。ああどうぞ、あの憲兵大佐のアリベルト・カジミローヴィチ様が御息災で、お亡くなりのは天國に安らはせられますやうに！このお方がその頃われわれの土地の祕密警察の大將でね、翌る朝わたしを呼び出すと、奥さまを呼びにやつてね、かう仰しやつたんです、——『なあ奥や、この僭稱者の顔をよく御覽よ！』てなわけだね、わたしを散々にからかつた上でその儘放して下さつたんです。『さあ、行け、神父マフムード君、今後は火酒もほどに飲めよ』と仰しやつてね。どうぞあの方が長壽であられますやうに！』と補祭はもう一ぺん繰返して、又もや果實酒をぐいと煽ると、かう附け加へた、「かうして今でもわたしは、あの方の健康のために飲んでゐるんですよ！」

「なるほど、そりや君、大した災難をのがれたものですなあ」と少佐がさも感に堪へんといつた面持で聲をながく引張つた。

「まつたく、大した災難でしたよ。だからわたしは平生から、波蘭人はいい人間だと言ふんですよ。波蘭人は權勢をもてあそばない、何か官權を犯したやうなことがあつても、いつも寛大に取計らつて呉れますからねえ。」

夜も更けてそろそろ十二時といふ頃になつて、この三人の世棄人の歡談は破られた。彼等にも社交界の仲間入りをする時が来て、どうぞ食堂へといふ呼出しがあつたのである。

些か酒氣を帯びた補祭が、勿體ぶつた様子を作つて廣間へはいつてみると、そこにはもうちやんと

夜食の用意が出来てゐて、食卓を圍んでぎつしり椅子が並べてあつた。ボヴェルドーヴニャ大尉は早速アヒルラの肘をとらへて、火酒をやつてゐる連中の小卓の方へ引張つて行きながら、かう言つた。

「さあ補祭君、婦人がたに一つ何か面白い笑話でもしてやりたまへ。」

「そりやまたどうしてですか？」と補祭は聞き返した。

「つまりあの連中の注意を惹くためにさ。」

「いやどうも、そいつは御免を蒙りませう！ あなたの好きな婦人がたにうつかり惚れたりするといけませんからねえ！ わたしみたいな獨り者にとつちや、あの連中を眺めるよか、清淨潔白に火酒を嘗めてゐた方が結構ですよ。」

さう返事すると、アヒルラは本當にぐいつと一杯ひつかけたが、ほかの連中もみな夜食の前に正式の火酒用グラスを一杯づつ乾したのであつた。ただ一人の例外はザハーリヤ師であつた。酒といふものは何によらず、ちよつと飲んでも目まひがして來るのである。だから、何か一杯お飲みになつてはと幾ら勧められても、彼は判で捺したやうにかう答へるのだつた。——

「いや、いや、御容赦を！ わたしは酒と名のつくものは一切やりませんでな。」

「でも當今ぢや皆さま召しあがるぢやありませんか」と、傍から説き伏せにかかる。

「いかにも、いかにもその通りでありますがの、わしはどうも駄目ですな。」

「鶏だつて飲みませぬ」と、しきりに勧める連中の説を、アヒルラ補祭も支持した。

「なんと、鶏が飲むならそれもよからうさ！……ちやが、なあ君、わしを鶏と一緒にするなどは

怪しからんう……」

「あなたは鶏にも劣りませう」と、アヒルはやつつける。

「これはひどい！ 何で鶏にも劣るかな？ これはひどい！」

「ぢや、酒と名のつくものが一切駄目なら、お附合ひに一つシェーリでもお上りになつたら！」

ザハーリヤは、この調子ではとても逃れぬところと諦めて、ほつと溜息をつくとき、補祭の差出した杯を手を取つて、かう返事をした。――

「まあステューリなら何とかなませう、では一つそのステューリを戴くときませう。」

七

舞踏會は次の發展段階に入つた。

一同が食卓につくや否や、ボヴェルドーヴニヤ大尉は機を失せず早速また起立して、ペテルブルグの博愛夫人の方へ向つて、自作の詩を朗讀したのである。

この世の外なる麗人よ！

つつしんで歓迎の微衷を表す。

造物主の降したまへる御身をば

わが堅琴はことほぎ歌ふ。

みどりなす御空より舞ひ下りたまへ、

あどけなき悦びありて此處に君を待てり。

この宴の甘き肴に唇ふれて、

ひとときを天なる世をば棄てたまへ。

御用商人あがりの貴婦人は、ほんのり頬を紅らめてこの詩を拜聴し、やがてボヴェルドーヴニヤの捧呈に及んだ紙片を手を受けた。その紙には、無學な代書人あたりによくある筆蹟で、やたらに尻尾や髭の生やした飾り字でもつて、今讀みあげられた詩が書いてあつた。

主婦は有頂天の體であつたが、並居る客としてはまたそれぞれに、或ひはこのボヴェルドーヴニヤの詩が時宜を得たものであるか否か、そのどこが佳くてどこが悪いかといふ點に關しておのづから見を異にしてゐた。町長のポロホンツェフ騎兵大尉は、ボヴェルドーヴニヤ隊長が詩を讀み上げるといふことは何時如何なる場合でも甚だ見事な愛嬌があると思つてゐた。プレボテンスキイは之に反し、愚劣なことと思つてゐた。補祭に至つては、これは頗るもつて老獪な手だと勘ぐつて、ちやうど、ボヴェルドーヴニヤが隣席にゐるので、この隊長にかう耳打ちしたものである。――

「おやおや君は、婦人のことにかけてちや相當な曲者だなあ！」

まあそれは兎もあれ角もあれ、ボヴェルドーヴニャの名詩が出たあとでは、食卓に向つてゐる一座の者は真正銘の浮き浮きした気分になつてしまつて、さうなると今度は、郵便局長夫人にとつては至極ありがたからぬ形勢になつたのである。話聲は小止みもなくつづいて、主婦が例の流謫の法主のことを語り出すきつかけに用ふべき分秒の切れ間もなかつた。一方今日の主賓は、打見たところ萬ざら退屈でもないらしく、心配性の局長夫人が夜食の終頃になつて、御退屈ではございませんで？と訊ねかけた時も、相手は心から愉快さうな調子で、それどころか今日のお客様がたのお蔭でこんな面白い一夕をすごさせて戴いて、何ともお禮の申しやうもない次第ですと答へ、なほ附け加へて、ただ欲を申すなら、補祭さんやボヴェルドーヴニャ大尉と相識ること斯くも遅きに失したことが残念ですと言つた。このモルドコナーキ夫人の感想は決して誇張ではなかつた。アヒュラや大尉の直情徑行ははげしく彼女の心を捉へたのである。ボヴェルドーヴニャはこの自分の評判のよさを耳にすると、即座に慇懃に頭を下げて答禮した。補祭としてはさうまで褒め上げられては平靜を持してゐるわけには行かず、プレポテンスキイの脇腹を小突いてかう言つた。

「どうだい、馬鹿さん、おれたちの持てやうは。お前さんときたらさつぱりだなあ。」

「馬鹿といふのはあんたがたの方ですよ。」

と、むつとしたヴァルナーヴァはひそひそ聲で答へた。

一方ボヴェルドーヴニャは、しばし頭をひねつてゐたが、忽ちアヒュラの腕をぐいと掴んで、二人一緒に中腰に立ちあがると、二人名に於て次のやうな謝詩を誦み上げた。――

われら爾の思出を聖らかに崇めむ、

そをば行末ながく保ちとどめむ、

おお明るき靈よ、爾に祈るを許せ、

ねがはくはこの祈念の聽かれむことを！

そして二人は、拍手に包まれて着座した。

「ええ、どんなもんだい。何しろお前さんときたら、詩一つ知らないんだからなあ」と、アヒュラ補祭はヴァルナーヴァをやつつけたが、その間にボヴェルドーヴニャは又もやびよいと席を立つて、今度はこの家の主婦に捧ぐる詩を誦み上げたものである。――

爾はマトリヨーナとこそ名づけられたり

して總ての女人よりも優れたる者とせられたり

萬歳！

「なんといふ隊長さんでせう！ まつたく一座の寵兒でいらつしやるわ」と、主婦はボヴェルドーヴニャを賞讃した。

「ところがお前さんときたらさつぱりだなあ！」と補祭はヴァルナーヴァを尙もしつこく追求した。

「さあ、みんなで詩を誦むことにしませうよ！」

「さうだ！ さうだ！ まづ町長から願ひませう！」

「いや、これはどうも、わたしが皮切りですとな！」と町長は答へた。「御遠慮は無用ですわい。何なりと出来る方から、どしどし誦まれるがよいですわ。」

「まづあなたから一つ！ 苟くも大尉殿でありながら、さりとは卑怯千萬ですぞ！ さあさ、始めたり始めたり！」

ポロホンツェフ大尉は立ち上つて、杯を顔の高さまで上げると、葡萄酒をとほして燭火をじつと眺め、さて朗誦しだした。――

露西亞を犠牲として甘き眠に酔はしめ

ほど經てのち見んごととどめを刺さんものと

心に期したる暴君が位を退きしとき、

突如として自由の聲はひびきわたり、

かくて露西亞はこの高らかなる同胞の呼掛けに

鐵鎖の下より蹶起し得べかりしものを。

その時よ、恰も黎明を怖るる夜盜の如く

破廉恥にも爾は友なる詩人の許を逃れ去りぬ、

その詩人かく呼びかけたれば、――ユダヤ人の罪業も、

さては折衷信徒の變節や背教も、

はたサルマート人のありとあらゆる破戒も、

われは受け容るるに吝かならず、

ただひとつ、ロシアの民草に

その自由をば返し與ふを得るならば！

萬歳！

「みんなああして朗讀するのに、お前さんぐうの音も出ないぢやないか！」と、又してもプレポテンスキイに向つてアヒルラが言つた。「そりや勿論、どうなりとお前さんの勝手ぢやあるがね、お前さん飲むばかりで、何一つしやべれないとすると、お前さんは人間ぢやなくつて、酒のはいつた革囊にすぎんことになるぞ。」

「革囊だの何だのつて、なんだつて、僕にさうしつこくからんで來るんです！ さういふ自分こそ革囊ぢやありませんか」と教師が答へた。

「な、な、なんだと！」アヒルラは佛然と色を作して呶鳴つた。「おれが革囊だと？……よくも君

聖壽萬歳をめでたく唱ひ終つたあとでなほも敢て唱ひつづけた者は、彼の聲には慣れつこになつてゐるザハリーヤ師と、も一人町長あるのみといふ慘澹たる有様で、残る客たちは一人のこらす銘々の席に尻餅をついて、両手でテーブルにすがつたりお互ひに抱き合つたりして、椅子の上に半ば臥てゐたものである。

補祭は御機嫌ななめならずであつた。

「おみごとなバスですこと」と、まづ最初に彼に話しかけたのは、驚愕から立ち直つたペテルブルグの奥さんであつた。

「とんでもないことです、わたしは何もそんなつもりでやつたのぢやないんで、ただわたしが決して臆病者ぢやなく、朗讀の心得もあるといふことを説明するためにやりましたんで。」

「へえ、なんだつて……ぢや誰か臆病な人でもゐるのかね」とザハリーヤが嘴を入れた。

「その通り、まづ第一には、ザハリーヤ師よ、あなたですわい！ だつてあなたは、長老がたとはうまく話すことさへ出来ないぢやありませんか。吃つてばかりゐてさ。」

「成程さうぢやわい」とザハリーヤ師は承認して、「いかにもわたしは、長老がたの前へ出て他所行きの場合になると、吃つてなりませんですわい。ところで、お手前はどうか、お手前は？ お前さんは長老がたの前でも平氣かな？」

「わたしですかい？……わたしにや誰も彼も同じことですわい。大僧正であらうと平僧であらうと、わたしには何の變りもありませんや。大僧正はわたしに、これこれしかじかのう、とお話しに

なる。わたしの方でも同様に、これこれしかじかでござります。貌下さま、と、お話をする。それだけのことでさあ。」

「そりやまた本當ですか、ザハリーヤさん」と、補祭の見張役を承つてゐる醫師が念のために訊ねた。

「でたらめですわい」と、ベネファクトフはその人の善ささうな兩眼を補祭の顔から外らさずに、

穩かな調子で答へた。

「するとこの先生も大僧正の前に出ると、地べたに平つくばるといふわけですわね？」

「平つくばりますとも。」

「斷じてそんなことはないです！ 第一そんな譯がないぢやありませんか」と、補祭は胸を一ぱいに突き出して、相手を遮つた。「それにわたしの氣象が、そんなことは許さんです。一々みんなに氣を兼ねてゐたんぢや、わたしとしちや生きてる樂しみありませんや。大僧正は成るほど貌下様ぢやあるが、現在のわたしはなかなかそんなもんぢやないんでねえ。それどころか今ぢや毎日々々、貌下様なんぞより百層倍も偉いお方が、わたしをじつと注目しておいでなんでさあ。」

「と言ふと何かい、この僕のことでもあるのかい？」と醫師がたづねた。

「どうして君のことなんて？ いいや、君なんかぢやないよ。」

「ぢや誰だね？」

「君は一體、近ごろの新聞は讀まんのかね？」

「たい新聞にはどんなことが書いてありましたの？」と、まるで子供のやうにはしやいで、正客がたづねた。

「つまり、かうです。主僧長バジャーノフ自身の指圖で、宮廷附合唱團の音頭取りがロシア全國に遣されたのですが、その目的は帝室合唱隊のためバスを选拔することにあるんで。その人は將軍みたいに位の高い人で、勳章まで持つてゐて、なるほど文官には違ひないが、この人の眼には大僧正なんぞは塵あくたも同然なんです。なぜと言つて何しろ陛下のお傍にお仕へする連中ときたら、馭者臺に乗つかつてゐるただの馭者でさへ、ちゃんと大佐なんですからねえ。さてそこでこの音頭取りは、出張中は平民の如く装つて微行を旨とすべしと命ぜられたのですが、それは、候補に上つたバスが偉い人の前だと思つてあがらないやうに、心ゆくまでその咽喉が聽けるやうに、といふ寸法なんです。」

補祭はそこではたと詰つてしまつたが、醫師が傍から急ぎ立てた。

「なある、それからどうしたね？」

「それからですか、つまりこの帝室附の音頭取りがね、この町へやつて来て、もう五週間目になるんですよ、どうです？　そして見ますとね、日曜になるとその人が青い百姓外套を着込んで會堂へはいつて来て、町人たちの間に立つてじつとわたしの咽喉に耳を澄してゐるんですよ。もしこれがわたしでなしに誰か別の人がつたら、どんなことになるでせうね？　まづ差當つてはこの陛下の使臣の前にお世辭たらたら御機嫌を取り結んで、自分の家に招いて火酒を御馳走する、お茶を差上げる、てな段どりになるでせうな、でせう、ところがわたしは違ふ。陛下の使臣だらうが何だらうが、わたしは

ね、どつこい待つた……冗談はよして貰はう……相手がわたしである以上、ちゃんと法規を履んで来て貰はう、法規を履むのがお厭とあらば、あばよ、さやうなら、でさあ。」

「それもこれも、みんなでたためでせうな？」と醫師はザハリーヤ師に話しかけた。

「でたためですと」と、ザハリーヤ師は相變らず穩かな調子で、「些か酩酊の體ですから、この男の口からは明日になるまでは本當のことは聞けませんわい、徹頭徹尾もう天馬空を行く底の法螺ばかりでな。」

「いや、これは眞面目な話なんですよ。」

「いや、もう澤山々々」とザハリーヤ師は遮つて、「なあ、お前さん、お酒を飲んでよいとお許しが出ると、お前には空想に耽るといふ癖があるが、苟くもその癖がある以上は何も腹を立てるには及ばんさ。」

アヒルラは腹を立ててしまつた。事ここに及んでは、もはや彼が臆病者でないといふことを誰も信用はして呉れまい、とそんな氣がして、それが業腹で何としてもやりきれず、いや自分には立派に勇氣があるのだと誓を立てて斷言し、嘘だと思ふなら即刻この場で、最も凄じい試合のお相手でも何でも仕らうと名乗りを上げた。

「わたしはね、ここにお集りの誰よりも彼よりも一番勇氣のあることを皆さんにお目にかけていだ、立派にお目にかけて申しますとも。」

「いや補祭さん、さう勇氣々と自慢するものではないよ」と少佐が言つた。「況んやまた、わん

しには法螺を吹くといふ弱點があると、お前さん自分でさう言つたぢやないかね。」

「構はんです。弱點は弱點として、斷じて自負は棄てんです。——わたしはこの席の誰よりも勇氣があるんだ。」

「自慢はよせと言ふのに、時には勇者も弱卒となることもあれば、また弱卒が大したことを仕出來すこともあるであらう。さうとも、さうとも、どつさり實例のあることであらう。」

「よろしい、伺ひませうや。」

「はて、どの例にしようかな？ よしよし、ぢや一番よい例を一つお話しするとうしようかな。」

「よろしい、お話しなさいとも。」

八

「わしがコーカサスから轉勤になつて來た時はなしぢやが、わしらの隊にな」と少佐ははじめた、
「一人の聯隊長がをつた。これが頗るもつて愉快な隊長でな、中々の精勵家であつた。武勇を賞して黄金のサーベルまで下賜された人でな、その人と一緒にわしらはあの一八四八年の洪牙利の役に出陣したものでやつたよ。さて或る夜中、決死の突撃隊を出す必要が起つた。といふのは敵方がちやうど酒盛をやつてをつたのでな。そこで聯隊長は、『決死隊は何名をるか？』と訊いた。副官が『百十名

をります』と答へた。『ほほう、澤山をるな。その中に臆病者はらんかな？』そこで副官は、『をりません』と答へる。『もしも居つたらどうする？』——『をらんと存じます、聯隊長殿。』——『ふむ、ぢや集めて見ろ。』さて全員が集合する。『よしよし、一つ試してみよう。この中で、一番勇氣のある者は誰か？ 最古參は誰か？』と聯隊長が訊ねると、セルゲーエフぢやつたか、それともイヴアーノフぢやつたか、とにかく誰それでありませうといふ答ぢや。『一つそれを呼び出して呉れ。お前が最古參か？』——『さうであります、聯隊長殿。』——『お前は臆病ではあるまいな？』——『さうではあります、聯隊長殿。』——『臆病ではないな？』——『臆病ではありません。』——『よろしい。臆病者でないなら、おれの口髭を引張つてみる。』さうなるとその兵隊さん、すつかり怖氣がついて、突立つたなり身動きも出來ん始末ぢや。次のを呼び出す。これも同じぢや。三番目も同じ、五番目、十番目も同じことぢや。到頭のこらす臆病者といふことになつてしまつた。
「いや、こいつは面白い！ うまく考へたものだなあ！」と、アヒルラはさも愉快さうに叫んだ。
「『臆病者、おれの口髭を引張つてみる！』か。ハッハッハッ！ 素敵々々！ ねえ隊長さん、ひとつあのヴァルナーヴァ先生に、あんたの髭を觸らせてみようぢやありませんか。」
「いいとも」と隊長は答へた。

プレボテンスキイは平に辭退に及んだけれど、傍から、彼の臆病さ加減を散々嘲罵して唆しかけるので、到頭承知した。
アヒルラが部屋の眞中に椅子を持ち出すと、隊長はその椅子にやをら腰をおろして、騎兵流に、兩

脇腹に眩を張つた。

その周りには町長、ザハーリヤ、家長、少佐の面々が立ち並んだ。

アヒルラはヴァルナーヴァのすぐ肩先のところに陣取つて、その行動を一々見張つてゐた。

教師は息をはずませたり、ためらつたり、身を縮めたり、おぼつと眼を伏せるかと思ふと、突然かつと眼をひらいたりしてゐたが、やがてもじりともせず、身軀ぜんたいで前へ進み出した有様は、さながらその身體の上を人々が滑木つきの櫓を走らせでもしてゐるやうであつた。

アヒルラは持前の親切氣から、精一杯に彼を激勵して、こんなことを言ふのだつた。――

「やいやい、この馬鹿めが、何をさう怯え立つてるんだい？　大丈夫だよ、まさか相手が咬みついて來はしましさいさ、びくびくするな。」

と言ひながら補祭は自分の指の先に唾をつけて、それでもつてヴァルナーヴァの眼に垂れかかつた垂髪を情深く直してやり、かう言ひ添へた。――

「それ、奴さんの髭をふんづかめッ！」

ヴァルナーヴァはぐいと前に踏み出したが、兩の膝に顛へが來て、後に退いてしまつた。

「ええ、仕様のない臆病者だ」とアヒルラは言つた。「この馬鹿め、いやはやこれは、何がそんなに怖いんだい？……笑止な奴だなあ！」

ヴァルナーヴァは思案したが、ますます弱氣になつてしまつた。一方ポヴェルドーヴニャは、まるで異教の小さな偶像みたいに坐り込んで、自分が今や『一座の花形』だと感じながら、何かまた新手

を考へだして満座をアツと言はせようと、用意をささ怠りなかつた。

「お前さんは臆病だぞ、なあ、臆病者だぞ、見さげ果てた臆病者だぞ、分つたかい、この上もない見さげ果てた臆病者だぞ」と、教師の耳にアヒルラが唆しかけた。

「どうしたどうした、意氣地がないぞ。皆さんがお待ち兼ねだ」と少佐が半疊を入れた。

プレポテンスキイはちよつと思案すると、町長を指さしてかう言つた。――

「まあ待つて、僕はあのヴォーイン・ヴァシーリイチのを引張る方がいいんです。」

「いいや、あの人のぢやいかん、このわしのをやれ」とポヴェルドーヴニャは頑張つて又もやぐつと威儀を正した。

「臆病だなあ、臆病だなあ！」と又しても四方八方から私語がきこえた。ヴァルナーヴァはそれを耳にすると、その顔に冷汗が浮び、身體ぢゆうがむすむすして來た。彼はもはや何とも遣り切れない、顛への來さうな怯えの虚脱感にとりつかれてしまつて、その怯え切つた有様は寧ろ悽愴味をさへ帯びて來た。

眞先にそれ氣がついたのは彼のすぐ後に立つて監視してゐたアヒルラであつた。教師の兩眼が鋭くぎらついてゐるのを見た彼は、町長に少し傍へ避けなさいと目顔で合圖し、ザハーリヤに對しては、いきなりその袖をとらへて後へ引き戻して、かう言つた。――

「この男の傍におちやあぶない、和尚さん。御覽なさい、何か無念無想の體ですぜ。」
ヴァルナーヴァは前へ踏み出しはじめた。一步前へ出る、この臆病者のぶるぶる顛へてゐる片手が

ふらふらと動き出し、横腹から離れ、静かにゆつくりと上へあがりはじめたが、それは隊長の髭の方
向へではなく、眞一文字に町長の顔をめざしてゐた。

かうしてヴァルナーヴァの手が町長の顔へじりじりと詰め寄せてゆく有様を見た一同は、思はず微
笑を禁じ得なかつた。

「いやはや、これはどうも皆さん、この男は何て悪魔にとつつかれたものだ！」とアヒュラは叫ぶ
と、町長の方を向いて、危いからお避けなさい、御覽の通りこの男は半狂亂の體ですから、と又して
も警告を與へた。

ところがこのあつといふ間もない一瞬間、プレポテンスキイは半眼を閉ぢるなり、遠くから猿臂を
のばしてボヴェルドーヴニヤの髭にさはつた。隊長はその彼に向つておどろおどろしく唸りはじめ、
思ひがけなくまるで犬のやうな吠聲を發してしまつた。ヴァルナーヴァはこの奇聲の猛撃にゐたま
れず、狂氣したやうな悲鳴をあげると、町長の方へまるで豹のやうにこつくりうなづいて見せるなり、
前後不覺で誰彼の見境もなく擲りかかり始めた。

これこそ誰しも思ひもかけなかつた餘興で、その効果たるや正に百パーセントであつた。ランプは
引つくり返る、石油は燃えあがる、客たちは逃げまどふ、町長は膽をつぶす、攝理の追及を脱れて部
屋の隅に駈け込んでヴァルナーヴァは號泣する——といつた騒ぎになつては、もはや酒宴をこの上つ
づけることは出来ぬ相談であつた。

ペテルブルグの奥さんは御歸館になつた。一方プレポテンスキイは、もともと郵便局長邸の勝手は

隅の隅まで心得てゐたから、一同が正客の見送りに立つた東の間を利して、廊下づたひに事務室に駈
け込むなり、その戸棚のうしろに身を潜めた。

九

局長夫人はジャケツ一枚の姿で自分の居間の中をいらだたしげに行きつ戻りつしながら、一たい、
今しがた勃發した淺ましい事件の發頭人は誰であらうかと、胸の中で穿鑿するのであつた。この一幕
をたくらんだのは、誰なのかしら？

「いや、この一幕ぐらゐならまだしも何でもない」と彼女は推論をつづけた。「そもそもあのプ
レポテンスキイを招待したのは何者かしら？ いや、それは兎に角として、あの男をわたしに引き合
せたのは誰だつたらう？ あの碌でなしの宅の人^{うち}にきまつてるわ。……のめめとわたしのところへ
やつて来てさ、ねえお前、ヴァルナーヴァ・ヴァシーリイチを紹介します、だとさ。ようし、待つて
おいでよ、このヴァルナーヴァ・ヴァシーリイチの御禮はきつとしてみせますよ！ だが一體うちの
人はどこへ行つたんだらう？」と彼女は、あたりを見廻しながら自問した。「もう寝ちまつたかし
ら？ あんな騒ぎのあとで眠れるものかしら？……いや、この儘ちやお腹の蟲がをさまらないわ」
と郵便局長夫人は決心のほぞをきめると、分秒の間もどかしげに廣間に飛び出して行つた。そこ

は、色んな家庭の事情で夫婦の閨房から追放を食つた場合に、郵便局長が假のねぐらに使ふ場所なのであつた。ところが主婦がアツと驚いたことには、そこには亭主の影も形もなかつた。

「ははあ！　こりやあの人わたしから逃げ隠れをしてるんだわ。きつと事務所のソファで高駟をきめ込んでゐるに相違ない。……ようし、駟なんか搔かして置いてなるものか！」と言ふなり、局長夫人はまつしぐらに事務所に駟け込んだ。

局長夫人の目算はまづ殆ど當つてゐた。彼女の良人は如何にも事務所で寝てゐたのである。ただ彼女の犯した僅かな誤謬は、彼女の豫想に反して局長はソファの上には寝てゐずに、卓子の上に寝てゐたといふ點にあつた。ソファに寝てゐたのはプレボテンスキイで、彼はこの家で自分の身に起つた意外の出来事のあとでは、どこか街角にアヒルラが待伏せしてゐさうで怖くて歸れず、郵便局長を説き伏せて、その身の安全のため一夜の宿を請うたのであつた。局長としても、自分の妻がひどく興奮の體なを見るにつけ、この場合にとつて自分の身近に他人を泊らせて置く方が有利だと考へたので、二つ返事で承諾を與へたのみならず、その同じ理由からヴァルナーヴァに一夜の宿をめぐんだばかりか、親切な主人振りを發揮して、事務所においてあるソファを彼に提供して、自分は大きな發送先選別卓の上に寝て、その同じ卓から剃ぎとつた事務用の羅紗を頭からすっぽり引つ被つたものである。

局長とプレボテンスキイの驚てゐる事務所へ私室から通じてゐる扉には、錠がおりてゐた。それが彌が上にもこの精力絶倫な奥さんをいきり立たせた。といふのは、この家の家憲にしたがふと、家ちゆうの扉はいつ如何なる時といへども一枚として、主婦たる彼女の監督の目の前に錠をおろしてはな

らないことになつてをり、しかも局長夫人は事務所にあつても、その寢間に於けると同様、みづから主婦を以て任じてゐたのである。然るに咄々、この前代未聞の厚顔さは！……

局長夫人はかんかんになつた。彼女はもう一ぺん扉にさはつてみたが、扉はあかない。落し鉤はこつこつ音がするのだけれど、いつかな外れては呉れず、その間にも扉の向ふ側からは二色の寢息が聞えて來るのだつた。二色である！　突如としてかうした發見をした時、妻といふものの心臓にとつとく恐怖感がどういふものかは、諸君も御想像がつく筈である！

自分の権利をないがしろにされた奥さんはまつしぐらに廊下づたひに取つて返すと、臺所に駟け込んで、料理卓めがけて突進した。彼女は長いこと暗闇の中を兩手で、蟋蟀か何かが群をなしてうようよとしてゐる大抽斗の中をこそそそやつてゐたが、やがてその搜してゐる當の品物を探り當てた。

それは庖丁であつた。

この一行が喚起する興味は蓋し甚大なものがあるので、ちよつと此處で一息入れなければならぬ。といふのは讀者諸君に、つづく悽慘な場面の立會人になつて戴く準備をして貰ふためである。

生氣躍動せるこの婦人は、大きな肉切庖丁に身を固め、ジャケットの右袖をたくし上げて、まつすぐ

事務所の扉まで引返すと、念のためもう一ぺん耳を扉口の隙間へ當ててみた。中なる不運な御兩人が安らかなる甘睡をむさぼつてゐることは最早毫末の疑をも容れなかつた。けだしその強い方の寢息を立てる人物がまるで鷺鳥の雌みために唸ると、もう一人の優雅な方が『プへ!』といふ長目な氣音を以て之に和してゐることは、ありありと聞き分けられたからである。

局長夫人は庖丁を扉口の隙間へさし込むと、落し鉤をもち上げた。すると薄板で出來た軽い扉は何の造作もなく靜かにギイと開いたのである。

夜明けにはまだだいたいお間があるので、部屋の中は微かに白んで來た窓がやうやく見えるだけであつたが、勝手を知つた眼はいち早くそこに、郵便用の臺秤の載つてゐる卓子と、もう一つ隅つこにある長い卓子と、ソファとを辨別したのであつた。

左手を壁に當てがひながら、局長夫人は瞋恚の形相もの凄くソファめがけて進み寄ると、暗闇の中を手さぐりで、大した手數もなく當の駢の主を探り當てた。その男はずつと端つこのところに横たはつて、頭をすこし垂れ氣味にながら、雷のやうな駢を立ててゐるのだつた。眠つてゐる當人の耳には何の物音もはいらなかつたのは勿論、局長夫人が近づくにつれてその駢聲が却つて一種かう特別な満足の調子を帯びたほどであつたが、それは恰も、間もなくこんな太平樂ともお別れだ、こんな甘い眠はもう二度と再び今日は味はれないのだといふことを、冥々のうちに感じたかの如くであつた。如何にもその通りになつたのである。

駢の主が最後の裝飾音を奏し終る間もあらせず、局長夫人の左手がぐいとばかりその髪をつかんで

引き起すとともに、右手は庖丁を投げ棄てざま、土性骨も砕けよとばかり平手打を喰はせた。

「ムムム……どうして! どうしてだ!」

と、夢を破られた駢の主はさう言ひかけたが、返事の代りにもう一つと更に第三、第五、第十と續けさまに平手打のお見舞で、しかもそれが回を追ふごとに愈々響たかく、愈々出でて益々劇烈且つ耳を聳せんばかりになつて行つた。

「アイ、アイ、アイ、アイ!」と當人は、一寸先も見えぬ闇の中から降つてくる亂打亂撃から免れようと身をくねまげながら、悲鳴をあげたが、その途端に亂打のあらしはたと止んで、今度は音もなく唯もう必死になつて髪をつかんで引き廻す、小突き廻す、といふ騒ぎになつた。

「お母さんや! どうしたんだい、ねえお母さんや! そりやわたしぢやないよ、ヴァルナーヴァ・ヴァン・リエヴィチ君ぢやないか」とそのとき突然卓子の方角から、同じく夢を破られた郵便局長がおろおろ聲で呼びかけた。

局長夫人は泡をくらつて、ヴァルナーヴァの鬚をはなすと、『まあ、あんたといふ人はわたしを何て目に逢はすのさ、この碌でなし!』と絶叫して、良人めがけて突進した。

「うむ。これがわたしだよ……これがわたしだよ!」と局長のぼやく聲をヴァルナーヴァは耳にしたが、何はともあれ逃げ出さにやならんといふほかにはその瞬間なんの考へもつかず、素早くソファから飛び下りると、出口の扉をさぐり當て、下着一枚で街路へとび出してしまった。彼は小つびどく叩きのめされてゐた。袖でもつて顔を拭いてみると、鼻血の出てるのに氣がつい

た。

とそのとき扉がそつと小開きにあいて、局長が小聲でプレボテンスキイの名を呼んだ。

「ここにおる」と、プレボテンスキイは胴間聲で返事をした。

「君の着物だ、失敬したなあ。」

扉はぱたりとしまつて、地面に着物が降つて来た。教師はそれを拾ひ集めにかかつた。一分ほどすると今度は垣根ごしに、長靴がぱたりと彼の足もとに落ちて来た。

ヴァルナーヴァは地べたに坐り込んで長靴を穿いた。それから、なんとかかんとか着物に手を通すと、ふらふらと家路を辿つて行つた。

戸外はそろそろ明るみだしてゐたが、やがてプレボテンスキイが吾家の木戸の環金をがちやがちや鳴らした頃には、それどころかもうすつかり見えるやうになつてゐた。

「おやまあ、ヴァルナーチョークや、一體誰がお前をそんな片輪に？」と、歸宅の遅れた息子を出迎へざま、聖餅焼きの婆さんは絶叫した。

「誰でもないさ、誰も僕を片輪になんかしやしませんよ。まあ横になつてお寝みなさい。こりやただ暗闇で誰かがぶつかつたんですよ。」

「ぶつかつたつて！」

「さうさう、その通りですよ、暗闇で誰かがぶつかつただけの話ですよ。」
聖餅焼きの婆さんはおいおい泣きだした。

「何だつてさう金切聲を出すんです！ 僕はあなたに構つてなんか居られないんだ。」

「てつきりあの連中だ、てつきりあの連中だ、お前をいぢめるのは！」と、婆さんはしゃくり上げながら、「ほんとに、かうなつちやお前はもう此の土地には居られないねえ、ヴァルナーシャ。」

「あの連中つて誰のことです？」と、むつとしたプレボテンスキイは大聲を立てた。

老婆はつい此間まで例の骸骨がぶら下つてゐた今は空つぼの臺の方を手で指してみせ、『亡者たちだよ！』とささやくと、そのまましきりに胸に十字を切りながら自分の小部屋へ駈け込んでしまつた。それから一日すると、教師プレボテンスキイは休暇をとつて、乏しい小錢をふところにして、町から逃げ出してしまつた——この不意の出奔の原因が何にあるかを、一同にとつての永遠にとけぬ謎にしまま。

青痣だらけのヴァルナーヴァ・プレボテンスキイがやつと家まで辿りついたのと殆ど同じ頃、モルドコナーキ夫人も御歸邸になつた。

坦々たる硬い道路に馬車を疾驅させてゆくことは、このペテルブルグの貴婦人に一種快い清涼剤の作用をした。この清涼剤こそは、長時間をさわめきと歡語の只中にすごし、しかも否でも應でもその

間ちゆう列席してゐなければならなかつた人が、正に渴望するところのものなのである。モルドコナ
ーキは自分の見聞した事柄に對して嘲笑的な態度はとつてゐなかつた。彼女はただ單純にこの低級な
仲間への訪問を果し、そして辭し去つたまでのことで、その辭去に當つて彼女の懐いた感慨は、その
むかし自分の家令の細君から無理やりにその赤ん坊の名附親になるやうにせがまれて、その洗禮の酒
盛の席からやつと退出した時の感慨と大して變りはなかつた。

さうした恵まれた心境のもとに彼女は無事に歸邸して、人氣のない豪華な部屋を幾つも幾つも通り
抜け、衣裳をぬいで、さて寢床に横になると、ちよつと寒いやうな氣がしたので寢臺の傍の床几の上
に巻いて置いてあつた格子縞の肩掛の方へ、片手をのばした。

ところが驚くなかれ、この肩掛をかけようとする、その眞中のところに一葉の紙片がピンでとめ
てあるではないか。

うつらうつらと夢心地の麗人は、この自分の肩掛にくつついてゐる附録サブリメントを、もう一度眼を凝らし
てながめた。すると、その紙片のぐるり四方を圍んでゐる風變りな箒縁のまん中に、ロシア文字でも
つて『パロリドネル』と、大きく記してあるのに氣がついた。

『おや、こりや何のつもりだらう！』と彼女は思つて、ピンを引き抜き、その紙片を開いて、次の
やうな文面を讀んだ。——『肅啓。貴女の前に敢て胸襟をひらくを宥したまへ。けだし軍人は常に率
直なるものなれば、お可愛らしき御子がたの夜の眠を親しくみとらんとて、貴女が馬車を驅つて辭去
せらるるを見、予は衷心より喜悅し且つは神に感謝す。ポヴェルドーヴニャが貴女の御愛顧を得るに

値せざる者と思召さば、せめても一筆この世のものならぬ御署名を賜へ。それは蓋し予の銘記して忘
れざるところならん。

予は御身をこの世のものならぬ女性と呼ぶ

御身こそはわが心魂の偶像なれば、

予はつつみなく胸襟をひらいて語る、——

御身の中に蠱惑の世界を秘められたれば。

——『ポヴェルドーヴニャ大尉』

モルドコナーキ夫人はほくほくと打笑つて、この戀の奴になつた大尉の贈歌をもう一ぺん讀み返し
たが、さてパラフィン蠟燭に銀の蓋をかけると、甘い眠りに落ちて行つた。こんなことを考へなが
ら。

『Bon Dieu, voilà la véritable Russie!』

一一

といつた鹽梅で古市の連中が陽氣に騒いでゐた恰もその日、流謫の法主の住む例の黄色い小部屋
では、まつたく別種の場面が演ぜられてゐた。そこではナターリヤ・ニコラーエヴナが將に息を引取

らうとしてゐたのである。

持つて生れた几帳面さと儉しさとから、法主夫人は配所にある良人のもとに滞在の間ちゆう召使といふものを一切つかはず、まるつきり慣れもせず力に合ひもせぬ力仕事を一身に引受けてゐたのであつた。そのうち例の小函の中に有金が最後の二十五留紙幣一枚になつてしまつたので、この分ちや間もなく二人とも一文なしになつてしまふと怖しくなつて、思ひきつて家主の憲兵に向つて、追つて赦免の沙汰のあるまで間代を待つて呉れるやうに頼んでみた。憲兵が承知すると、彼女はこのいきさつを慎重に匿して、何とかして家主に禮奉公をしようと様々に心を碎いた。たとへば家主の下女と一緒になつて馬鈴薯を掘り起したり、キャベツを切り採つたり、または自分の下着を抱へて川へ洗濯に出掛けたりしたのである。

彼女の年齢と彼女のすぐれぬ健康がかうした荒仕事に堪へられよう筈がなく、彼女は病みついて、どつと床に就いてしまつた。

法主はそこで彼女の苦勞性や心配性をとがめた。

「お前はそれでわしを助けて呉れるつもりだらうがな、」と彼は言ふのだつた、「お前がそんな眞似をしたことが耳にはいるごとに、わしはわしは……二倍も三倍も辛い思ひがしたわ。」

「宥して下さいましね」と、ナターリヤ・ニコラーエヴナはささやいた。

「宥して下さいなどいふことがあるものか？ おまへこそわしを宥してお呉れ」と法主は答へて、熱をこめて妻の手をとつて接吻した。「わしは自分の頑固な氣質のためにお前に散々苦勞をかけて來

たが、お前さへさうして貰ひたいといふなら……ちよいと一言いつて呉れさへしたら、お前のために今すぐさまあやまつて來てもいいぞ。」

「何を仰しやいます！ 何を仰しやいます、そんな事をわたくしは決して申しはしませんわ！ あなた様にかれこれお指圖などがこのわたくしに出來ますものですか。あなた様は何をどのやうに取計ふかといふことを、すつかり御存じなのですよ！」

「わしの面目にかけても、なあお前、わしはこの境涯を堪へとほしてみせるぞ。」

「どうぞ神様がそれにお力添へして下さいませやうに。わたくしの事なんぞは御心配なくね。」
法主はふたたび妻の手に接吻して、下僧の役目を勤めに出掛けた。一方ナターリヤ・ニコラーエヴナは海老のやうにからだをくね曲げて眠りに落ちたが、やがて見た夢のなかで、補祭のアヒルラが彼女の部屋へはいつて來て、こんなことを言つた、——「あなたは、なぜ、サヴェーリイ師の苦勞が軽くなるやうにお祈りを上げないのですか？」——「ぢや、そのお祈りの文句を教へて下さいな」とナターリヤ・ニコラーエヴナは訊き返す。「それはね、かう言へばいいんですよ、——主よ、手立てをつくしかの人を救ひたまへ！」とね」とアヒルラは教へる。「主よ、手立てをつくしかの人を救ひたまへ！」と恭しくナターリヤ・ニコラーエヴナは唱へたが、すると突然、補祭が自分を軽々と抱へ上げて祭壇へ運び込んで呉れたやうな氣がした。しかもその祭壇が、とてもとても巨きいもので、柱といふ柱はその頂きが見とほせず、聖壇は天までとどくほどで、しかも煌々とした燈火に輝きわたつてをり、一ぱう今しがた二人の出て來た背後の方はといふと、これはまたどうしたとか、何もかもまる

で小人の國のやうに小つぽけで、そのあまりの小ささに、自分は女の身であるのに禁斷の祭壇へアヒルラによつて運び込まれたのだといふ畏怖の念さへなかつたら、つい可笑しくなつたに相違ない。『あなたには正氣なの、補祭さん!』と彼女はアヒルラに言つた、『女を祭壇へ入れたりして、あなたは僧位を召上げられますよ。』すると彼は、『あなたは女ぢやないです。あなたはね、力なんですよ!』と答へたかと思ふと、この言葉とともにアヒルラの姿も、聖壇も、煌々たる輝きも搔消すごとく消えうせ、ナターリヤ・ニコラーエヴナは夢から覺めて、一體なぜ自分のぐるりにあるものが何から何までかう小つぽけなのだらうと、怪訝の眼をみはつてゐる。そのサモヴァルは一向サモヴァルらしくもなく、まるで玩具みたいだし、その火蓋の上には土瓶の代りに卵の殻がのつかつてゐる。……ちやうどその時トゥベローゾフが僧院から戻つて來て、優しく何か話し掛けたが、ナターリヤ・ニコラーエヴナはしきりに兩手を振りながら、

「静かにして」と言ふのだつた、「静かにして。わたくしはもうぢき死にますわ。」
法主はびつくりした。

「何を言ふのかな、ナターリヤ、氣をしつかりお持ち!」

「いいえ、死にますわ、あなた、死ぬんですわ。わたくしもう半分死んでをりますわ。」

「誰がそんなことを言つたのかな?」

「誰も言つたわけではありませんわ。わたくしもう何もかも半分しか見えませんもの。」

やがて醫者がきて脈をとつたり舌を見たりして、かう言つた、『大したことはありません、感冒と

疲勞ですな。』

トゥベローゾフは、病人は半分しか物が見えないさうだがと言ひ出さうと思つたが、恥しくなつてやめた。

「そんなこと仰しやらないで却つてようございましたわ」と、彼がその話を聞かされると、ナターリヤ・ニコラーエヴナは答へた。

「で、どうかね、相變らず半分しか見えなにかね?」

「ええ、半分しか。あすこの空に見えてゐるのは月でせうね?」

「ああ、月が窓ごしにわれわれ老夫婦を眺めてゐるのだよ。」

「それがわたくしにはまるでお魚の眼ほどにしか見えませんの。」

「ただそんな氣がするだけだよ、ナターリヤ。」

「いいえ、サヴェーリイ様、ほんとにさうなんですのよ。」

トゥベローゾフは妻の氣の迷ひを解いてやらうと思つて、小函の中から例の取つて置ききの二十五ルーブル紙幣を出して見せて、かうたづねた。――

「ぢや言つて御覽、これは何だね?」

「十二ルーブル五十コペイカですわ。」とナターリヤ・ニコラーエヴナは柔しく答へた。

トゥベローゾフは仰天してしまつた。まつたく不可解きはまる怪事である。ところがナターリヤ・ニコラーエヴナはにつこり笑つて、彼の手をとると、眼をつぶつてかうささやいた。――

第五編

「あなたがおふぎけになるから、わたくしもおふぎけてみたのですわ。それがうちのお札だといふことぐらゐ分りましたわ。何もかも小つぽけですわ……でも、かうして眼をつぶると、何もかも大きくなりますわ、とてもとても大きくね。みんな残らず大きくなりますの、あなたも、あの懐しいニコライ・アフアナシーエヴィチも、補祭のアヒルラさんも……ザハーリヤさんも……。いい氣持、とてもいい氣持ですわ、わたしを起さないで！」

さう言つたまま、ナターリヤ・ニコラーエヅナは永遠の眠りに入つた。

亡妻ナターリヤ・ニコラーエヴナの棺のあとから、敷石のない街路の深いぬかるみの中をゆつくり進んでゆくトウベローゾフの顔の不気味なほどの平静さと、そのぶるぶると打顫へる頭とを見て、感動した者はなにも侏儒のニコライ・アフナーシーエヴィチだけではなかつた。深遠な天性を持つてゐる人の、大きなそして沈黙がちの哀傷の中には疑ひもなく誰にも感得されるはずの斥けがたい或る力があつて、それが、自分の哀傷の情を號泣や呻吟の形で吐き出す癖のある小つぽけな天性の人々に、畏怖の念を吹き込み恐怖の感を懐かせるのである。現に今も、誠實な糟糠の妻を喪つて一人ぼつちになつたこの老人に何かのつながりを持つほどの人々は、みんなそのことを感じてゐた。やがて塚の土がナターリヤ・ニコラーエヴナの棺の蓋にばらばらと落ちはじめ、禁められた法主が高い土の堆から降りようと背を返したとき、ぐるりと彼を圍んでゐた人々は一齊に後に退つて、傍へよけながら彼に道をゆづつたが、その中を彼は一人ぼつちで通り抜けて、帽子をかぶらずに墓地の出口まで歩いてい

つた。

門のところでは彼はたちどまつて、鐘樓の聖像に祈禱をささげ、そこで帽子をかぶつて、もう一ぺんあとを振り返つて、はつと驚いた。眼の前に侏儒のニコライ・アフアナシーエヴィチが立つてゐたのである。彼はお墓からずつと此處まで、二歩の間をおいて跟いて來たのであつた。

法主の謹嚴な面上には満悅の色があらはれた。明かに彼は、彼の生涯のかうした辛い瞬間にあたつて、この『昔噺』にめぐりあつたのが嬉しかつたのである。そして彼は、凍つてちぢくれ上つてゐる秋蒔きの野菜に蔽はれて黒々とひろがつてゐる畑の方へ顔をそむけると、ぼたりと兩眼から重たい涙を落した。それはまるで水銀の滴のやうに孤獨な素早い涙で、譬へれば森の中の孤兒のごとく、彼の白い髯の中に隠れてしまつた。

侏儒はこの涙を目にすると、その意味を隅の隅までさとつて、そつと十字を切つた。その涙は、その中に押し縮められた悲哀にとつて漸く狭苦しくなつて來たサヴェーリイの胸を、ほつと樂にして呉れた。彼は自分の前に力強く一息ふつと吹くと、わたしの馬車にお乗りになりませんかといふ侏儒の招待にかう答へた。――

「さうか、ニコライシヤ、よからう、乗せて貰はう。」

彼等は無言のまま揺られて行つたが、やがて馬車が僧院街にある例の憲兵の宿の前でとまると、トゥベローゾフは黙つて侏儒の手を握りしめ、そのまま黙然として自分の部屋へはいつて行つた。

ニコライ・アフアナシーエヴィチはその後については行かなかつた。トゥベローゾフが一人きりに

なりたいたいと思つてゐることを彼は察し、且つその氣持がよく分つたからである。彼が孤獨の法主を見舞つたのはその晩になつてからのことだつたが、暫く坐つてゐたのち、お茶を一杯と所望した。それは寒くて凍りさうだといふ口實のもとに所望したのであつたが、實はその主な目的はサヴェーリイの悲嘆をまぎらして、彼ニコライ・アフアナシーエヴィチがやつて來た當の用件を切り出さうと試みたのであつた。このニコライ・アフアナシーエヴィチの謀はこの上もなく上首尾に行き、トゥベローゾフが自分の部屋にしゆんしゆん沸き立つたサモヴァルを持つてはいつて來て、食器棚から茶碗をおろしてお茶の用意をはじめた時、侏儒は先づ遠廻しに、町で彼等の身に起つたあれこれの出來事を靜かな調子で物語りはじめ、この物語を一步一步、一日一日と、次第に現在に近づけて來て、遂に今かうした彼が、この陋屋に坐つてゐる今この時にまで漕ぎつけてしまつた。その物語の中で最も大きな場所を占めたのは、言ふまでもなく、不運な法主に寄せる町の悲しみであつた。彼の不在を哀しみ、この分では彼をこのまま永久に失つてしまふのではないかと心配する、町の人々の氣持であつた。法主はといふと、このニコライ・アフアナシーエヴィチの物語の發端のあたりは謹嚴な、殆んど無關心に近い平靜さを以て聽いてゐたが、そのうちに話が最後の段にはいつて信徒一同の自分に對する態度のことに及ぶと、俄かに注意をつよめ、やがて侏儒があたりを氣をくばつて一段と聲を落して、信徒の連中が村團の決議の形をとつた請願書を起草し且つそれに署名を列ねた次第、それを彼ニコライ・アフアナシーエヴィチがアヒュラの手から託されて『自分の懐ふかく匿した』次第を物語りだすと、老法主は急にわなわなと下唇を引つ攀らせて、かう口走つた。――

「親切な人たちぢや、忝いのう。」

「まつたくで御座いますよ、法主さま、町の人達は親切な、ほんとに親切な連中なのですけれど、ただ今のところはまだ、何をどうしたらよいものやら、それが分らずにあるのでございますよ」と侏儒は答へた。

「闇ぢや、闇が深淵にたち罩めてをるのぢや……しかし神靈が上にあつて照覽まします」と法主は言ふと、胸の奥底からほつと深い息をついて、今しがた話の出た文書を見せて貰ひたいと頼んだ。

「でも法主さま、あなた様がそれを御覽になつてどうなさるので御座います？」と侏儒は抜目のない微笑を見せて問ひ返した。「あれは上書にあります宛名のお方に、明日差し出す手筈になつてをりますので。」

「まあいいから出してお呉れ……わしはちよつと見て置きたいのだ。」

侏儒は服のボタンを外して、自分の肌身につけておる胴巻の口まで手を入れようとしたが、ふと何か思ひ當つたと見え、そのままよしてしまつた。

「出してお呉れ、出してお呉れといふのに！」とサヴェーリイはせがんだ。

「でも法主さま、あなたは……これを、そのおやぶきにはなりませんか？」

「大丈夫だ」とトゥベローゾフはきつぱりと言つて、やがて侏儒が、南京玉みたいに細かいのや、一寸五分角ほどもありさうな大きいのや、読み易いのや、讀みにくいものや、種々さまざまの署名が書き散らかされてある数枚の紙片をとり出して彼に渡すと、サヴェーリイは敬虔な調子でかうささやい

た。――

「やぶく……この貴い寶をやぶくとな！ いや！ そんなことがあるものか！ これと一緒になら牢獄ひごやに下つても構はん、これと一緒になら十字架に上るも悔いなしぞ。これと一緒になら棺桶へも甘んじてはいるわい！」

と言ひながら、彼は素早くその紙をくるくると巻いて、自分の祭服の下衣の胸もと深く納めてしまつたので、侏儒はいい加減あわててしまつた。

「そりや困ります、法主さま、それはその筋へ差出さなければなりませんので！」

「いや、それには及ばん！」
とトゥベローゾフはかぶりを振つて、不承知のしるしに一本指を左右にふつてみせると、きつぱりした語調で、

「いや、ニコラ、それには及ばん、それには及ばんよ。」

さう言ひながら彼は一層しつかりとその請願書を胸許へしまひ込むと、下衣の帯をぎゆつと締め、襟のホックをかけてしまつた。

かうなつてはもう請願書を取戻すことは全然望みがなかつた。なんなら太鼓判を捺してもいいが、彼はこの貴重な『村團』の寄書と別れるくらゐなら、寧ろこの世に別れる方を擇ぶに相違ないのである。

侏儒はそれを見抜いたので、あわてず騒がずゆつくりと、サヴェーリイ獨特の心の琴線をそろそろ

搔き鳴らしにかかった。まづその手初めにニコライ・アフナーシエヴィチは、この村團が擁護に乗り出したといふことが如何ばかり偉大な悦ばしい意義を有する事柄であるかといふことから説き起して、次いで各人にとつて村團の意志といふものが如何ばかり神聖にして犯すべからざるものであるかといふ事に説き及んだ。

「あの人達は、法主さま、もう二度と再びあなた様に會へないのではないかと、悲嘆の涙に暮れてをりますで。」

「まあ、それは致し方ないわ」と法主はほつと溜息をついて、「わしも長いことはないわ。餘命もはや幾何もない老骨ぢやわい。」

「しかしこのわたしは、ねえ法主さま、このわたしはどうなりますので。村團から大事を託されながら、どの面さげて連中の前に出られますので？」

トゥベローゾフは歩きはじめて、その小部屋の壁についてぐるぐる廻つてから、片隅の聖像の前にたちどまると、胸から例の紙片をとり出してそれにもう一ぺん接吻し、かう言ひながら侏儒に返した。――

「なるほどお前の言ふとほりぢや、よいよい、村團のいひつけ通りにするがよいわ。」

二

ニコライ・アフナーシエヴィチは、その託された使命をいざ遂行する段になると様々の苦勞に遭遇したが、倦まず撓まず實に熱心に働いた。大人の村團から派遣されたこの小ぢやな使節は、冷めもせずさりとて熱しすぎるでもなく、これぞと思ふ獲物に吸ひついた壁蝨のやうに、決して後へはひかなかつた。サヴェーリイを彼は毎晩のやうに見舞つたけれど、晝間の苦勞のことは一ことも口にせず、相手の方でも無論なにつ問ひかけはしなかつた。がその間にも事は随分とはかどつて、ナターリヤ・ニコラーエヴナの亡くなつた日から九日目には、法主が墓地から戻つてくると、侏儒がかう彼に言つたほどであつた。――

「さあ、法主さま、そろそろ御一緒に家へ歸りませう。あなた様は御赦免といふことになりませんか。」

「わが身のことは主の御ころのままに」とトゥベローゾフは動する色もなく答へた。

「ただその筋では、あなた様になつて要求がありますがな」と侏儒は言葉をついで、「それはほかでもない、今後はきつと慎しむといふ誓書を一本入れるやうにとのことと御座いますよ。」

「よろしい、慎しまうとも……きつと慎しまうとも、なにせ……わしも衰へ果ててしまふたから、この上なをしようとしたところで、何もできせんからのう。」

「ぢや、その誓書をお出しになりますので？」

「出さう、承知した……出さうとも。」

「なほその前にもう一つ……懺悔状を持参されて赦免をお願いになるやうにと申してをりますが。」

「何のかどでぢやな？」

「不遜の振舞で……。と申しますのはつまり、あちらで『不遜の振舞』と申してをりますのでして。」

「不遜の振舞か？ わしはつひぞ不遜の振舞に及んだこともないし、また他人をも自分の力の及ぶかぎり、不遜の振舞に及ばんやうに訓して来た。ぢやから、自分のしたこともない所業を懺悔せよと言うても、所詮は出来ぬ相談ぢやよ。」

「あちらでさう申してをりますので、さういふ言ひ方をしてをりますので。」

「あの連中にかう言ふがよい、わしは自分が不遜きはまる男ぢやとは思つてをらぬとな。」

トウペローゾフはたちどまると、右手の人さし指を真直ぐに上に立てて、かう聲高に言つた。――

「そのむかし豫言者は熱中のあまり神のことを論うたものぢやが、そのために不遜といふ汚名を着せられた例もない。あの連中にかう言ふがよい、お前様がたの從僧がお前様がたにこのやうに申し上げると申しつけました。拙僧は元來が熱中家でありまして、生れつゝいた熱中家の姿そのまま死

ぬつもりでござります、とな。してもうこれ以上赦免のことは何も言うて呉れるな。」

世話人はこのきつぱりした返事を頂戴して引きさがると、あらためてまた馬車を乗り廻したり、歩き廻つたり、頼み込んだり、手を合せたり、果ては人間の審判や神の審判まで持ち出して感しにかか

つてみはしたけれど、衰へかけた彼の舌三寸は徒らに唾を飛ばしたにすぎなかつた。

侏儒は病氣になつて寝ついてしまった。この一風變つた辯護士が引受けた事件もあまり難攻不落

で、そのために彼は精も根も竭き果ててしまつたのである。

そこでこの老人の二人の役割は入れ替りになつて、今まで毎日々々ニコライ・アフナーシエヴィチがトウペローゾフを見舞つた代りに、今度はサヴェーリーイの方が、日課の薪を挽いて、それから僧院で晩禱を修し終つたあとで、徒歩でもつてプロドマーソヴォ村の大きな邸へ通ふことになつた。そ

のとある閑静な小部屋に、病みついた侏儒が臥してゐるのである。

サヴェーリーイとしてはこのニコライ・アフナーシエヴィチが可哀さうで可哀さうでならず、親身

になつて嘆き悲しんで吐息をつきつきかう言ふのだつた。――

「今にして思へば、これまでにわしのため苦勞をして呉れて、それで精根竭きなんだらよつぽど不思議ぢやのう。」

「法主さま、わたしのやうな老ぼれ鬼のことを、何でそのやうに仰せられます？ このうへわたし

が何の役に立ちませう？ ちがひます、あなた様は御自身のことを、またあの信徒衆のことを、御自分の留守をまもつてをられる主僧どののことを、少しは哀れと思つて下さりませ。信徒衆はあなた様

が詫びをお入れ遊ばすやうにお願い申してをりますのですよ！あの人達を慰めておやりなさいまし、
赦免をお願いあそばさしませ！

「それは出来ん、ニコライ、それは出来んよ！」

「でも法主さま、あの連中は一生懸命にお願い申してをりますのですよ！あの連中はね、お役人
衆のやうな横柄な言ひ廻しが出来ないだけのこと、心のなかではあなた様がお氣の毒でならず、町
ぢゆうの人達がわいわいあなた様の擁護に起ち上つたことを内心快からず思つてゐるのでございま
すよ。……それに町の者一同の折角の好意を無にするも如何かと思はれますし、とにかくこの際好意を
しりぞけなどなさらずに、あの連中の身にもなつて考へておやりになつて、思ひきつて赦免を願ひ出
てあの連中を慰めておやりなさいまし。」

「それは出来ん、ニコライ、それは出来ん！赦免は慰めとは違ふでろう。」

「まあさう我を張らずに！」

「わしは何も権力の前に我を張りなどはせんよ。ただな、地上の権力よりも遙かに高いものがあつ
て、それが一層大きな権力をわしの上に揮つてをるだけの話ぢや。……かう見えてもわしは法の下に
ある人間ぢやよ。シラクは名を汚さぬやうに慮ることをわれわれの務めとしたが、聖パウロは彼の市
民権の侵害に抗議したものでぢや。わしは懇願などして自分を卑しめる権利はないのぢやよ。」

侏儒はすつかり絶望してしまつた。法の下にある法主は一步すら譲りさうな氣配がなかつたからで
ある。彼は儼然と自分の場所に立つてゐて、前へも後へも、右へも、左へも、いつかな動いては呉れ

ないのだつた。

ニコライ・アフナーシエヴィチはそのやうなサヴェリーイ師の態度を今となつてはよしとは見な
かつた。まさかその彼の行動を傲慢のせゐとも血氣のさせる業とも思ひこそしなかつたものの、とに
かく法主にはあまり褒めたものではない頑固さがあると思ひ、それを非難する氣持から、更に直言し
てみようと思つた。

「ですけれどね、法主さま、サヴェリーイ様、少しは上に立つ人の身にもなつて考へて上げなさら
なければいけませんまい、つまりその……つまり、せめて上に立つ人達にだつて、何か溜飲のさがるや
うな返報の機會を興へておやりにならなくてはいけませんまい。でなけりや向ふでも引つ込みがつきま
せんものねえ。」

「そりやあつちの仕事ぢやよ。」

「そ、それがいけません。つまりあなたは上に立つ人達に對して少しも同情といふものがないので
すよ。」

「いや、とんでもない。わしはな、わしらのあの氣の毒な上役たちに、大いに同情してゐるよ！」
と、法主はほつと溜息をついて答へた。

「では、ほんのちよつと御自分の習慣をお枉げなさいまし、謝罪なさいまし。」

「それは出来ん、法が許さんからなあ。」
侏儒は吐の中で、これでは到底どうにもなりさうもないと一切の希望をあきらめて、そろそろ町へ

歸る仕度をはじめた。サヴェーリイは少しも反對を唱へなかつたのみか、却つて歸つた方がよいと勧め、町の連中にどう言へとかどう返事しろとかいふ指圖は一切與へなかつた。最後の瞬間まで、關門を出て町を去つてゆく侏儒を見送る時まで、彼は依然として爪の先ほどすら讓歩せず、通ひ馴れた街道を市の方へ取つて返しながら、僧院の中庭へ薪を挽きに行くべくゆるゆると歩を運ぶのであつた。

ニコライ・アフナーシエヴィチの悲嘆は限りがなかつた。かうした體たらくで歸途につかうとは彼は全く豫期しなかつたところであつたので、彼は今や小止みもなしに一つことばかりを思ひ廻らしながら馬車に揺られて行くのであつたが、やがて突然彼の胸に、一つの考へが浮んだ。それは至極簡單な、はつきりした、助舟のやうに有難い、光輝燦然たる考へであつたが、さうした考へは滅多に天降つて来るものではない代りに、來るとなると大抵は不意に浮んで來るもので、あたかも何處か上方から降つて來る如く、とても我々自身の中から出て來るとは思へないものである。

侏儒は二里半ほどを市まで引き返して、サヴェーリイの上役のところへ出頭すると、どうぞ法主に謝罪方を命じて下さいと懇願に及んだ。

上役としては、あの頑固な老僧をもう大分前から持て餘してゐた矢先なので、侏儒はその所望の命令を易々と手に入れることが出來た。彼はすぐその足で突然トゥベローゾフの前に現れて、かう言つた。――

「さあ法主さま、増上慢の法主さま、あなた様は御自分から赦免を願ひ出るので厭がりなすつた罰に、上からの嚴命で謝罪をなさなければならぬ羽目におなりですよ。わたくしは上意を受けて參りま

した――その筋はあなたに謝罪方を命じてをられます。」

「それは一體何處でこのわしに跪けといふのぢやな。此處でか、廣場でか、それともお寺でかな？」と、素氣ない調子でトゥベローゾフは訊ねた。「わしはどこでもいいぞ。命令どほりにわしは一切を履行するつもりだ。」

侏儒はそれに答へて、誰も彼にそんな體面にかかはるやうな事を要求してゐるのではない、ただ要求された請願書を紙に書けばいいのですと言つた。

トゥベローゾフは即座にペンをとつて、然るべき筋に宛てて然るべき願書をしたためたが、『御要求により、恭しく請願』といふ題をつけた。侏儒はこの『御要求により』といふ字は此の際まつたく當を得てゐないと注意したけれど、サヴェーリイは斷然その注意を斥けて言つた。――

「いや、もう澤山々々、まさかお前はわしに論理を教へろとまでは命ぜられてをらんぢやらう。わしはこれでも神學校でそれを習つてをる。わしに要求されてをるとお前が言つたから、わしは『御要求により』と書いたまでぢや。』

結局そこでサヴェーリイ師は、彼を持ち扱ひかねて閉口してゐたその筋によつて放免されることになつたが、その出した恭しき請願に『御要求により』と但書がついてゐたばかりに、その請願書には或る種の決裁が上役の手で附言されて、そのためこの老人はその『小理窟』のため、向ふ半ケ年は緘口令を布かれることになつてしまつた。

サヴェーリイはそんなことには一向頓着なく、禮を言ふ必要ありと自ら認められた人々には残らず禮言

を述べて、侏儒と連れ立つて永く且つ辛かつた配所を後に歸途に就いた。

三

道中二人は極く稀に言葉を交すのだつたが、それも最初に口を切るのはニコライ・アフナーシエヴィチに限つてゐた。使ひ古した羚羊皮の手袋をはめた兩手を膝の上に組んで、黙りこくつて坐つてゐる法主の氣を何とかして紛らさうと、彼はあれこれの話をしかけるのであつたが、トゥベローゾフはそれを聞き流すか、さもなければ頗る短い言葉で應答するだけだつた。信徒一同がどんなにトゥベローゾフを慕つて泣いてゐたか、また郵便局長夫人が自分の良人をぶつつもりでプレボテンスキイをぶつた次第、さてはこの教師が町から出奔して、ビジューキナがその後を追つた次第——そんな話を侏儒はするのだつたが、老人は依然として黙然としてゐた。ニコライ・アフナーシエヴィチはトゥベローゾフの家のことを話題に上げて、あれはそろそろ根太がゆるんで來たから修繕しなくてはと言つた。

法主は溜息をついてかう言つた。——

「あんなものはこれからのわしにとつては塵芥ちりくたも同然ぢやよ。わしはこれまであんなものに執着してゐたのが慙愧に堪へん氣持がするわい。」

侏儒はそこで話題を轉じて、あのアヒュラといふ男はしよつちゆう何かしら心の慰めを見附けてゐる、近ごろは退屈のあまり急な崖の下でみつけた盲の小犬を家へ連れて來て、それと遊んでゐると物語つた。

「それはいいな、せいぜい慰めを得るがよいわ」と法主はささやくやうに言つた。

ニコライ・アフナーシエヴィチは力を得た。

「さうですとも」と彼は始めた、「これは本當のことですが、法主さま、なにせあの補祭さまの御氣象ですから、この小犬のことでもまことに色々な面白い話がございますので。あの方はこれまでと同じく、この小犬も笑ふやうに教へ込まれたのでございますよ。あの方が『小犬や、笑つて御覽』と仰しやると、犬は齒をむき出して見せるのでございます。ところが、さてこの小犬に何と名をつけたものかと、それがあの方の頭痛の種になつたのでございます。」

「どんな名を附けようと、犬つころにとつては同じことではあるまいかな」と法主は澁々ながら應じた。

侏儒は、アヒュラの話になると道伴れが今までほど冷淡でないのを見てとつて更に物語をすすめた。「いかにもさうではございますが、まあちよつとお待ち下さいまし！それが補祭さまの御氣象としては、同じことではないのでございますよ。あの方は何か頭に浮んだら最後、もう矢も盾も堪らなくおなりなのですからねえ。で、仰しやるには、『おれがこの小犬を家へ連れて歸つたのは、一寸特別のことがあつて心配で胸がわくわくしてゐる時のことだつた。だからその時の記念に、何かかう前

代未聞の特別な名前をこいつに付けてやりたいのさ」とね。」
法主はにつこりした。

「そこでね、アヒュラさんはそんな都合でわたくしどものプロドマーソヴォの家へ馬を乗りつけられましてね、わたくしが姉と一緒に住んでをります部屋の小窓の前で馬の背につつ立ちあがつて、大音聲でかう呼ばれたのでございます、『ニコラーシャ！ おいニコラーシャ！』わたくしはやれやれ、また何か始まつたのだらう、とかう思ひましてね、通風口から乗り出しまして、『ねえ補祭さま、ひよつとしてもしやサヴェーリーイ様の身に何かもつと悪いことでも起つたのではないでせうか？』と申しますと、『いいや、さうぢやない。おれは別の用事があつてお前のところへ来たのだよ、ニコラーシャ。ちよつとお前の智慧が借りたくてな』と仰しやるのです。」

「ではどうぞ、まづおあがり下さりませ、——まさかあなた様もわたくしも、お互ひにコサックの番兵ぢやあるまいし、一人は馬上から、もう一人は物見櫓から、大音聲に呼び交すこともないぢやございせんか。それとも一つコサック流に、貴様なにか用かとも申しませうかね——と申し上げますと、お上りになる氣はないらしく、『ぐづぐづしてゐる暇はないんだ、それにおれは一人ぢやないんだよ』と仰しやるのでございます。」

「一體その御用といふのは何でございますか？ 早く仰しやつて下さいませよ、旦那様。さもないとかう通風口に立ち塞つてるんぢや寒くてなりません、何しろ寒がりん坊のわたくしでございますからね——と申しますと、『いやお前は小さい時から地主様の邸から邸へと渡り歩いた男だから、犬の名

前は残らずみんな知つてる筈だな』と仰しやるのです。とんでもない、犬の名前なんぞさう残らず覚えきれぬのですか、どちら様でも銘々いろいろな名前をお付けになりますからね、とお答へしますと、『いいから早く片つぱしから言つてみる』と大變な劍幕でございます。そこでわたくしは、そもそも犬の名前と申すものは、まづ大抵はどちら様でもその犬の種にしたがつてお付けになります。例へばボルゾイ種ですと『ミロルド』といふ名が多く、それよりもぐんと器量のよいロシア産の普通種には『バルボス』といふ名が専ら行はれますし、イギリス種には『ファニー』、クルリヤンデヤ種には『シヤロートカ』、フランス種ですと『ジュジュ』とか『ビジュ』とか、イスパニヤ種なら『カルロ』か『カタニヤ』かそのほか何やかと、ドイツ種なら『シピッツ』ぐらゐのところと並べ立てますと、補祭様はそこでわたくしを遮つて、『いや駄目だ、どこの邸にもそんな名の犬はゐなかつたやうな名を言ふんだ。お前はきつと知つてゐるに違ひない！』と駄々をおこねになります。どうしてお宥め申したらよいかしらと、わたくしは思ひましてね。」

「ほう、そこでどんな工合に宥めてやつたのか？」とトゥペローゾフは膝を乗り出した。

「だつて法主さま、なにしろその時は通風口のところの餘り長く立ちづめで、すつかり手足が凍りさうになつてゐた矢先ですので、何とかして一刻も早く御免を蒙りたい一心から、——實は補祭さま、もう一つ存じてをります呼名がございしますが、あなた様に申し上げてもしや御勘氣にでも觸れましてはと心配で、と申し上げますと、『いいや構はん、構はんから言つてみる』と大聲を出されます。そこでわたくしは、實はさる殿様のお邸の犬は『お名前は？』といふ名でございましたと申し上げまし

たところ、アヒル様は忽ちまごつかれて、『ばかなことをいふ奴だ、それともお前氣が變になつたのかい?』と仰せになります。いいえ、これでも氣は確かでございますが、とにかくさるモスクヴァの公爵様のお邸には『お名前は?』といふ名前の犬がをりましたので、と申しますと、アヒル・アンドレーイチはぼつぼつと湯氣を立てて怒り出され、物凄く劍幕で馬に拍車を呉れて、ぐいぐいと窓の方へつめ寄つて來られました。『ええこの老いぼれの恥知らずめが、よくもこのおれにそんなことをほざいたな。このおれの名がちゃんと洗禮名で、しかもおれが聖職者だといふことを知らんか?』と呶鳴られる始末でございます。それを無理やりに押し鎮めて、この『お名前は?』といふ名の出所來歴を篤と御説明申し上げますと、今度は今までの劍幕もどこへやら、馬上で躍り出されて、半外套のふところから例の小犬を取り出して、『おめでたう、お名前はちゃん!』と叫ばれたかと思ふと、喜び勇んでまつしぐらに馳せ戻つて行かれました。

「まつたく大きな子供ぢやのう。」と、サヴェーリイはにつこり笑つて呷いた。

「左様でございます、しよつちゆう御冗談ばかりで。」

「まああれのことを悪く思はんで呉れ。子供はめそ泣くよりは、何でもよいから遊んでゐて呉れるのが一番ぢや。あの男一人の身體のなかに千もの生命が燃えてゐるのに、居眠りをしてをれと無理強ひするのはむごいことぢや。」

「仰せの通りでございますよ。あれで亡くなる時はどんな御様子になられることやら、ほとほと見當がつき兼ねますほどで。」

「そりやわしにも見當がつかんのう」と法主は冗談を飛ばして、「あの男はそのまま死の否定ぢやよ。それはさうと、その『お名前は?』はどうなつたかの?」

「一體どうなつたと思召します、とにかく今の今までの犬には災難がついて廻つて離れませんのですが、さりとてあの犬がゐないでは夜も日も明けない始末でして。補祭さまはまつたく奇想天外な習慣を編み出されたのでございますよ。あなた様の御不在が淋しくて堪らなくおなりになりますと、あの方はすぐさま『お名前は?』ちやんを兩手に抱へて、驛馬車の宿へお出掛けになつて、玄關に腰をおろして待つておいでになります。そこへ誰かかうお偉いお方か、それとも奥方などが旅の馬車をお停めになりますと、補祭さまは早速、『笑つて御覽、犬つころ』と仰しやるのです。畜生ながら感心な奴で、につこり笑ふ、それが旅の方々には面白いので、つい、『和尚さん、その犬は何といふ名前ですか?』とお訊ねがある。待つてましたとばかり、『やつがれは和尚ではござらん、一介の補祭でございますわ、——わしの和尚は犬に喰はれて仕舞ひましたわ』と仰しやると、相手は重ねて、『だがその犬は何といふ名前ですか?』とお訊ねになります。そのお返事が、『この犬ですか、「お名前は?』といふんで』と來るもので、それが因でいつもきまつて争論になつてしまひます。で、補祭様が仰しやるには、『おれは腹癒せにあいつ等をみんな面と向つて犬ころ扱ひにしてやるんだが、これだけは流石の治安檢事だつて手も足も出んぢやらう』と、大得意でいらつしやいます。サヴェーリイ様、あの方としては、みんなこれはあなた様の敵討ちのつもりでいらつしやるのですが、一體どういふお考へで敵を討たれるものやら、そこまでは深くお考へではないやうで。それはさうとして、この犬のお